

三国志演義武力超百科

の頂は我に在り！

毛宗崗はいたい、我々を何百年も欺いてきたのか？

呂布は本当に天下第一なのか？

『三国志演義』六百年の論争に終止符を打つ。12の指標から真の武力ランキングを再構築する

仕年 / 著

墨軍師 / 武軍師 / 編集・校閲

三國志演義武力超百科

首席武評顧問 武軍師

特約戰略顧問 墨軍師

什年 著

三国志演義 武力超百科

『三国志演義』六百年の論争に終止符を打つ。12の指標から真の武力ランキングを再構築する——毛宗崗はいつたい、我々を何百年も欺いてきたのか？
呂布は本当に天下第一なのか？

著者 | 什年
特約戦略顧問 | 墨軍師
首席武評顧問 | 武軍師
責任編集 | 墨軍師、武軍師
表紙デザイン | 什年工作室
発行人 | 李家榮
電子書籍制作 | 什年工作室

出版者 | 什年
電子書籍形式 | EPUB
言語 | 日本語
刊行予定 | 2026 年
ISBN | 申請中
メール | jiarongli130@gmail.com

2026年 電子書籍初版発行

著作権所有。無断複製・転載を禁ずる。許可なく、いかなる形式による転載、複製、公衆への配布、クラウドへのアップロード、転売、転送、または商業利用を固く禁ずる。違反行為については、民事・刑事上の責任を厳正に追及する。

本電子書籍のメインストーリー版には、メインストーリー全編を収録している。紙書籍版とは表紙が異なる。紙書籍版限定の隠しエンディング、コレクターズ版限定『群芳演武録』、同限定『武巔零号図』は収録していない。



引

敵影空尋燕滿舟。

無言自有青山幽，

下視江海第一流。

天何烽雲幾度秋，



敗盡群雄紙上留。

求名三千珎如夢，

孤懷笑看萬事休。

獨坐松間聽雨柔，





『三国志演義』が世に出てから六百余年、武将の強弱をめぐる論争は一度として絶えることがなく、ついには華人文化圏における独特の言語現象にまでなった。かつての茶館や酒楼から今日のネット掲示板に至るまで、三国の文臣・猛将が話題に上れば、人々はいつも「文に第一なし、武に第二なし」という言葉をめぐって論争を繰り返してきた。

羅貫中は大筆を揮い、武の頂点を極める時代を描き、歴史上の人物たちに人の域を超えた戦いの雄姿を与えた。しかし、文学の筆致はしばしば感性的で、余白を残す。関羽の「万人の敵たる威」が黄忠の「百歩穿楊の技」とぶつかったとき、許褚の「怪力無双」が張飛の「天を震わせる咆哮」と対したとき、あるいは太史慈の「王を生け捕る勇」が孫策の「項羽の再来」と相まみえたとき、いったい何をもって強弱を定めるべきなのか。これこそが、この『三国志演義 武力超百科』を編纂した原点である。

筆者は、武力が単一の指標で表せる数値ではなく、まして現代のビデオゲームに見られる単純で固定的な攻撃力データでもないことをよく理解している。『三国志演義』の世界における武力とは、きわめて複雑な総合力である。典韋と許褚が数百合を戦っても決着しなかった驚異的な持久力であり、関雲長が酒の冷めぬ間に華雄を斬った際の雷霆万鈞の瞬発力であり、また趙子龍が幼主を抱き、長坂坡の万軍の中から逆境を突破した「一身これ胆」の勇でもある。

本書は、相対的に客観的かつ総合的な分析体系の構築を目指す。筆者は主観的な好悪を排し、「世間一般の見方」で武力を論じることを拒み、あくまで原典の本文から出発して、一つ一つの戦闘を「一コマずつ」検証するかのよう分析していく。年齢が武将の戦闘力に及ぼす苛烈な影響を考慮し、長沙城下における老将・黄忠と関羽の刀技の虚実を比較する。さらに、赤兎馬のような最高級の騎乗馬がもたらす持久力・機動力への加算、青龍偃月刀や方天画戟といった神兵利器による戦力増幅を解析し、士気の盛衰、戦場地形、詐敗の策、心理状態といった目に見えない変数までも分析対象に含める。

筆者の視野はピラミッドの頂点だけに限られない。虎牢関で三英を一人で迎え撃った呂布の「飛将」の勇から、後期に単騎で大軍を退けた文鸯の驚異的な戦いまで。五虎上將が天下に轟かせた赫々たる武功から、歴史の塵に埋もれながらも一瞬だけ驚くべき実力を示した高順や冷苞ら二線級の猛将、さらには乱世に埋もれた女傑までを視野に入れる。筆者は詳細な整理と相互比較を通じ、階層が明確で論理的に自己完結した三国武力ピラミッドを再構築し、あらゆる武将の武力評価に根拠を与えようと試みた。

本書を著すことは、原典「羅本」への最大の敬意であり、同時に「武」という一字への深い読み解きでもある。ここで読者が目にするのは、曖昧な「300合にわたる大戦」ではなく、本文の論理に基づく精密な推論と真相の解明である。本書は、すべての三国志ファンとゲーム開発会社のための手元に置けるリファレンスであり、また『三国志演義』の武力の謎を解く鍵でもある。

さあ、ページを開こう。理性的なデータ分析と感性的な歴史への郷愁のあいだを行き来しながら、金戈鉄馬の時代へと遡り、英雄たちの時代における「武」の伝説を、あらためて定義し直し、味わってほしい。

おそらく、「文には第一があり、武には最強がある」――文は孔明を首とし、武は最強者

が覇を唱える。それこそが、羅貫中が本当に我々に伝えたかった答えなのかもしれない。

では、「什年」が皆様の案内役となろう。さあ、私とともに！

天問

天問

いにしえの初め、
誰がその道を伝えたのか？
——いま問う、
武道の極みを。

天
命
即



前言

『三国志演義』は、正史『三国志』を基礎として再創作された文学の大作であり、後世の三国文化に計り知れない影響を与えてきた。一般には「七分が史実、三分が虚構」と言われるが、筆者は、その実質はむしろ「五分が史実、五分が虚構」に近いと考えている。源流に立ち返り、『三国志演義』における真の武将の強弱を探るのであれば、原作者・羅貫中の本意を絶対的な基準としなければ、武力ランキングの真髄には到達できない。

現在、最も広く流布しているのは、清代に毛宗崗父子が削除・改訂を施した「毛本」である。毛本では、武将同士の交戦に関わる重要な文言や戦闘の合数が数多く大幅に削られている。これは羅貫中が築いた本来の武力設定体系を深刻に歪めており、後世の読者が「毛本」だけを根拠にしたのでは、羅貫中の本意に沿った武力の強弱を導き出すことは到底できない。したがって、本書は武力ランキングを構築するにあたり、「毛本」を武力評価の基準として用いることを断固として退ける。

注：本書で【演義原文……】を引用する場合、その後の括弧内に付した（X本）は、その原文が収録される版本を示す。以後、（X本）の表記がない【演義原文……】は、すべて「葉本」とみなす。

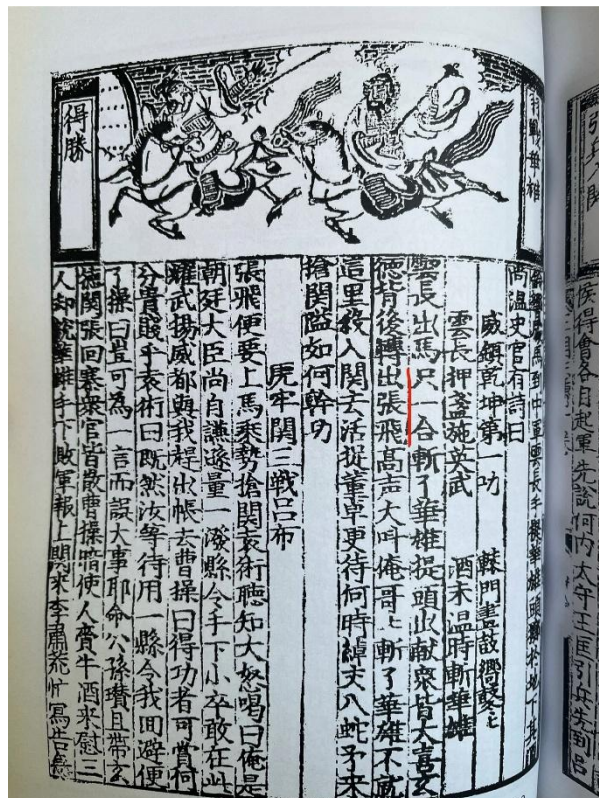
「温酒斬華雄」を例に見てみよう。

【雲長は出馬し、わずか一合で華雄を斬った】（葉本）

明代の「葉本」原文には、関羽がわずか「一合」で華雄を斬ったことが明記されている。

ところが、虎牢関時の関羽が虎牢関時の呂布を上回ると位置づけるうえで決定的なこの

「一合」は、「毛本」では容赦なく削除されてしまった（下図の赤線部分を参照）。



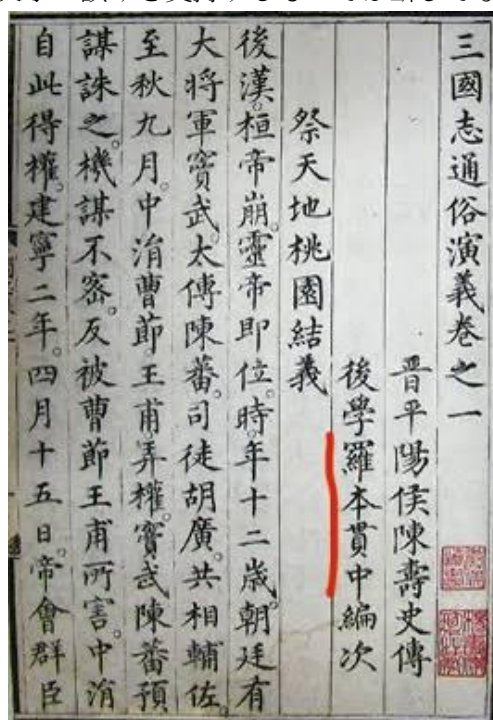
資料出典：『西班牙藏葉逢春刊本三國志史傳（上）』

「毛本」を通覧すると、このように武力データや原文に対する重大な削除・改竄は枚挙にいとまがない。これは、原作者・羅貫中が描いた武力観の本意を著しく踏みにじる越権行為にほかならない。もし毛氏父子が当時、別に一から新たな三国小説を書き上げ、羅氏の原作に手を入れて重要な戦局を勝手に削除・改変することがなかったなら、後世の武力評論家からこれほど激しい批判を浴びることもなかっただろう。

したがって、真に厳密な熟練の武力評論家は、「毛本」を弊履のごとく退け、より早期の古本へと遡る。そうして初めて、羅貫中が筆下に描いた武力の精神を、ありのままに復元することができる。

確かに、「毛本」の功績は文章を洗練し、『三国志演義』を文学史上の高みに押し上げた点にある。しかし、それを演義の武力ランキングの規範とするのは、木に登って魚を求めるに等しく、武力考証の参考価値は紙くず同然である。「毛本」の文章がいかに美しくとも、結局のところ、他人の成果を横取りし、原作の体系を歪めた「偽作」にすぎない。毛宗崗父子は原作者ではなく、せいぜい筆を弄した盗人同然の改編者にすぎず、真の『三国志演義』における「武」を代弁する資格などない。

結論として、本書で筆者が打ち立てる武力ピラミッドは、羅貫中の本意を正しく世に示すためのものであり、毛氏父子の誤りを支持するものでは断じてない！



資料出典：『三国志通俗演義』（嘉靖本）——『三国志演義』の公認原作者・羅貫中。

筆者は二十余年にわたり『三国志演義』の武力を研究してきたが、私情を言えば、とりわけ羅氏が描く五虎上將を愛している。長年の研究を重ねるうち、筆者は常識を覆す一つの事実気づいた。羅貫中自身は、実のところ呂布を『三国志演義』最強の武將として設定したことなど一度もないのである。そのため筆者は、生涯をかけて積み上げてきた研究成果をこの『三国志演義 武力超百科』に結集し、天下の読者に正しい武力の強弱を示すこ

とで、誤りを正して真実を明らかにし、羅貫中が意図した武力ランキングの本義を徹底的に復元したいと考えた。

さらに本書では、武将の特性と戦闘データに基づき、筆者が机上でシミュレーションした「夢幻単挑」の場面も随所に挿入する。これは「凶暴水墨」と「サイバーパンク」を融合させた暗黒の三国舞台であり、原作で決着のつかなかった武将たちの勝敗を補完するためのものである。物語は三国が晋に帰した後の残響を舞台とし、読者はこれを『三国志演義』から派生したパラレルワールドとして見てもよいし、この壮大な三国叙事詩の究極の完結編として楽しんでもよい。

幼い頃、筆者はよく街角の書店に入り浸り、本の山に身を潜めるようにして『三国志演義』を読みふけていた。頭の中ではいつも、「いったい誰が真の天下第一なのか？」と考え続けていた。武将同士が陣前で一騎討ちし、雌雄を決する光景に胸を躍らせた少年時代の憧れを、今こうして文字にして一冊の本として結実させられたことは、人生における大きな喜びである！

ここで、筆者を支え続けてくれた妻と家族の寛容と理解に、心から感謝したい。さらに、筆者のスーパーアシスタントである墨軍師、武軍師の力強い支援、そしてすべての協力者の尽力にも深く感謝する。本書の誕生には、多くの人々の心血が注がれている。そして何より、ページを開いてくださった一人ひとりの読者に、心から御礼申し上げたい。この大作が皆様の期待に背かぬ一冊となることを願っている！

三国文化をこよなく愛する台湾の作家として、筆者は世界中の三国志ファンの皆様との交流と切磋琢磨を心から歓迎する。下のQR Codeを読み取り、筆者のLINE専用コミュニティ（無料の三国志資料あり）へぜひご参加いただきたい：



『三国志演義 武力超百科』読者演武營

筆者メール：jiarongli130@gmail.com

各地の英雄豪傑が集い、ともに盛り上げてくださることを願っている。演義における武力考察であれ、正史における実際の武勇であれ、何でも自由に語り合っていたきたい。読者の皆様のご健康とご多幸、そして万事順調を心よりお祈り申し上げます！

最後に、きわめて重要な読書上の提案が一つある。本文へ入る前に、必ず本書付録（P. [423]）に収録した『三国志演義』全547戦闘事例一覧に目を通し、まず武力についての基

礎的なイメージをつかんでほしい。本書におけるあらゆる武評の推論と戦力分析は、鉄のように揺るがぬこれらの実戦記録を土台としている。そして、その実戦は羅先生の筆から生まれたものである。

結局のところ、演義における武力の高低を決めるのは、原作者・羅貫中

その人なのである。



初稿完成 | 2025.4.23

我
奈
我
何
我

『三国志演義 武力超百科』目次総覧

一、『三国志演義』の起源.....	P. [22]
二、『三国志演義』版本選択.....	P. [29]
三、『三国志演義』基本武力理論.....	P. [47]
第一節：武力階級と分類体系の詳細.....	P. [48]
第二節：武力階級差（段階差）定量化システム.....	P. [50]
第三節：超一流武力階級の基準原点——許褚.....	P. [54]
第四節：時間単位の定量化——「一合」の定義.....	P. [57]
第五節：極限戦闘単位——「一合未滿」の定義.....	P. [59]
第六節：威圧の極致——「交鋒を恐れて逃走」の判定.....	P. [62]
第七節：「交鋒を恐れて逃走」の真の戦力——「仮想交鋒」の定量化推論.....	P. [64]
第八節：「数合」の数値定量化基準.....	P. [66]
第九節：「半晌」の時間と合数換算.....	P. [67]
第十節：「多時」の定量化と「三英戦呂布」の実戦復元.....	P. [68]
第十一節：「戦不倒」の真相と「丁字戦陣」の解明.....	P. [72]
第十二節：「囲攻された者は囲攻側の一人より強い」という論理的誤謬.....	P. [78]
第十三節：「有効な詐敗」と「無効な詐敗」の判別基準.....	P. [81]
第十四節：「恐有疏失」の信頼性検証.....	P. [83]
第十五節：「飛び道具」も武力の中核要素.....	P. [85]
第十六節：「百発百中」の発動メカニズムと弱点.....	P. [86]
第十七節：武力変動理論——感情と絶境による「爆発」メカニズム.....	P. [88]
第十八節：武力変動に影響する三大要因.....	P. [91]
第十九節：武力変動値——「固定点」から「波動区間」へ.....	P. [93]
第二十節：上限武力と下限武力——「田忌の競馬」の詭弁を打ち破る.....	P. [95]
第二十一節：絶望の鉄則——軍隊の囲攻＞武将の囲攻.....	P. [98]
第二十二節：【十二維ビッグデータモデル】——三国武力の基準を再構築する.....	P. [100]
四、極限武評と洛陽争覇戦.....	P. [106]
五、【封神の瞬間】真の天下第一決戦.....	P. [232]
六、『三国志演義』541名武将ランキング総覧.....	P. [367]
七、番外編：『三国志』正史武力ランキング.....	P. [371]
八、『三国志』正史武将ランキング表.....	P. [422]
九、付録：『三国志演義』全547戦例.....	P. [423]
十、後記：百年後の仰望者へ.....	P. [624]



全 550 名 人物画数索引

【二画】(2 名)

丁奉 P. [304]

丁原 P. [351]

【三画】(7 名)

于禁 P. [279]

于吉 P. [369]

于銓 P. [348]

干糜 P. [305]

大喬 P. [358]

小喬 P. [358]

兀突骨 P. [294]

【四画】(38 名)

文醜 P. [148]

文鴛 P. [300]

文聘 P. [315]

文欽 P. [361]

文虎 P. [361]

王平 P. [308]

王双 P. [306]

王匡 P. [353]

王威 P. [320]

王方 P. [269]

王忠 P. [323]

王直 P. [324]

王基 P. [324]

王傾 P. [343]

王植 P. [333]

王允 P. [355]

王必 P. [346]

王濬 P. [364]

牛金 P. [304]

牛輔 P. [344]

太史慈 P. [290]

公孫瓚 P. [264]

公孫淵 P. [361]

公孫瓚四健将 P. [364]

木鹿大王 P. [360]

方悦 P. [263]

尹礼 P. [326]

尹楷 P. [332]

戈定 P. [338]

卞喜 P. [333]

卞丘儉 P. [361]

孔秀 P. [331]

孔伈 P. [351]

仇覽 P. [345]

孔融 P. [354]

【五画】(13 名)

司馬懿 P. [347]

司馬師 P. [342]

司馬昭 P. [362]

司馬炎 P. [362]

史蹟 P. [283]

史煥 P. [289]

左慈 P. [369]

甘寧 P. [293]

甘氏 P. [362]

田統 P. [349]

申義 P. [360]

北斗 P. [369]

民王 P. [369]

【六画】(19 名)

朱然 P. [328]

朱桓 P. [312]

朱讚 P. [285]

朱儁 P. [323]

朱光 P. [339]

朱異 P. [324]

朱褒 P. [341]

伍伯 P. [314]

伍孚 P. [322]

伍習 P. [344]

全琮 P. [347]

成宜 P. [328]

成廉 P. [325]

成濟 P. [349]

成何 P. [339]
 忙牙長 P. [284]
 羊祐 P. [362]

【七画】(47 名)

吳蘭 P. [319]
李典 P. [277]
 李通 P. [280]
 李豐 P. [271]
 李蒙 P. [332]
 李別 P. [331]
 李樂 P. [336]
 李鵬 P. [342]
 李儒 P. [355]
 何平 P. [296]
 何儀 P. [271]
 宋謙 P. [320]
 辛弘 P. [343]
 岑利 P. [346]
 岑威 P. [341]
 杜預 P. [362]
 沈瑩 P. [350]
 汪昭 P. [277]
呂蒙 P. [317]
 呂公 P. [303]
 呂稀 P. [326]
 呂翔 P. [334]
 呂常 P. [346]
邢道榮 P. [278]

【八画】(15 名)

孟達 P. [304]
 孟獲 P. [347]
 宗寶 P. [270]
周泰 P. [296]
 周瑜 P. [358]
 周昔 P. [349]
 金環三結 P. [284]
 昌奇 P. [292]

【九画】(16 名)

姜維 P. [298]
 紀靈 P. [272]
 胡軫 P. [303]
 胡卓兒 P. [363]
 侯選 P. [327]
 南華老仙 P. [369]
 卑衍 P. [341]

任夔 P. [294]
 朵思大王 P. [360]

吳懿 P. [280]
李嚴 P. [313]
 李封 P. [271]
 李堪 P. [327]
 李暹 P. [331]
 李催 P. [322]
 李異 P. [340]
 李肅 P. [355]
 李意 P. [369]
何慢 P. [312]
 何進 P. [351]
 宋憲 P. [273]
 車胄 P. [273]
 岑璧 P. [277]
 杜遠 P. [336]
 杜路 P. [359]
冷苞 P. [280]
呂布 P. [168]
 呂曠 P. [277]
 呂敦 P. [326]
 呂虔 P. [326]
 呂健 P. [321]
 呂伯奢 P. [351]

孟坦 P. [276]
 孟優 P. [347]
 武安國 P. [263]
周倉 P. [316]
 周善 P. [332]
 周平 P. [340]
典韋 P. [159]

皇甫嵩 P. [351]
 段煨 P. [344]
 胡赤兒 P. [344]
侯成 P. [318]
 南斗 P. [369]
 俞涉 P. [286]
祝融 P. [305]

祖茂 P. [328]

【十画】(83 名)

孫策 P. [291]孫堅 P. [317]

孫峻 P. [348]

孫夏 P. [335]

孫歆 P. [350]

孫翊 P. [345]

徐晃 P. [274]徐質 P. [308]

徐商 P. [320]

徐氏 P. [358]

馬岱 P. [280]

馬忠 (吳国) P. [325]

馬漢 P. [328]

馬延 P. [338]

高順 P. [287]

高昇 P. [263]

夏侯淵 P. [292]

夏侯尚 P. [281]

夏侯存 P. [332]

夏侯懋 P. [329]

夏侯傑 P. [343]

夏恂 P. [340]

袁紹 P. [322]

袁術 P. [351]

袁紹十数将 (17 名) P. [364]

耿武 P. [334]

凌統 P. [293]

晏明 P. [334]

荀覬 P. [349]

秦琪 P. [333]

秦朗 P. [363]

秦慶童 P. [363]

師纂 P. [349]

郝昭 P. [361]

【十一画】(138 名)

張飛 P. [189]張郃 P. [306]張任 P. [312]張翼 P. [315]

張虎 (韓当) P. [320]

張先 P. [271]

張橫 P. [327]

張衛 P. [334]

祖鶴 P. [336]

孫權 P. [322]

孫桓 P. [314]

孫觀 P. [326]

孫礼 P. [347]

孫高 P. [345]

孫仁 (孫尚香) P. [359]

徐盛 P. [311]

徐榮 P. [296]

徐庶 P. [357]

馬超 P. [200]

馬騰 P. [354]

馬忠 (蜀国) P. [360]

馬玩 P. [327]

馬謖 P. [361]

高覽 P. [287]夏侯惇 P. [286]

夏侯蘭 P. [277]

夏侯霸 P. [321]

夏侯恩 P. [333]

夏侯德 P. [339]

夏侯玄 P. [363]

袁尚 P. [289]

袁譚 P. [336]

袁遺 P. [354]

桓嘉 P. [342]

耿紀 P. [346]

凌操 P. [330]

荀正 P. [271]

荀彧 P. [355]

秦良 P. [341]

秦朗之弟 P. [363]

唐咨 P. [343]

郝萌 P. [272]

張遼 P. [288]

張角 P. [350]

張苞 P. [308]

張繡 P. [356]

張虎 (趙雲) P. [332]

張英 P. [305]

張普 P. [311]

張濟 P. [329]

張顗.....	P. [338]	張尚.....	P. [338]
張南.....	P. [337]	張顧.....	P. [337]
張宝.....	P. [334]	張燕.....	P. [356]
張楊.....	P. [344]	張超.....	P. [354]
張約.....	P. [348]	張梁.....	P. [350]
張邈.....	P. [354]	張嶷.....	P. [305]
張勲.....	P. [344]	曹仁.....	P. [311]
曹洪.....	P. [293]	曹彰.....	P. [309]
曹休.....	P. [346]	曹豹.....	P. [271]
曹遵.....	P. [294]	曹性.....	P. [325]
曹操.....	P. [322]	曹真.....	P. [360]
曹丕.....	P. [357]	曹髦.....	P. [363]
曹魏八裨將.....	P. [365]	曹魏四猛將.....	P. [365]
曹營五十余名將（50 名）.....	P. [365]	許褚.....	P. [108]
許相.....	P. [351]	許攸.....	P. [357]
許貢三刺客.....	P. [364]	郭淮.....	P. [321]
郭汜.....	P. [323]	郭勝.....	P. [350]
郭嘉.....	P. [355]	郭氏.....	P. [359]
陳武.....	P. [313]	陳忼.....	P. [279]
陳泰.....	P. [342]	陳式.....	P. [339]
陳生（張飛）.....	P. [334]	陳生（孫策）.....	P. [335]
陳造.....	P. [341]	陳能.....	P. [337]
陳橫.....	P. [336]	陳矯.....	P. [359]
陳宮.....	P. [357]	陳壽.....	P. [352]
陳登.....	P. [356]	陳珪.....	P. [356]
崔勇.....	P. [335]	崔禹.....	P. [340]
常雕.....	P. [312]	常雍.....	P. [342]
淳于芳.....	P. [333]	淳于丹.....	P. [340]
梁興.....	P. [327]	梁剛.....	P. [319]
睦固.....	P. [345]	陶謙.....	P. [354]
陸遜.....	P. [359]		
【十二画】（23 名）			
黃忠.....	P. [224]	黃蓋.....	P. [303]
黃祖.....	P. [303]	黃邵.....	P. [335]
黃氏（黃月英）.....	P. [358]	程普.....	P. [302]
程遠志.....	P. [331]	程欽.....	P. [327]
程昱.....	P. [355]	焦觸.....	P. [337]
焦炳.....	P. [330]	焦伯.....	P. [349]
越吉.....	P. [315]	紫虛上人.....	P. [369]
彭安.....	P. [336]	喬蕤.....	P. [287]
喬瑁.....	P. [354]	貂蟬.....	P. [354]
華雄.....	P. [267]	鄂煥.....	P. [314]
傅僉.....	P. [324]	傅彤.....	P. [328]
傅英.....	P. [345]		

【十三画】(34 名)

楊阜.....	P. [318]	楊仁.....	P. [313]
楊昂.....	P. [323]	楊秋.....	P. [328]
楊齡.....	P. [332]	楊欣.....	P. [343]
楊白.....	P. [339]	楊奉.....	P. [329]
楊鋒.....	P. [359]	楊醜.....	P. [345]
楊阜七兄弟.....	P. [364]	楊鋒五子.....	P. [365]
賈華.....	P. [320]	賈詡.....	P. [355]
雷同.....	P. [319]	鄒氏.....	P. [356]
鄒靖.....	P. [350]	万政.....	P. [332]
雍闓.....	P. [340]	董卓.....	P. [321]
董襲.....	P. [319]	董禧.....	P. [341]
董茶奴.....	P. [346]	董承.....	P. [357]

【十四画】(12 名)

趙雲.....	P. [241]	趙弘.....	P. [335]
趙統.....	P. [361]	趙広.....	P. [361]
趙範.....	P. [358]	廖化.....	P. [305]
臧霸.....	P. [316]	裴元超.....	P. [276]
翟元.....	P. [339]	管亥.....	P. [269]
管輅.....	P. [369]	甄氏.....	P. [357]

【十五画】(44 名)

劉備.....	P. [316]	劉封.....	P. [304]
劉辟 (典韋).....	P. [270]	劉辟 (高覽).....	P. [288]
劉峻.....	P. [328]	劉岱.....	P. [323]
劉曄.....	P. [356]	劉表.....	P. [355]
劉寧.....	P. [359]	劉焉.....	P. [350]
劉協.....	P. [355]	劉禪.....	P. [362]
潘璋.....	P. [284]	潘遂.....	P. [285]
潘鳳.....	P. [286]	審配.....	P. [357]
墨觴.....	P. [338]	諸葛亮.....	P. [360]
諸葛尚.....	P. [318]	諸葛瞻.....	P. [362]
諸葛誕.....	P. [348]	諸葛恪.....	P. [348]
樂進.....	P. [315]	樂就.....	P. [320]
摩沙柯.....	P. [325]	慕容烈.....	P. [330]
樊稠.....	P. [329]	樊能.....	P. [343]
樊陵.....	P. [351]	樊珣 (樊氏).....	P. [365]
鄧艾.....	P. [300]	鄧忠.....	P. [300]
鄧賢.....	P. [325]	鄧茂.....	P. [329]
鄧龍.....	P. [319]	鄧芝.....	P. [360]
蔡瑁.....	P. [303]	蔡陽.....	P. [333]
蔡中.....	P. [337]	蔡勲.....	P. [337]
蔣欽.....	P. [311]	蔣舒.....	P. [361]
鄭文.....	P. [347]	鄭倫.....	P. [342]

【十六画】(7 名)

盧植.....	P. [351]	盧遜.....	P. [349]
---------	----------	---------	----------

鮑隆..... P. [345]
 鮑信..... P. [354]
 麴義..... P. [265]

【十七画】(31 名)

薛顒..... P. [285]
 薛蘭..... P. [343]
 鍾紳..... P. [331]
 鍾進..... P. [338]
 鍾会..... P. [362]
 韓德..... P. [284]
 韓瑤..... P. [285]
 韓琪..... P. [285]
 韓猛..... P. [323]
 韓福..... P. [333]
 韓宗..... P. [342]
 韓馥..... P. [352]
 謝琪..... P. [339]
 糜竺..... P. [356]
 糜氏..... P. [362]
 蹇碩..... P. [350]

【十八画】(3 名)

魏延..... P. [281]
 顏良..... P. [136]

【十九画】(8 名)

龐德..... P. [281]
 閔羽..... P. [211]
 閔平..... P. [304]
 譚雄..... P. [340]

【二十画】(7 名)

嚴顏..... P. [317]
 嚴興..... P. [336]
 嚴整..... P. [344]
 蘇飛..... P. [337]

【二十一画】(1 名)

顧奮..... P. [348]

【二十二画】(2 名)

龔都..... P. [321]

鮑忠..... P. [335]
 穆順..... P. [331]

薛則..... P. [341]
 薛喬..... P. [347]
 鍾縉..... P. [331]
 鍾繇..... P. [338]
 韓当..... P. [302]
 韓瑛..... P. [284]
 韓瓊..... P. [285]
 韓浩..... P. [281]
 韓遂..... P. [326]
 韓暹..... P. [329]
 韓忠..... P. [335]
 謝雄..... P. [314]
 蹋頓..... P. [337]
 糜芳..... P. [356]
 戴員..... P. [363]

魏統..... P. [273]

龐統..... P. [358]
 閔興..... P. [308]
 閔紀..... P. [334]
 刃洪..... P. [345]

嚴白虎..... P. [336]
 嚴綱..... P. [335]
 嚴氏..... P. [357]

龔起..... P. [315]

虎牢關前第一關

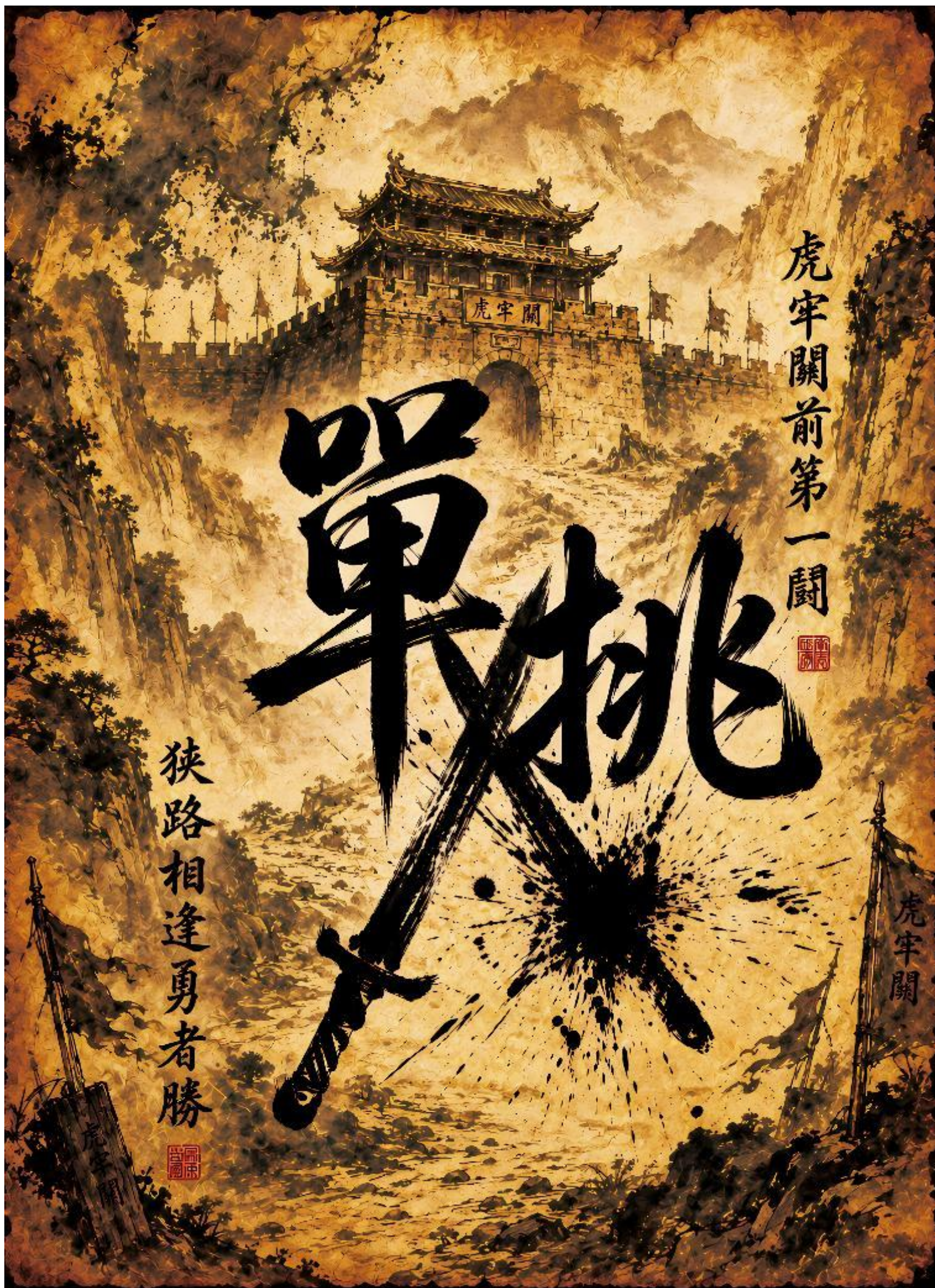


單挑

狹路相逢勇者勝



虎牢關



『三国志演義』の起源



資料出典：『三国志平話』——『三国志演義』より早く成立した三国物語。

序：『三国志演義』の源流と変容

『三国志平話』は『三国志演義』の原型である。『演義』で広く知られる数々の虚構エピソード——たとえば「三英戦呂布」「貂蟬の由来」「孔明の東風を借りる」など——はいずれも『平話』に源を持つ。羅貫中は『平話』の物語構造を参照し、それをもとに新たな三国叙事詩を創り上げた。以下、『平話』に見える武力に関する重要な原文を列举し、『演義』との違いを読者に比較していただく。

一、関羽と張飛の初期設定

【さて、一人の男がいた。姓は関、名は羽、字は雲長。平陽蒲州解良の人である。神々しい眉と鳳凰のような目、巻きひげをたくわえ、顔は紫玉のようで、身の丈は九尺二寸であった】

解析：『平話』では関羽の顔を「紫玉」のようだと描いており、『演義』で広く知られる「赤い顔」のイメージとは異なる。

【また一人、姓は張、名は飛、字は翼徳。燕邦涿郡范陽の人である。豹のような頭に大きく見開いた目、燕のような顎に虎のようなひげを持ち、身の丈は九尺余りであった】

解析：『平話』では張飛の身長は九尺余りとされるが、『演義』では八尺へと引き下げられている。

二、虎牢関：張飛の封神の戦い

【虎牢関で温侯・呂布が戦いを挑んでいるとの報が入った……張飛は呂布と二十合戦い、勝負はつかなかった。関公は怒り、馬を駆って刀を振るい、二将で呂布に挑んだ。先主も見えていられず、双股剣を手に加わり、三騎で呂布と戦うと、呂布は大敗して逃げ、北西の虎牢関へ上った】

解析：これこそ『演義』で名高い「三英戦呂布」の場面であり、その物語構造は実際には『平話』から採られている。しかし、この先の展開はまったく異なる。

【翌日、呂布は関を下りて叫んだ。「大目の男、出てこい！」張飛は激怒して出馬し、丈八神矛を手に、両目を大きく見開いて呂布へまっしぐらに突き進んだ。二騎が交わり、三十合戦っても勝負はつかない。生来戦いを好む張飛は好敵手に出会い、さらに三十合戦い、呂布を旗で顔を覆うほど追い詰めた。張飛は神のごとく、呂布は恐れを抱いて馬首を返し関へ退き、門を固く閉ざして出てこなかった】

解析：『平話』の虎牢関の戦いでは、張飛はわずか六十合で呂布を「撃破」し、ついには呂布を怯ませている。しかし羅貫中では、『演義』ではこの「張飛が呂布に勝つ」という設定を採用しなかった。

三、貂蟬の出自の謎

【驚いた貂蟬は慌ててひざまずき、隠し立てもできず、ありのままを語った。「わたくしはもと任姓で、幼名を貂蟬と申します。家長は呂布でございますが、臨洮府で生き別れて以来、今に至るまで会えておりません。それゆえ香を焚いていたのです。」丞相は大いに喜び、「漢の天下を安んずるのは、この婦人である！」と言った】

解析：『平話』が「貂蟬」という人物を初めて創作し、後に羅貫中がこれを受け継いだ。注目すべきは、『平話』の設定では貂蟬はもと任姓であり、しかも元来、呂布の妻であったという点である。

四、張飛、三度呂布を破る

【翌日になると、張飛は再び十八騎を率いて出陣し、呂布と戦った。呂布は言った。「賊将め、何度も繰り返し現れるのは、必ず援軍を求めているからだ。」温侯はこれを支えきれず、張飛は十八騎を率いて陣を突き抜けていった】

解析：これは『平話』における張飛の三度目の呂布撃破である。これに対し、『演義』ではこの場面を「呂布はあえて迫らなかった」と改めている。ここから『平話』作者の武力設定上の本意——張飛は呂布より強い——が明確に読み取れる。

五、夏侯惇の恐るべき実力

【夏侯惇が出て呂布と戦った。数合も経たぬうちに呂布は詐敗し、夏侯惇は急いで追った。呂布が矢を放つと、夏侯惇の左目に命中した。夏侯惇は落馬して矢を抜き、「父の精、母の血、これを捨てるわけにはいかぬ」と言うと、その眼球を一口で食らった。そして再び馬に乗って戦った。呂布は「この者、ただ者ではない」と言い、ついに大敗した】

解析：『平話』では呂布自身が夏侯惇の目を射抜いている（『演義』では曹性に変更）。ところが夏侯惇は爆発的な力を見せた後、なんと「呂布を大敗」させる。戦績を比較すると、夏侯惇は「数合も経たぬうち」の戦闘後に呂布を大敗させており、張飛が呂布を破る

のに「六十合」を要した実績を上回る。つまり『平話』の武力体系では、夏侯惇の実力は張飛を大きく凌いでいる。

【さらに三日後、呂布はまた戦いを挑んだ。張飛と呂布は三百余合まで戦ったが、勝負はつかなかった】

解析：これは両者の四度目の対戦であり、張飛と呂布は三百余合の大戦の末、引き分けた。

 戦力推移：夏侯惇＞張飛＞呂布

六、趙雲と顔良・文醜

【皇叔が階を下りて見ると、客人は恒山の趙子龍であった。趙雲と相まみえ、階上へ招いた。玄德がその苦境を訴え、趙雲は言った。「青州の袁譚は決断力に欠ける。信都へ向かい、袁紹に会われるのがよい。」皇叔とともに馬に乗り、西へ信都——現在の冀州——を目指した】

解析：趙雲の最初期の呼称は、実は私たちがよく知る「常山趙子龍」ではなく、「恒山趙子龍」であった。

【曹操が顔良と言葉を交わすと、顔良は怒って言った。「曹賊、逃げるな！」馬を駆り、槍を構えて曹公へまっしぐらに襲いかかった。夏侯惇が出馬して相対し、およそ三十合戦ったところ、夏侯惇は大敗した】

解析：顔良は三十合で夏侯惇を撃破しており、その恐るべき実力は張飛を大きく上回る。

【関公は寨を出て刀を携え馬に乗り、高所から顔良の麾蓋を見て、それが顔良のものだと見定めた。十万の兵が陣営を取り囲んでいるのを見ると、雲長は単騎で刀を手に寨へ駆け込み、顔良が寨中にいるのを見てもためらうことなく、一刀で顔良の首を斬り落とした……曹公は言った。「張飛はさらに強い！」】

解析：関羽は一合にも至らず顔良を瞬殺した。しかも『平話』には、『演義』で言われるような「奇襲」という要素はまったく存在しない。

【関公は言葉も交わさず、そのまま文醜へ向かった。交戦は十合にも達せず、文醜は敗れた……関公は文醜を討ち、文醜を見据えるや斬りつけ、肩から脇へかけて真っ二つにした】

解析：関羽は十合にも満たず文醜を撃破した。文醜は明確に顔良より強い。

 戦力推移：関羽＞文醜＞顔良＞夏侯惇＞張飛＞呂布

七、趙雲の位置づけ

【趙雲が使う槍は涯角槍といい、海角天涯に敵なし。三国志では張飛を除けば第一の槍である……張飛は激怒し、丈八鋼矛を手に趙雲へ向かった。二騎が交わり、二本の槍は大蛇のように行き交い、三十合にわたり激しく戦った。張飛は怒って言った。「槍を使う者は見てきたが、この男は本当に強い！」さらに三十合戦うと、趙雲は力が続かず、馬を返し

て本陣へ敗走した】

解析：趙雲も呂布も、同じく六十合で張飛に敗れている。『平話』にも五虎将という概念があり（趙雲は張飛と並列）、さらに槍は戟より強く位置づけられ、趙雲は張飛に次ぐ第一の槍とされる。呂布が張飛に三度敗れていることも考慮すれば、趙雲は呂布よりわずかに上と判断できる。

 戦力推移：関羽＞文醜＞顔良＞夏侯惇＞張飛＞趙雲～呂布

八、孔明と魏延

【さて諸葛は身の丈九尺二寸、年は三十になったばかりで、ひげは烏のように黒く、爪は三寸、美丈夫であった】

解析：『平話』の孔明は身長九尺二寸とされ、きわめて長身である（『演義』では八尺）。

【張飛はまた韓国忠と対陣した。「胡漢よ、また出てきたか！」張飛は馬を交え、およそ十合戦っても勝負はつかなかった。前後三日にわたり、使者を出して軍師を呼び寄せた。張飛は軍師を寨へ迎え、軍師に言った。「もしこの人を得ることができれば、漢の天下が立たぬことなど何を憂えよう！」】

解析：韓国忠は張飛と三日にわたり戦って引き分けた。張飛のほうが総合的な戦績が多いため、張飛を韓国忠よりわずかに上と判定する。

【翌日、両軍が対陣すると、魏延は韓国忠を馬下に斬り落とした】

解析：魏延は「張飛と引き分けた」韓国忠を斬殺できる。これは魏延の実力がきわめて高く設定されていることを示す。

 戦力推移：関羽＞魏延＞文醜＞顔良＞夏侯惇＞張飛～韓国忠＞趙雲～呂布

九、全書最強：黄忠

【統は言った。「この者は鄂郡の人で、姓は黄、名は忠、字は漢升である。」軍師は魏延に戦わせた。二日にわたって勝負はつかなかった】

解析：魏延と黄忠は二日間激戦し、勝負はつかなかった。

【張飛を出して対陣させ、黄忠と十合戦ったが、また勝負はつかなかった……張飛と馬を交えて100合まで戦ったが、なお勝負はつかなかった。さらに魏延を出し、二将で黄忠に挑んだ。黄忠の威武はますます高まり……（関羽、張飛、魏延VS黄忠）四騎が交戦すると、一筋の血が上がり、一将が落馬した。黄忠の馬が倒れたので、黄忠は刀を振るって徒歩で三将と戦った。関公は言った。「これは真の大丈夫だ。世に並ぶ者はいない！」軍師は大声で叫んだ。「三将、馬を止めよ！」】

解析：この戦闘事例はまさに驚天動地である！ 関羽、張飛、魏延という三人の最上級猛将が手を組み、黄忠を包囲攻撃した。黄忠は不運にも落馬したにもかかわらず、徒歩のまま騎馬の猛将三人を正面から受け止めている。この『平話』版「三英戦黄忠」は、相手側の陣容だけを見ても虎牢関の劉備・関羽・張飛の組み合わせをはるかに上回る。それでも黄

忠は絶境の中で一步も崩れず、孔明が驚愕して戦いを止めるまで持ちこたえた。

先の「二日間、魏延と引き分けた」戦いがまだ互いの力量を探る段階だったとしても、この一戦で「単騎で三将を拒み」、しかも虎牢関の呂布のように敗走しなかった事実によって、黄忠が『三国志平話』における武力の天井であることは完全に確定する。

【夏侯惇が出馬し、马超と戦った。数合も経たぬうちに马超は詐敗し、夏侯惇が追った。马超は振り返って夏侯惇へ一矢を放ち、危うく命を奪うところであった】

解析：马超は数合も経たぬうちに矢で夏侯惇を破っており、その位置づけは顔良を瞬殺できる関羽より下となる。

 戦力推移：黄忠＞関羽＞马超＞魏延＞文醜＞顔良＞夏侯惇＞張飛～韓国忠＞趙雲～呂布

十、鉄臂將軍：趙雲の敗戦

【軍師は言った。「城内には蜀の将がおり、自ら鉄臂將軍・張益と称している。その鋭鋒は当たるべからずで、趙雲を破った」】

解析：張益（鉄臂將軍）は、合数不明で趙雲を撃破している。

【軍師は言葉を尽くして張益を説得したが、従わず、張飛と馬を交えて戦い、三日間勝負がつかなかった。およそ千百余合を戦い、前後一か月にわたって紫烏城を落とすことができなかった】

解析：張益と張飛は三日間、千百余合にわたって大戦し、勝負はつかなかった。

 戦力推移：黄忠＞関羽＞马超＞魏延＞文醜＞顔良＞夏侯惇＞張飛～張益～韓国忠＞趙雲～呂布

十一、黄忠、張任を速斬

【蜀には元帥の張任という将がおり、三合にも達せず黄忠に馬下で斬られた】

解析：黄忠は三合にも満たず張任を斬殺している。関羽が一合にも至らず顔良を斬り、十合にも満たず文醜を破ったことを参照すれば、張任の実力は文醜と顔良の間に位置する。

 戦力推移：黄忠＞関羽＞马超＞魏延＞文醜＞張任＞顔良＞夏侯惇＞張飛～張益～韓国忠＞趙雲～呂布

十二、五虎将の初出

【武侯は魏延に東へ向かわせ、马超を迎え撃たせた。両軍が対陣すると、马超は詐敗し、魏延に一矢を射た】

解析：马超は魏延に一矢を当てたが、明確な勝敗はつかなかった。

【関公を寿亭侯に、張飛を西長侯に、马超を定遠侯に、黄忠を定乱侯に、趙雲を立国侯に封じた。皇叔は恩旨をもって五虎將軍に封じた】

解析：ここから、『平話』は『演義』より早く「五虎将」という概念を確立していたことが分かる。

【翌朝、両軍が対陣し……夏侯惇を出馬させた。劉封がこれと交戦し、夕刻になると双方それぞれ軍を収めて寨へ戻った】

解析：劉封と夏侯惇は丸一日激戦して互角だった（夏侯惇と引き分けられるということは、張飛より上であることも意味する）。

【そこで軍を率いて山を下り、黄忠と馬を交えた。夏侯淵は三合にも達せず、大敗して山上へ逃げた】

解析：黄忠は三合にも満たず夏侯淵を大敗させた。

🏆 戦力推移：黄忠＞関羽＞马超＞魏延＞夏侯淵～文醜＞張任＞顔良＞夏侯惇～劉封＞張飛～張益～韓国忠＞趙雲～呂布

十三、関索と姜維の惨敗

【太守・呂凱は、軍師が軍を五路に分けて民を殺害していると言った。三万の軍を率いて出戦すると、関索は詐敗した】

解析：『平話』には『演義』より早く「関索」という人物が登場していたことが分かる。

【民が司馬懿のもとへ駆け込み、武侯が死んだと告げた。司馬懿はこれを聞くと軍を率い、武侯の遺体を奪おうとした……姜維は激怒し、馬を駆って刀を横たえ、司馬懿へまっしぐらに向かった。二人は交戦したが、数合も経たぬうちに姜維は敗走し、司馬懿が後を追った】

解析：姜維はなんと「数合も経たぬうち」に司馬懿に敗れてしまう！ これは『演義』の読者には想像しがたい展開である。この一戦は、小説における武力の強弱が作者の一念に委ねられていることを端的に示す。作者の筆がそう定めれば、ひよこでさえ大虎をぶち倒せるのである。

🏆 総括：『三国志平話』最終武力ランキング

以上の戦績から推論すると、本書の武力ピラミッドは次のようになる：

- 【神级】：黄忠（一人で三将と戦い無敗）
- 【近神级】：関羽、马超、魏延
- 【準神级】：夏侯淵、文醜、張任、顔良
- 【一流】：夏侯惇、劉封
- 【二流】：張飛、張益、韓国忠
- 【三流】：趙雲、呂布（両者とも二流に敗れた経験あり）
- 【末流】：司馬懿、姜維

📖 筆者結語

『平話』における黄忠の「一人で魏延・関羽・張飛の三将と戦い」、なお一度も敗れなかったという恐るべき描写を見れば、「平話最強武将」の地位にふさわしいことは疑いなし

い。しかし羅貫中は『演義』を創作する際、黄忠のこの驚異的な武力表現を取り上げず、関羽一人と互角に戦う程度へと抑えた。これは大幅な弱体化である。

ここから分かるのは、自由奔放な小説創作では、武力設定も作者の人物嗜好に大きく左右されるということである。作者は自分の愛する武将を思うままに持ち上げることができる。『平話』の作者は黄忠を偏愛し、彼を第一に据えた。では、『演義』の作者・羅貫中はいったい誰を第一に押し上げようとしたのだろうか？



『三国志演義』 版本選択

一、学者研究の結論

『三国志演義』は今日まで数多くの版本が伝わっている。各版本の修訂者は、しばしば個人的な立場や好みによって、原作者・羅貫中の重要な文言や対戦の合数を勝手に改めてきた。その結果、後世の読者は誤導され、羅貫中の本意から外れた誤った武力ランキングを生み出すことになった。

記述上の便宜のため、本書では以下の略称を用いる。羅貫中の原作版本を「羅本」、葉逢春刊本を「葉本」、余象斗刊本を「余本」、嘉靖元年刊本を「嘉本」とする。（注：「葉本」は現存部分に欠落が多いため、内容の近い「余本」を補完として用いる。）

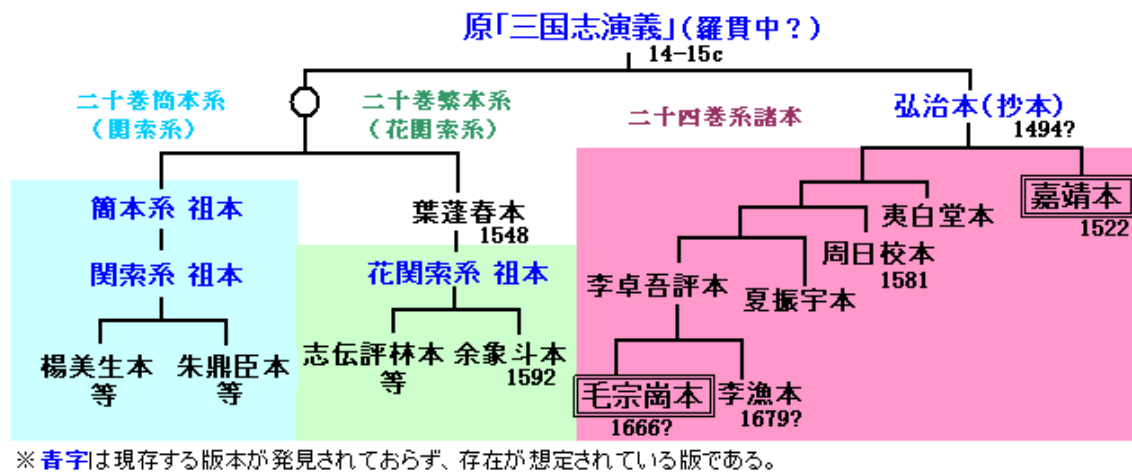
最も真実に近い武力ランキングを復元するため、第一に採用すべきなのは「羅本」——すなわち羅貫中自身が書いた『三国志演義』の最初の版本である。なぜなら、それこそ作者の本意を最もありのままに反映するからだ。残念ながら、真の「羅本」はすでに失伝している。

そこで筆者は次善の策として、現存する版本の中から「羅本」と最も血統の近いものを根拠に選ぶほかない。現在の学界では、「嘉本」と「葉本」の二つが原作に最も近いと広く認められている。では、いったいどちらがより優れているのか？

成立年代だけを見れば、「嘉本」は西暦1522年に刊刻され、現存する版本としては最古である。その意味では、時間的に確かに「羅本」に近い。しかし本文の内容を分析すると、「葉本」に残された原初的な姿のほうが、むしろ「羅本」に近い。

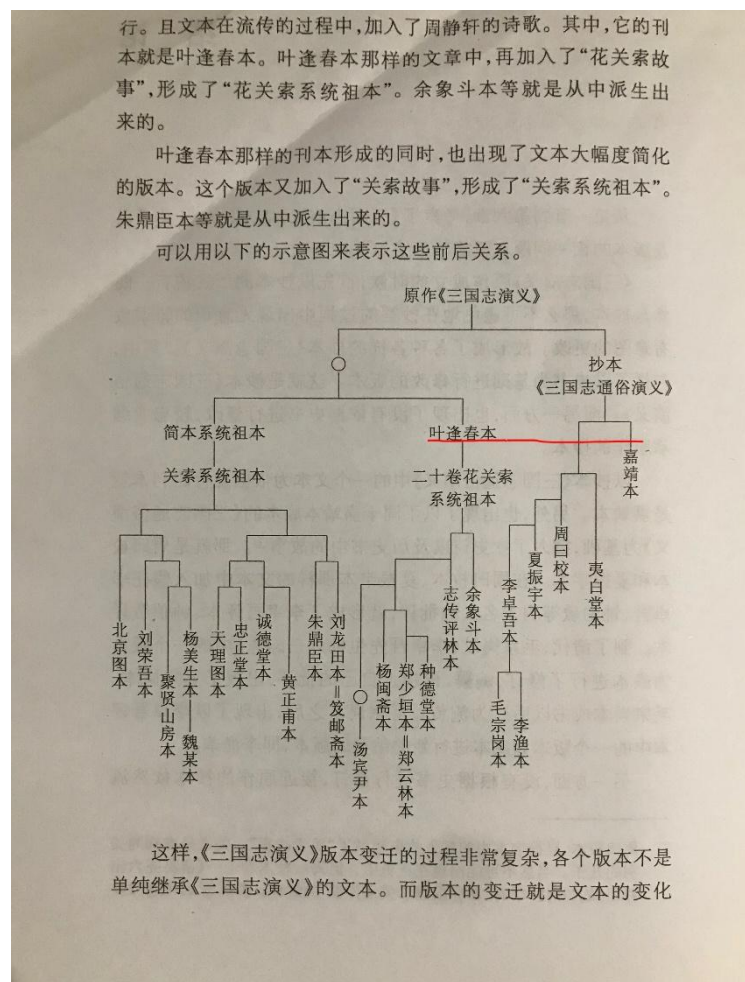
筆者にとって、成立年代の早さだけが唯一の基準ではない。内容がどこまで忠実に「羅本」の原貌を復元しているか——そこそが最も重要なのである！





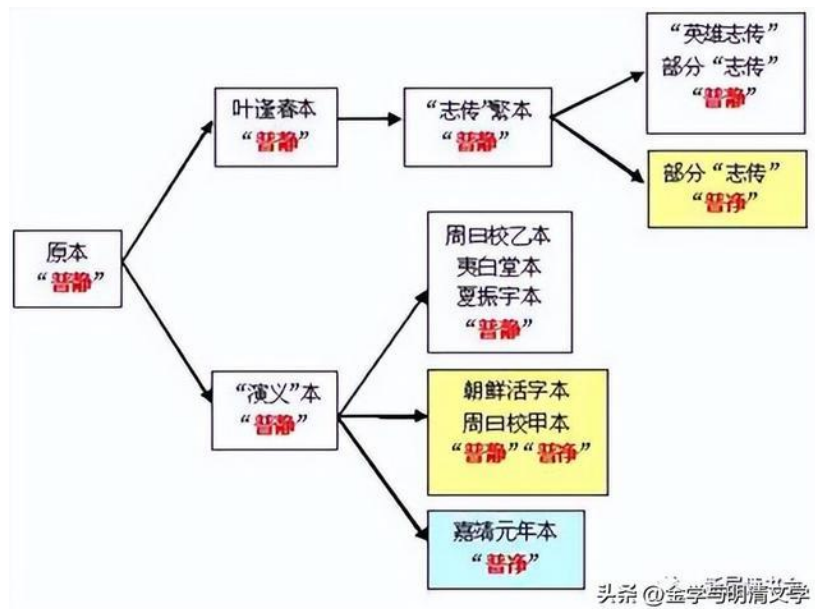
資料出典：『三国志演義版本系統図』／中川諭（日本の研究者）作図

※ 訳注：図中で青字表記された版本は、現在では散逸したもの、または存在したと推定さ



資料出典：『「三国志演義」版本研究』／中川諭 著

説明：上図のように「刊刻年代」の順に並べた図とは異なり、本図は各版本間における「本文内容」の変遷と系譜を分析したものである。図から明確に分かるように、版本系統の継承関係では「葉本」が「嘉本」より前段階に位置しており、これはその本文の系譜が原初の「羅本」



資料出典：『「三国志演義」版本「普静」問題』／周文業（首都師範大学教授）作図

膨大な『三国志演義』版本研究の中で、どの版本が最も羅貫中の原意に近いのかを、いかに判定すべきか。研究者・周文業は、きわめて重要な「遺伝子検査ポイント」を提示した。それは、関羽が五関を突破する場面に登場する鎮国寺の高僧の法号が、果たして「普静」なのか、それとも「普净」なのか、という一点である。上図のとおり、厳密な本文比較によって、そこには明瞭な変遷の経路が確認できる。

1、「羅本」における原初の設定

羅貫中が創作した『三国志演義』の「原本」（図の最左端）では、この僧の法号は「普静」とされている。これが作者による最初の設定である。

2、二大系統への分岐

時代が下るにつれ、書物は写本・刊刻の過程で分岐していった。

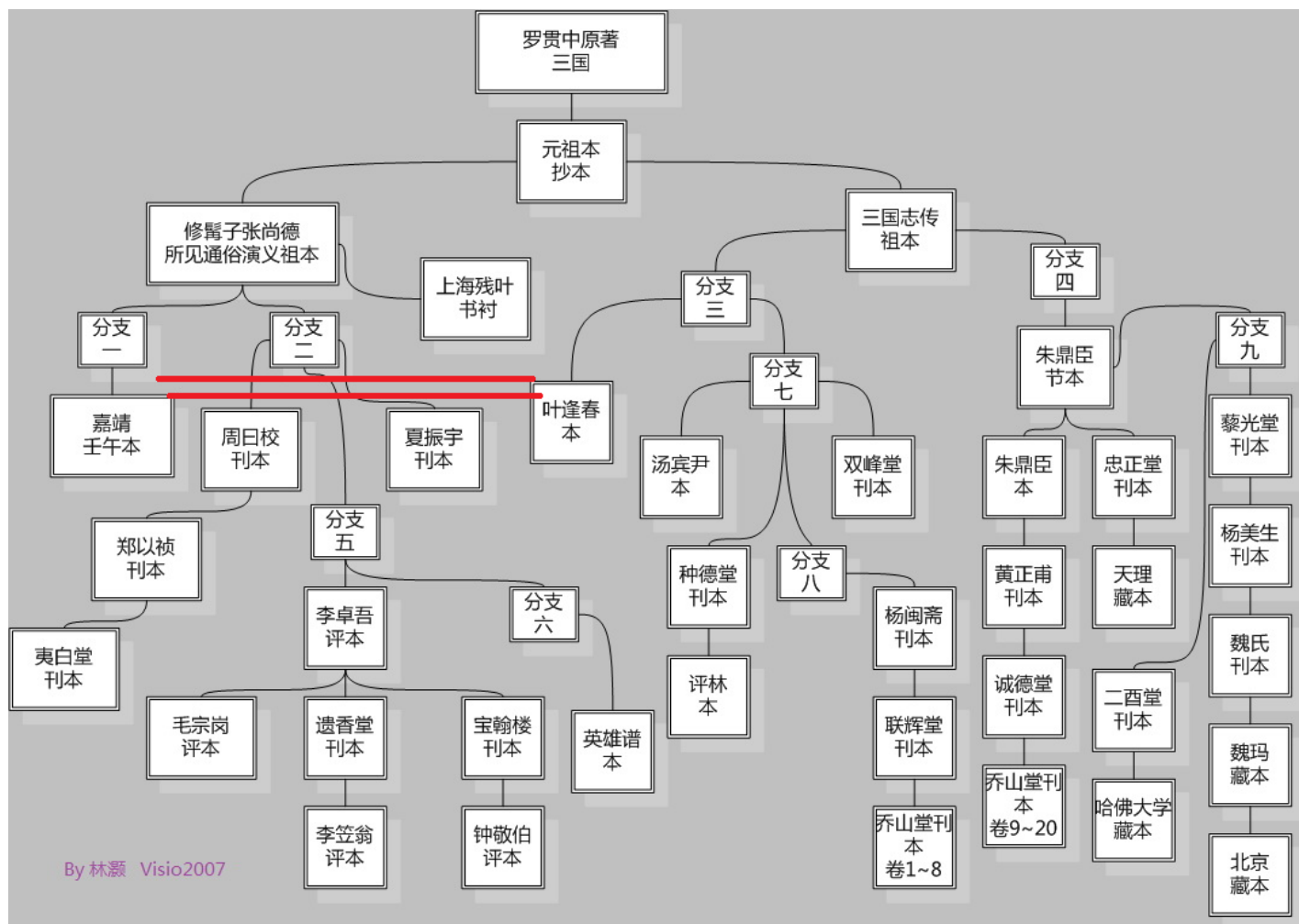
●→葉本系統（上側の分岐）：「葉本」は刊刻年代こそやや遅いものの、本文では「羅本」を忠実に継承し、なお「普静」と記している。これは、大幅な改変を受けていない直系の系譜に属することを示している。

●→嘉本系統（下側の分岐）：「嘉本」ではここに文字上の変化が生じ、法号が「普净」へと書き換えられている。これは「嘉本」が文人による潤色・修正を受け、羅貫中の原初の用字から離れたことを示す。

3、結論：なぜ本書は「葉本」を採用するのか？

この「版本進化図」が示すのは、動かし難い一つの事実である。刊行時期が早いからといって、本文内容まで「羅本」に近いとは限らない。

「嘉本」は早く刊行されたが、すでに原形ではない（「静」から「净」へ変化している）。一方、「葉本」は刊行が遅いにもかかわらず、羅貫中の原初の文字をそのまま残している（「静」を保持）。したがって武力ランキングの精度を最大限に高めるため、本書は潤色を経た「嘉本」を退け、より純粋な系譜を持つ「葉本」を中核資料として採用する。



資料出典：『演義版本先後図』／林瀨 作図

専門家・林瀨が作成した『演義版本先後図』から、一つの重要な事実が明確に読み取れる。「嘉本」と「葉本」は親子のような直接継承関係ではなく、同一の祖本から分かれた二つの異なる枝なのである。

1、分岐系統の違い

図のとおり、羅貫中の原著「羅本」は伝写の過程で複数の系統へ分化した。「嘉本」は刊行時期こそ最も早いですが、文人による大幅な潤色・改写を経た系統（分岐一）に属する。一方、「葉本」は刊行年代がやや遅いものの、より素朴で、文人による改変の少ない別系統（分岐三）に属している。

2、決定的証拠

前頁で周文業教授が指摘したとおり、羅貫中の原著では、関羽が五関を突破する際に出会う僧の名は「普静」である。「葉本」（および志伝系統）は「普静」の二字を完全に残しているのに対し、「嘉本」はこれを「普浄」と改めている。わずかな差に見えるが、これは版本の「遺伝子」を示す決定的証拠である。すなわち本文の継承という観点では、「葉本」のほうが「嘉本」より羅貫中の原初設定を忠実に保存している。

3、総括

成立年代の早さだけで、本文の原初性を判断することはできない。この図は、両者が系統樹のどこに位置するかを明瞭に示しており（図中の二本の赤線）、筆者が版本を取捨選択する学術的根拠を裏づけている。

版本	補修略叙	曹操反應	小字夾注
葉逢春刊本	修曰：「丞相秘藏之書，雖已刊板，未曾傳播於世。（下略）」	曹曰：「莫非古人與吾暗合否！」遂命破板燒之。	至今此書（孟德新書）不傳於世。
余象斗刊本	修曰：「丞相秘藏之書，雖已刊板，未曾傳播於世。（下略）」	操曰：「莫非古人與吾暗合否！」遂命破板燒之。	至今此書不傳於世。
嘉元序刊本	修曰：「丞相秘藏之書，雖已成帙，未傳於世。（下略）」	操曰：「莫非古人與吾暗合欺！」遂令扯碎其書，燒之。	崇世宗時方刊板。舊本「書」作「板」，差矣。今（孫武子）止有魏武帝註。
夏振字刊本	修曰：「丞相秘藏之書，雖已成帙，未傳於世。（下略）」	操曰：「莫非古人與吾暗合否！」遂令扯碎其書，燒之。	「考證」（孟德新書）不可考，今（孫子兵法）有魏武帝註，疑助此書。至崇世宗時方有刊板。舊本（三國志）。

由此而見，在嘉靖萬曆間，《三國志演義》已存在着「舊本」與非「舊本」。這裏區別的關鍵在於《孟德新書》是不是板刻的印刷品。正如嘉元序刊本的小字註所指出：「舊本『書』作『板』」。（夏振字刊本與周曰校刊本這裏的「考證」文字漏脫此句，但其意思與嘉元序刊本完全相同。）按今姑勿論「刊板」的起源，但是從歷史上看，曹操那個時代還沒有產生雕板印刷術則是肯定的。所以，非舊本將有關文字修改作「雖已成帙」、「遂令扯碎其書燒之」，而「舊本」或以「舊本」為母本，祖本的後刻本仍然保存原來的「雖已刊板」、「遂命破板燒

資料出典：『スペイン所藏・葉逢春刊本 三国志史伝（上）』

【そこでその書を引き裂いて焼かせた。柴世宗の時代になって初めて版本が彫られた。旧本では「書」を「板」とするが、これは誤りである】（嘉本）
世間ではしばしば、現存最古の「嘉本」こそ羅貫中自筆の「羅本」だという誤解が見られる。しかし「嘉本」の「張永年反難楊修」篇にある小字の割注を確認すれば、「板」と「書」のわずかな異文から、その説は自ら崩れる。「嘉本」の割注自身が、さらに古い版本の存在を明言しているからである。

1、「嘉本」は原著ではない

この注記は、「嘉本」の改訂者がある「旧本」（「羅本」またはその祖本である可能性が高い）を実際に目にしていたことを明確に示す。改訂者は旧本の「板」という字を誤り（差矣）と判断し、自ら「書」に改めた。すなわち「嘉本」は主観的な修正を受けた改訂本であり、原形そのものではない。

2、むしろ「葉本」が原形を残している

これに対し、刊刻年代の遅い「葉本」と「余本」は、同じ箇所「嘉本」の改訂者が誤りと見なした「板」の字をそのまま使用している。

3、版本上の結論

これは、「葉本」と「余本」が刊行時期こそ遅いものの、祖本を機械的に写し取り、勝手な修正を加えなかったため、かえって「羅本」の原初的な「遺伝子」を完全に保存したことを意味する。対して、文字を独断で直した「嘉本」は、本文の原初性という点では明らかに「葉本」「余本」に及ばない。

三國志演義古版匯集編輯委員會

主編

陳翔華 中國國家圖書館

編輯委員(按姓氏筆劃順序)

金文京 日本京都大學

周兆新 北京大學

馬泰來 美國普林斯頓大學

馬蘭安 澳大利亞墨爾本大學

陳慶浩 法國科學研究中心

殷夢霞 國家圖書館出版社

盧慶濱 英國倫敦大學

顧問

柳存仁 澳大利亞國立大學

孫權賞賜甘寧百騎的酒水——小說寫甘寧百騎劫曹營前，孫權賞酒肉以壯行。葉逢春刊本說，孫權賜「酒百瓶、肉百斤，賞犒戰士」(6/54b)。而人文影本作「賞酒五十瓶，羊肉五十斤，賞賜軍士」。所賞酒、肉，俱半其數。

開東災年的谷價——小說寫興平元年漢陽大戰，時值蝗災歲荒。葉逢春刊本說：「開東一境，每谷一石直錢五十萬」(7/88b)。而人文影本作「開東一境，每谷一斛直錢五十貫」。按一石為十斗，古代一斛亦為十斗(南宋末改為五斗)，兩者容量相等。千錢為一貫，五十貫即五萬錢。兩本所寫谷價，相差十倍。考《三國志》魏書《武帝紀》載：「是歲谷一斛五十餘萬錢」，葉逢春刊本與之相近。

從以上例舉中，我們也可以看到葉逢春刊本的複雜性。這個刊本經過了不少的刪削和修改，已非《三國志演義》的初始面目，但又保存傳鈔階段舊本的若干細節和文字，所以比之嘉元序刊本則較為接近於羅貫中的原書。

葉逢春刊本的雕板刻字，存在不少錯誤。至於此西班牙藏本除缺佚第三、第十兩整卷外，在書葉裝訂上也

九

之。

在所見諸明刻本中，除上表列出外，保存這些「舊本」文字的還有湯賓尹校本、熊清波刊本、劉龍田刊本、朱鼎臣輯本、黃正甫刊本等；而已加修改過的非舊本，則還有周曰校刊本、李卓吾評本、鍾伯敬評本等。

上表所見的非舊本註文，都是針對「舊本」而言的。非舊本的這裏註文，包含有兩重意思。其一是指出「舊本」正文「刊板」、「破板」的錯誤，說明與非舊本的異同(已見上文敘說)。其二是關於《孟德新書》的流傳問題。「舊本」小字註云：「至今此書不傳於世」。(湯賓尹校本因正文「破板燒之」，而小字註云：「致令此書不傳於世」，稍異。而非舊本小字註則對之，却認為此書未必「不傳」。嘉元序刊本說：「今《孫武子》止有魏武帝註」，夏振宇刊本與周曰校刊本說：「今《孫子兵法》有魏武帝註，疑即此書」。按非舊本小字註當自有據。

今見《隋書》經籍志三著錄：「《孫子兵法》二卷，吳將孫武撰，魏武帝註」，「《孫子兵法》一卷，魏武、王淩集解」。又，《宋史》藝文志六兵書類著錄：「魏武帝註《孫子》三卷」。這些著錄當為非舊本小字註所參考。

從這些小字註中，我們也可以不難地看到某些版別文字生成的先後。在這裏，葉逢春刊本、余象斗刊本等不僅正文保留「舊本」文字，而且其小字註文也比嘉元序刊本早。嘉元序刊本是通常被稱為最早的刻本，今見所藏如果不是經過遞修後印的話，這裏的正文與小字註却為什麼反出於晚刻數十年的葉逢春刊本、余象斗刊本之後呢？這是因為在傳抄與刻印過程中，嘉元序刊本經過了很大的修改和過度的整理，而余象斗刊本等雖也有所整理，但是較多的保留「舊本」、「古本」的原有文字。

再次，說「新舊本」。夏振宇刊本卷十一《姜維洮西敗魏兵》寫蜀大將姜維伐魏而背洮水布陣，魏雍州刺史王經引「十員牙將」出，乃回顧諸將說：「姜維驍勇，汝四將可戰之也。彼若退動，便可追擊。」於是，「四將左右而出，來戰姜維」。在王經所下達的口頭命令中，當說到「汝四將可戰之」時，下有註釋：

三國の資料出典：『スペイン所蔵・葉逢春刊本 三国志史伝（上）』

主編：陳翔華（中国國家圖書館） | 編集委員：金文京、周兆新、馬泰來ほか國際的權威の研究者

本書が武力評価の基準としてどの版本を採用するかを決めるにあたり、筆者は独断で結論を出したわけではない。三国研究界における共通の研究成果を厳格に踏まえている。中国、日本、欧米など各国の研究者から成る『三国志演義古版彙集編集委員会』は、現存する古版本を詳細に比較したうえで、次のような結論を示している。

1、嘉靖本の「過剰な整形」

長らく世間で標準版本と見なされてきた「嘉本」は、専門家の目から見れば、実際には入念な潤色を施された「整形版」である。研究者らは「嘉元序刊本は大幅な修正と過度の整理を受けている。一方、余象斗刊本などにも整理は見られるものの、『旧本』『古本』の原文をより多く保存している」と指摘している（前頁左下図）。つまり「嘉本」は、美文性や当時の価値観に合わせるために、羅貫中原著の原初性を犠牲にしたのである。

2、葉本が残した「伝写」の原初的遺伝子

これに対し「葉本」は、刊刻技術が粗く、誤字や欠頁を含むものの、その「本文遺伝子」はきわめて純粋である。研究者は明確に、「葉逢春刊本……は伝写段階の旧本に見られる細部や文字を保存しているため、嘉元序刊本よりも羅貫中の原書に近い」と判定している（前頁右下図）。

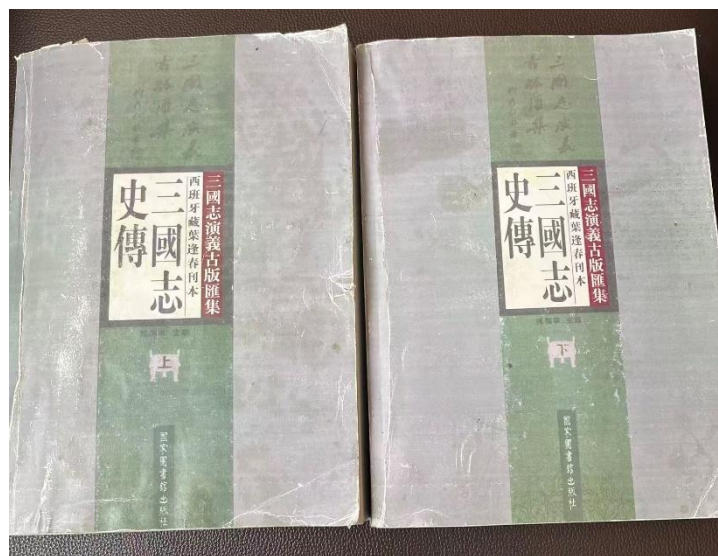
3、研究者による権威ある認定

学界の判断基準はきわめて明確である。

●→嘉靖本＝精緻に整えられているが、多くの箇所が改変済み（羅貫中の原意からは遠い）。

●→葉逢春本＝粗いが原形を保存（羅貫中の原意に最も近い）。

以上の国際的権威を持つ研究者たちの結論を踏まえ、本書は武力ランキングを構築する際、羅貫中の原書により近い「葉本」を武力評価の根拠として断固採用する。目的は、後世の文人が武力描写から削り取った重要語句を、再び表面へ引き戻すことにある。



上図は、筆者所蔵の『スペイン所蔵・葉逢春刊本 三国志史伝』上下二冊である。

对关羽的完全不敬，逐步过渡到彻底消除各种对关羽的不敬。对此的修改也是从少量的修改，过渡到修改逐步增加，最后到嘉靖元年本做了彻底修改。

以上通过对《三国演义》书名和“关羽之死”情节的分析，可以看出各种《三国演义》版本的演化过程，这个过程和从其他方面分析的版本演化基本一致。叶逢春本应该是最接近原本的《三国演义》版本。

周文业

2023年3月于北京

資料出典：『通俗演義三国志史傳 文史对照本』／周文業 著

『三国志演義』の版本迷宮において、いったいどの本が羅貫中の真の姿を最も残しているのか。この問題については長く諸説が入り乱れてきた。しかし、中国版本学の権威である首都師範大学の周文業教授は、その著作の中で力強い結論を提示している。

1、「神格化運動」の中で進んだ版本変化

周文業教授は、重要場面である「関羽の死」を詳細に分析し、一つの明白な変化の法則を見いだした。

●→初期版本（「羅本」に近い「葉本」など）：関羽の描写は比較的写実的で、後世の価値観から見れば関羽に対して「まったく敬意がない」と感じられる場面すら数多く残っている。

●→過渡期版本：関羽への不敬と受け取られる描写を少しずつ消し、部分的な修正が進む。

●→後期版本（「嘉本」など）：嘉靖元年の段階では、当時の社会に広がった関羽崇拝に合わせるため、改訂者が原著を「徹底的に改変」している。

2、化粧を剥がして真の姿を見る

まさに、この「不敬」から「美化」へ向かう変化の流れを逆にたどることで、版本の先後関係を推定できる。不敬と見なされる文字を残している版本ほど、後世の人々による粉飾を受けていない原初的な姿を保っているのである。

周文業教授は、この点について著書で次の重要な結論を示している。「以上、『三国志演義』の書名および『関羽の死』の情節を分析することによって、各種『三国志演義』版本の変遷過程を確認できる。この過程は、他の側面から分析した版本変遷とも基本的に一致する。葉逢春本こそ、原本に最も近い『三国志演義』版本であると考えられる。」

3、本書の武力ランキングを支える確固たる基盤

学界がすでに「葉本」を現存版本の中で最も羅貫中の原本に近いものと認めている以上、本書が「葉本」を武力分析の基礎に据えることは、個人的な奇説ではなく、学術的知見に従った必然的な選択である。

筆者は、後世に「浄化」あるいは「改変」された版本を用いて武将の強弱を論じることを拒む。最も「羅本」に近い「葉本」へ戻ってこそ、羅貫中が描いた最も原初的で、最も荒々しい三国武力世界を復元できるのである。

二、文人VS商人

1、嘉靖本を改変したのは誰か？——文人・蒋大器の介入

「嘉本」が大規模な改訂と潤色を受けたのなら、その「見えない手」はいったい誰だったのか。「嘉本」巻頭の序文には「庸愚子」と署名されている。学界の考証によれば、この人物こそ明代の弘治・正徳年間に活動した文人・蒋大器である。

伝統的な儒家文人であった蒋大器は、『三国志演義』を編集する際、強い教化目的を持っていた。当時の社会における「劉備を尊び曹操を貶す」姿勢や「忠義を尊ぶ」という道德基準に合わせるため、羅貫中原本の中にあった粗野で荒々しい表現、あるいは関羽に対して不敬と受け取られる描写を大量に削除・改変し、雅化したのである。

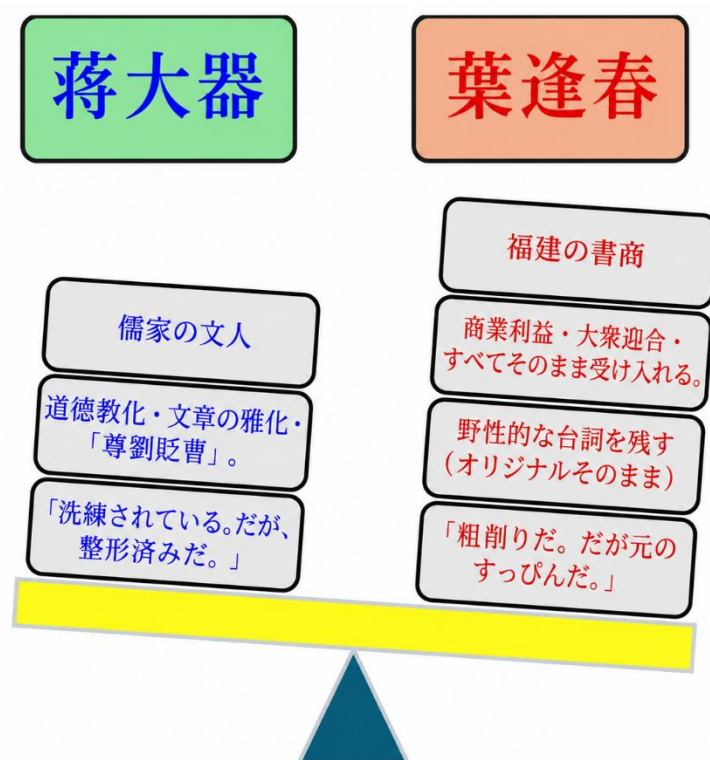
その結果、蒋大器は小説としての文学的価値を高めた一方で、意図せず羅貫中が描いた原初の武力設定を損なうことになった。これこそ本書が「嘉本」を経由せず、より素朴な「葉本」へ戻る理由である。

2、葉逢春——忠実な伝声筒

文人・蒋大器が主導して改訂した「嘉本」に対し、「葉本」の出版者・葉逢春は福建建陽の書商だった。この身分の違いが、版本の運命を分けた。文人である蒋大器には「雅化」と「道德審査」への強い動機があり、そのため原著へ大幅な手を加えた。

一方、書商出身の葉逢春にとって出版の目的は商業利益だった。読者が求める物語本来の面白さに応え、しかも自身が文献考証を専門とする文人ではなかったため、当時流通していた旧本をそのまま覆刻する傾向が強かった。この「余計なことをしない」「勝手に改めない」という商業的な姿勢が、結果として羅貫中原著にとって最高の防護壁となり、文人のフィルターを通していない武力描写をそのまま保存することになったのである。

3、結論：文人の「嘉本」は雅化のため原著を書き換え、商人の「葉本」は利益のため原形を残した。



より真実の武力を追求するため、本書の判定：【書商・葉本の勝利 🏆】

三、虎牢関の謎——消えた「五十合」

虎牢関の「三英戦呂布」は、全書でもとりわけ有名な場面である。しかし、張飛と呂布の初戦の細部については、版本によって決定的な違いが存在する。ここでは「嘉本」と「葉本」を対照し、さらに全書の論理的な流れを組み合わせることで、どちらの版本が羅貫中の原意に合致するのかを検討する。

1、決定的本文の欠落

まず、張飛と呂布の交戦を記した両版本の核心部分を比較する。

●→「嘉本」：【張飛は神威を奮い起こし、呂布と激戦した。八路の諸侯が見ると、張飛の槍さばきは次第に乱れ、呂布はいよいよ勢いを増した。張飛は気性を爆発させ、大喝一声。関雲長は馬をひと打ちし、八十二斤の青龍偃月刀を振るって呂布を挟撃した。三騎は丁字形となって激しく戦い……激戦してなお勝敗は決しなかった】。

●→「葉本」：【張飛は神威を奮い起こし、呂布と激戦し、八路の諸侯は一斉に声援を送った。関雲長が見ると、張飛の槍さばきは次第に乱れ、呂布はいよいよ勢いを増している。張飛は気性を爆発させ、大喝一声。八路の諸侯は張飛が呂布を食い止めているのを見て陣を固め、門旗の下で馬を止めて見守った。二将は五十合まで戦って勝負がつかなかった。雲長は馬をひと打ちし、八十二斤の青龍刀を振るって呂布に挑み、三騎は丁字形となって激しく戦い……激戦してなお勝敗は決しなかった】。

◎→違いは一目瞭然である。「葉本」は二人が「五十合まで戦って勝負がつかなかった」と明記しているのに対し、「嘉本」はこの決定的な一文を欠いている。では「葉本」が余計な文を付け加えたのか、それとも「嘉本」が悪意をもって削ったのか。全書に残る他の証拠を調べれば、真偽は判定できる。

2、羅貫中の原意を示す三つの確証

もし羅貫中の原本が「張飛は呂布に及ばない」と設定していたのなら（「嘉本」の虎牢関描写のように）、後の賛詩や物語展開もその論理を引き継いでいるはずである。ところが、全書の別の三か所は「嘉本」の独断的改変を容赦なく否定している。

●→賛詩による位置づけ：虎牢関の賛詩では、両版本とも二人を互角としている。

◎→「嘉本」：【激戦してなお勝敗は決しなかった】。

◎→「葉本」：【激戦してなお勝負は決しなかった】。

◎→両版本の賛詩は、結論としていずれも「引き分け」である。ところが「嘉本」は本文から「五十合の引き分け」という過程を取り除きながら、末尾には「勝敗未決」という賛詩を残した。その結果、「過程（張飛の槍が乱れる）」と「結論（勝敗未決）」が噛み合わない論理矛盾が生じる。これに対し「葉本」は、本文の「五十合引き分け」と賛詩が完全に一致する。

「五十合引き分け」が合理的である理由。

●→呂布の警戒：後の徐州失陥の場面では、張飛は酒に酔って満足に戦えない状態だったにもかかわらず、呂布は追撃しようとしなかった。

◎→「嘉本」：【呂布はもとより張飛の勇猛を知っていたため、やはり張飛へ迫ろうとはしなかった】。

◎→「葉本」：【呂布は張飛の勇猛を知っていたため、やはり追おうとはしなかった】。

◎→「嘉本」の虎牢関の論理に従えば、呂布は張飛の「槍さばきを乱れさせる」ことができたはずである。それなのに、なぜ「酔った」張飛を前にして逆に追撃をためらうの

か。明らかに不自然である。「葉本」のように、呂布が張飛には「五十合引き分け」の実力があると知っていたからこそ、「もとより張飛の勇を知る」という警戒心が成立する。

●→「300合」を戦う自信：全書には、張飛が呂布へ挑戦する台詞が二度登場する（「嘉本」「葉本」の双方にあり、以下は「葉本」の原文に基づく）。

◎→一度目の「300合」：【お前は人の奴僕にすぎぬ。どうして俺の兄を兄弟などと呼べる！ 来い、俺と300合戦え！】。

◎→二度目の「300合」：【張飛は馬を躍らせ矛を横たえ、大声で叫んだ。呂布！ 俺と300合勝負しろ！】。

◎→二度にわたる「300合」の挑発は、作者の設定上、この二人の武力が同じ水準に属することを示唆している。これもまた虎牢関における「五十合引き分け」の合理性を裏づける証拠である。

3、結論：人為的に生じた論理断裂

以上を総合すれば、羅貫中ほどの文学者が、全書の武道基調を定める虎牢関という序盤の大戦で、このような粗雑な矛盾を犯したとは考え難い。物語冒頭の重要場面である以上、作者は当然、何度も推敲し、一字一句を慎重に選んだはずである。したがって、いわゆる「本文と賛詩の矛盾」「前後の論理が何度も衝突する」といった不合理は、羅貫中本来の意図によるものではなく、後世の改変によって生じたと考えるべきである。

唯一、論理的に成立する推論はこうだ。「嘉本」の改訂者・蒋大器は、呂布を盲目的に持ち上げる「呂布推し」だったのである。

蒋大器は呂布の武力上限を意図的に引き上げるため、「五十合まで戦って勝敗つかず」という決定的な文字を勝手に切り取り、呂布を天下無敵に見せようとした。しかし本文を改変した一方で、それと連動する賛詩、後続の戦局展開、人物の台詞（前述の三大確証）まで完全かつ整合的に作り直すだけの筆力はなく、結果として本文には隠しようのない論理上の綻びが残った。

ゆえに本書はここで最終判定を下す。「葉本」に残された「五十合引き分け」こそ、羅貫中の筆による最も原初的な姿であり、同時にデータ上の論理とも完全に一致する虎牢関の戦いである！



醉虎不可欺，素知飛勇力



【図解の要点：酔虎を侮るな・呂布の警戒】

「酔った張飛へ迫ろうとしなかった」という後の描写から、虎牢関での戦績を逆算する。もし虎牢関で呂布が勝っていたなら、後の徐州で恐れる必要はない。徐州で呂布が恐れたということは、虎牢関では勝てていなかったということだ。

四、「関羽尊重」と「関羽弱体化」——羅貫中の本意を継いだのは誰

か？

版本学を論じるうえでは、文字考証だけでなく、作者の核心的な創作意図も探る必要がある。周知のとおり、『三国志演義』は強い「劉備支持」の色彩を持つ小説であり、関羽は羅貫中によってほとんど神格化された地位を与えられている。もし羅貫中自身の創作動機が「関羽を尊ぶ（関羽を最大限に高く描く）」ことであつたなら、各版本について、どれが最も徹底して関羽を強化しているかを見ればよい。その版本こそ、羅貫中の原意に近いはずである。

1、羅貫中における「関羽尊重」の創作スペクトル

まず核心的な命題を明確にする必要がある。羅貫中の関羽への「偏愛」は、いったいどれほど強かったのか。『三国志演義』全体を見れば、関羽を武道の神域へ押し上げる無敵の存在として造形するため、作者は正史を大幅に改変し、時には覆すことすらためらっていない。

- 戦功の移植：正史を確認すると、華雄を討ったのは孫堅であり、文醜は乱軍の中で戦死した。しかし羅貫中は筆を一振りし、これら華々しい戦功をすべて関羽の青龍偃月刀のもとへ移した。
- 神級の偉業を創作：天下に名高い「五関を突破して六将を斬る」や「華容道で義により曹操を逃がす」は、いずれも正史には存在しない。これらの壮大な場面は、関羽の忠義と神勇を際立たせるために羅貫中が専用に取り上げた物語である。
- データ上の絶対的圧倒：作中では、関羽にわずか「1合」で猛将・華雄を瞬殺させている（対して呂布は、華雄より弱い公孫瓚すら2合以内に討てていない）。さらに関羽には「呂布を三度破る」という実戦記録（戦例32・152・155）、全書第二位の斬将総数、そして大量の賛詩が与えられている。
- 正史を借りて決着をつける：羅貫中は『三国志』にある諸葛亮の言葉【孟起（馬超）は……なお美髯公（関羽）の絶倫逸群には及ばない】を意図的に引用している。もし作者がこの史実上の評価を認めていなければ、引用しないこともできたし、戦功移植と同じように「馬超・張飛が関羽より上」と書き換えることすらできたはずである。にもかかわらず原文を残したのは、正史の口を借りて「関羽＞馬超・張飛」という武力位置づけを確定させようとしたからだと考えられる。

●→以上の確証を総合すれば、疑う余地はない。羅貫中はきわめて熱狂的な「関羽推し」だった。彼が構築した演義の武力体系において、関羽の真の武力設定は、呂布を上回る頂点級存在であるべきなのである！

2、版本ごとの武力スペクトル検査

作者の意図を確認したところで、次に「嘉本」と「葉本」（同系統の「余本」を含む）が関羽の武力をどのように描いているかを比較する。関羽を強化しているのはどちらか。弱体化しているのはどちらか。

●→管亥を斬る効率

●→「嘉本」：【管亥ごときがどうして雲長に敵おうか。数十合のうちに青龍刀が上がり、管亥を馬上から斬り落とした】。

●→「葉本」：【管亥ごときがどうして雲長に敵おうか。数合のうちに青龍刀が上がり、管亥を馬上から斬り落とした】。

り、管亥を馬上から斬り落とした】。

◎→分析：「数合」は「数十合」よりはるかに支配的な戦果であり、「葉本」のほうが「嘉本」より関羽を強く描いている。

●→顔良・文醜の価値

◎→「嘉本」：【袁紹は大いに喜んで言った。もし雲長を得られれば、顔良・文醜が再び生き返ったようなものだ！】（関羽＝顔良＋文醜）。

◎→「余本」（「葉本」は欠落）：【袁紹は大いに喜んで言った。雲長を得られれば、顔良・文醜が生き返るよりも勝る！】（関羽＞顔良＋文醜）。

◎→分析：「余本」はたった一字の「勝」によって、関羽を河北二雄の合計すら上回る存在へ押し上げている。

●→張遼の武芸上の位置

◎→「嘉本」：【関公曰く、張遼の武芸はお前と私に劣らない】（張遼＝関羽・張飛）。

◎→「葉本」：【関羽は笑って言った。張遼の武芸はお前に劣らない】（張遼＝張飛、関羽には及ばない）。

◎→分析：「葉本」では、関羽は張遼を張飛と比較するに足る相手とは見ているが、自分自身はその比較対象から外している。明らかに「葉本」のほうが「嘉本」より関羽を高く評価し、張飛だけを張遼の比較基準に置くことで、関羽を「張遼＝関羽・張飛」という枠組みの外へ引き上げている。

●→樊城における徐晃戦の真相

◎→「嘉本」：【関公は大いに怒り、刀を振るって迎えた。八十余合戦い、関公は武芸こそ高強であったが、やはり右腕の力が弱っていた。関平は急いで鉦を鳴らし、関公は馬首を返して寨へ戻った。四方から関の声が大いに上がった。曹仁が魏王の援軍到着を見て、急ぎ軍を率いて城から打って出て徐晃と合流し、両面から挟撃したため、荊州軍は大いに乱れた】。

◎→一騎討ちでの不利：「嘉本」の叙述では、関羽は右腕の傷の影響を受け、八十余合の後に押され始める。そのため関平が急いで鉦を鳴らし、関羽は馬を返して寨へ戻る。重点は「関羽の右腕の力不足」と「八十合後に徐晃が優勢になった」という点に置かれている。

◎→「葉本」：【関公は大いに怒り、刀を振るって迎えた。関公の武芸は高かったが、やはり右腕の力が弱っていた。二将は四、五十合まで戦った。関平が急いで鉦を鳴らすと、関公は戦いをやめ、馬を走らせて寨へ戻ろうとした。その時、陣の後方から大きな関の声が上がった。もとはといえば曹仁が樊城の中で援軍の大挙到着を見て、部隊を率いて城門を開き、打って出たため、荊州軍が大いに乱れたのである】。

◎→真相：「葉本」では、関羽と徐晃は四、五十合戦っただけで、明確な敗色はまだ出ていない。戦局を崩した真の要因は、曹仁が援軍到着を見て樊城から出撃したことにある。「もとはといえば」に当たる「元来」の二字は、まさに前因を補う表現である。関平が急いで鉦を鳴らしたのは、単純に関羽が一騎討ちで苦しくなったからではなく、曹仁の出城挟撃によって荊州軍の陣形が乱れたためだった。

◎→分析：関羽の右腕に傷がある点も、関平が鉦を鳴らす点も同じである。しかし文の配列が変わるだけで、武力評価の判定はまったく異なる。「葉本」では、関羽は四、五十合まで敗れず、曹仁の出撃介入によって一騎討ちが中断された。「嘉本」では、関羽が八十余合の後、右腕の力不足によって徐晃に押され始めた、という叙述になる。

◆→版本上の疑点：では、「羅本」の原意に近い叙述を改変したのは誰か。筆者は、「嘉本」が四、五十合を八十余合へ変更し、さらに因果関係の順序を並べ替え、戦

局悪化の主因を「曹仁の出城挟撃」から「関羽の右腕の力不足」へ移した可能性が高いと考える。そうすることで徐晃の優勢が拡大され、関羽の敗北感も明らかに強められた。

●→古城会における素手の刃取り

◎→「嘉本」：【矢は関公の左腕に命中した。関公は口で矢を抜き、血が止めどなく流れた……雲長は翼徳が来るのを見て大いに喜び、刀を周倉に渡して馬を進め迎えた。張飛は丸い目を見開き、虎髭を逆立て、雷のような声で叫び、矛を振るって雲長へ突きかかった。雲長は大いに驚き、慌てて槍をかわし、叫んだ。兄弟よ、どうして桃園の誓いを忘れたのだ？……張飛曰く、なお言い逃れするか！ 丈八矛を突き出した】。

◎→「余本」（「葉本」は欠落）：【矢は関羽の左腕に命中した。関公は口で矢を噛み抜き、血が止めどなく流れた……雲長は翼徳が来るのを見て、巨雷のような声を聞き、刀を周倉へ渡し、馬を進め迎えた。張飛は丸い目を見開き、虎髭を逆立て、雷のような声で叫び、矛を振るって雲長へ突きかかった。雲長は大いに驚き、慌てて槍を受け止めて払い、叫んだ。兄弟よ、どうして桃園の誓いを忘れたのだ？……張飛は大怒して言った。なお俺を欺くつもりか！ 丈八蛇矛を突き出した】。

◎→分析：張飛の不意打ちに対し、「嘉本」の関羽は狼狽して回避するだけだが、「余本」の関羽は、負傷しているはずの腕で直接その一撃を「受け止めて払う」。明らかに「余本」の関羽のほうが反応も速く、力も強い。これは羅貫中が熱烈な関羽推しであったという作風にも合致する。

3、結論：「葉本」こそ「羅本」の継承者

以上の重要箇所を交差比較すれば、真相はすでに明白である。

●→「嘉本」の逸脱：その改訂者は、多くの細部で意図的に関羽の武力描写を削り、弱めている。この「関羽抑制」は、原作者・羅貫中の「関羽の武力を徹底的に尊ぶ」という創作意図から完全に外れている。

●→「葉本」の忠実さ：文章表現こそ後世の版本ほど華麗ではないが、武力設定に関わる冷徹な細部では、まるで岩盤のように、関羽が頂点級の強者であるという絶対的地位を守り続けている。

すでに前文の確証から、羅貫中の原意が「徹底した関羽尊重」であったことは確認できた。それならば、より傲然とし、より覇気があり、より圧倒的な実力を示す「葉本」の関羽こそ、羅貫中の武道正統を真に受け継いだ「嫡流」と見るべきである。この結論は定海神針のように、本書が「葉本」を武力データ分析の基準として断固採用する正当性を、再び強固に固定する。

もし羅貫中の本意が本当に「呂布が第一」だったなら、作中で呂布を意図的に劣勢へ追い込み、しかも関羽に三度も敗れさせるような配置はあり得ない（一度だけなら関羽が呂布より強い証明にはならない）。この確証から分かるように、羅貫中は呂布の支持者ではなく、むしろ熱狂的な「関羽尊重派」だった。彼が構築した核心的な武道ロジックとは、「関羽は呂布の上位に位置する」という絶対的な階級を強固に打ち立てることなのである！

五、筆者による最終的な版本選択

1、論理的帰納

では、誰が「羅本」の代弁者なのか。前二項で行った「虎牢関の謎」と「関羽尊重の意図」の詳細な分析を総合すると、明確な武力スペクトルが浮かび上がる。

- 「羅本」の原意：「張飛と呂布はほぼ互角」かつ「関羽は呂布より強い」方向。
- 「嘉本」の意図：「呂布を引き上げる（張飛より上）」かつ「関羽を弱体化する」方向。
- 「葉本」の意図：「羅本」の設定を最もよく継承し、「張飛＝呂布」と「関羽強化」を示す。

さらに第一項で示した複数の研究者による考証を合わせれば、筆者は確信する。武力設定の復元度という点で、「葉本」と「余本」は、文人による改造を受けた「嘉本」を大きく上回る。誤った版本を用いて分析すれば、木に登って魚を求めるようなものであり、羅貫中の本意と正反対の誤った武力ランキングを作ることになる。

2、なぜ「毛本」を排除するのか？

現在最も広く流通している「毛本」は、原文への削除・改変の程度が「嘉本」をさらに上回る。毛氏父子は、自らの文章美学と武力観を貫くため、原著へ大量の「整形」と「切除」を施した。このように著しく原形を失った版本には、羅貫中本来の武力構造を論じる資格がない。

3、本書の実務基準：二版本の相互補完

「葉本」は本文内容として最も「羅本」に近い一方で、実際には誤字や欠頁も少なくない。この物理的欠陥を補うため、本書では厳格な「二版本相互補完戦略」を採用する。すなわち『葉逢春本』を中核底本（骨格）とし、欠落箇所があれば、内容系統がきわめて近い『余象斗本』を用いて補完する（血肉）。

この「葉を主とし、余を補助とする」方法論によって、歴史の霧を最大限に突破し、読者を最も原初的な「羅本」の武力世界へ導くことができる。いわゆる「選択は努力に勝る」。まず方向が正しいことが最重要である。版本が正しくなければ、演義の武力ランキングも正しく並べられない！

六、版本論争の総括

以上の五つの論点にわたる考証と議論を総合し、『三国志演義』の主要三版本の性質を最終的に次のように定める。

1、「嘉本」：精緻に改訂された整理本

「嘉本」は「旧本」を基礎として二次改訂を施した版本である。その特徴は、文人による潤色によって文章が滑らかで美しく、校訂も精密で、文字上の誤りが比較的少ないことにある。しかし、まさにその「精修」によって、原初の粗野な姿から離れてしまった。

2、「葉本」と「余本」：粗削りな原石

「葉本」と「余本」は文字上の誤り（誤字）が比較的多い。しかし文人による大規模な改変を受けていないからこそ、「旧本」、さらには「羅本」の原初的な本文をより完全に保存している。

3、版本選択の最終結論

「嘉本」の優位は、「刊刻年代」が早いという物理的な点に限られる。一方、「葉本」と「余本」の価値は、「本文内容の進化段階」がより古く、羅貫中由来の要素を多く残していることにある。本書の武力ランキングが「葉本」「余本」を採用するのは、羅貫中の武力思想を最も忠実に貫くためである。



『三国志演義』基本武力理論

筆者は武力を分析するにあたり、厳密な理論的基盤を構築した。この体系は、全書547件の実戦事例を帰納・演繹することで生まれたものであり、そこから二十二項目の中核理論を抽出している。これはP. [14]の目次総覧に示した二十二節の「基本武力理論」に当たり、筆者の武力評価ロジックを相互に連結させ、本書の分析体系を一つの閉じた論理構造として成立させる。また、必要に応じて『三国志演義』に関する史料・文献も慎重に補助証拠として引用し、論述の厚みと信頼性を確保する。

以下は筆者が用いる見出し階層である。次頁から第一節「基本武力理論」に入る。

主見出し：太い黒字

副見出し：青字

第3階層見出し：緑字

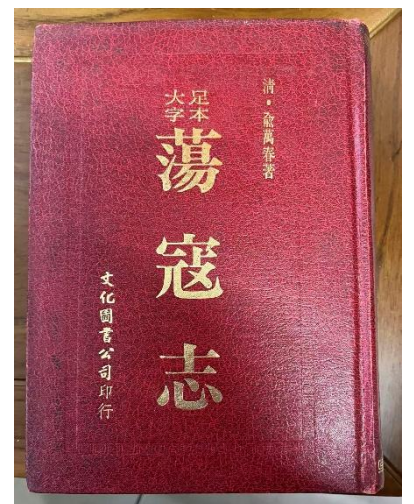
第4階層見出し：紫字「●→」

第5階層見出し：水色字「◎→」

第6階層見出し：橙字「○→」

第7階層見出し：濃青緑字「◇→」

第8階層見出し：黄色字「◆→」



資料出典：清代の作家・俞万春『蕩寇志』——陳麗卿は『三国志演義』の人物を評したことがある。

第一節：武力階級と分類体系の詳細



一、発端：乱世における定量化基準

羅貫中は『三国志演義』を創作する中で、数多くの名高い猛将を描いたが、「武力の強弱」について精密な定義を与えたわけではない。作中には「300合戦っても勝負がつかない」膠着戦もあれば、「刀を振り上げ、そのまま馬上から斬り落とす」という瞬殺もある。

このような曖昧な叙述の中に厳密な評価基準を築くため、本書は「武力階級 (Martial Tier System)」という概念を導入する。複雑に入り組んだ武将たちの実力をまず巨視的に階層化し、その後、同一階層内を微視的に定量化して強弱を分けることが目的である。

二、中核構造：従来の「ピラミッド」体系を突破する

現在主流の演義武力評価体系では、上位十名ほどの最上位武將をまとめて「超一流」と呼ぶことが多い。しかし筆者が原著を深く読み込んだ結果、従来の分類法だけでは羅貫中が描いた武力世界の全体像を捉え切れないことが分かった。

「超一流」のさらに上には、一人だけ特殊な武將が存在する。その人物が最高潮の爆発状態に入った時に示す支配力と数値表現は、他の九名の超一流猛將を明確に上回る。この「断層的」な強さを客観的に表現するため、本書では唯一無二の最高位として「天下第一」を特設する。

最上級の強者と通常の名將との間には、しばしば巨大な空白地帯が生じる。武力スペクトルをより精緻に再現するため、本書は「超一流」と「強一流」の間に、過渡的な二階級として「準超一流」と「最上位一流」を新設した。

設計意図：これは単なる言葉遊びではない。「一般的な一流名將より強いが、最上級の神將にはわずかに及ばない」という特殊な存在を、正確に捉えるための区分である。

三、微視的順位：同階級内における強弱のせめぎ合い

大まかな階級を確定した後、本書では同一階級内でもさらに細かく順位を付ける。同じ武力階級に属する場合、順位が前の者ほどわずかに強く、後ろの者ほど相対的に弱い。つまり同じ階級であっても、「先頭」と「末尾」が存在する。

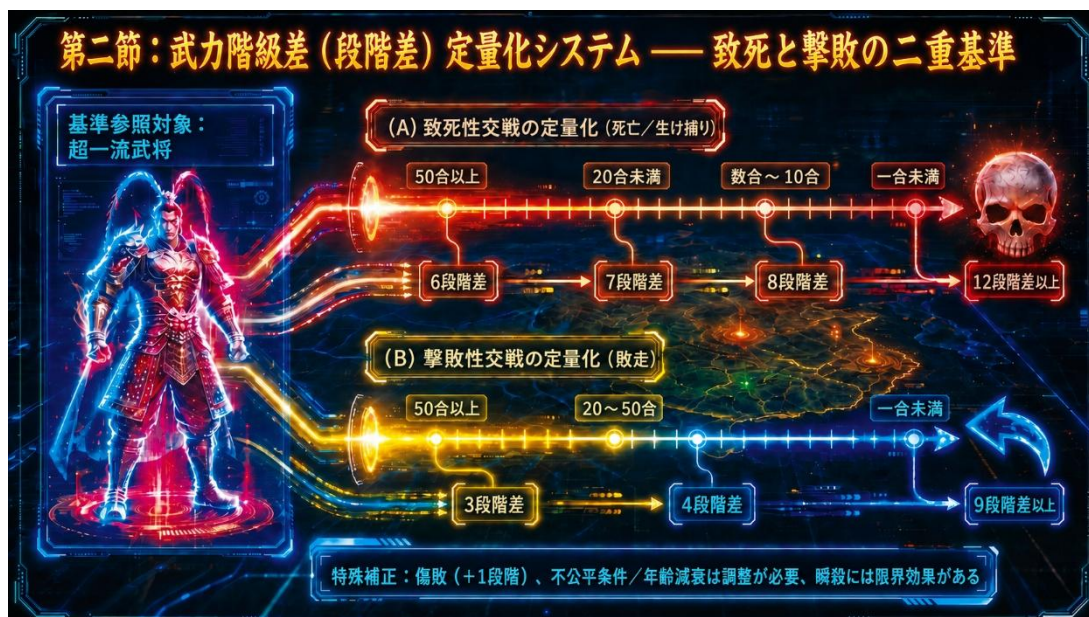
四、全書武力階級総表

本書では、『三国志演義』に登場する541名の武將を、強い順に以下の38武力階級へ厳密に分類する。

- 【神級領域】：天下第一（唯一無二、ただ一人）。
- 【近神級領域】：超一流（当世の虎將、計九名）。
- 【準神級領域】：準超一流。
- 【超越領域】：最上位一流。
- 【一流名將】：強一流、中一流、弱一流。
- 【二流中堅】：強二流、中二流、弱二流。
- 【三流戰將】：強三流、中三流、弱三流。
- 【末流雑魚】：強四流（以下同様に続き、中間の22武力階級は省略）……弱十一流。
- 【非戦闘員】：ランク外（文官、平民、非戦闘型の女性などを含む。この分類は高水準の競技的武力を持たないため、前後の強弱順位を付けない）。

従来の武力階級の枠組みを突破する。武力第一位の人物は「断層的」に抜けた存在であり、単に超一流より少し強いだけではない。

第二節：武力階級差（段階差）定量化システム



【図解の要点：二軌道制の定量化スケール】

基準アンカー：図全体は左側の「超一流武将」を絶対的な参照系（階級差0）とする。

●→赤軌道（致死判定）：「実力差が大きい」場合を示す。戦死または生け捕りという結末なら、たとえ20合持ちこたえても、なお最大7段階ほどの巨大な隔たりがある。瞬殺（1合未満）なら、差は12段階以上まで広がる。

●→黄青軌道（敗北判定）：「実力差が明確」な場合を示す。敗走しただけで死亡していない場合、同じ合数なら、実力評価は「死亡した者」よりおおむね3段階ほど高くなる。

◎→結論：生き残ること自体が実力である。超一流を相手に「敗れても死なない」ことは、一流武将の価値を測る黄金基準となる。

一、核心定義：強弱の距離を測る物差し

定義：武力階級のピラミッドを確立した後は、異なる階級同士の具体的な差を測る物差しが必要になる。本書では、この階級をまたぐ実力の隔たりを「武力階級差（Martial Grade Gap）」（通称「段階差」）と定義する。

●→計算例

◎→隣接階級差：「超一流」と「準超一流」の間は、武力階級差1段階。

◎→跨階級差：「超一流」と「中二流」の間は、武力階級差7段階。

◎→大幅な階級差：「準超一流」と「中四流」の間は、武力階級差12段階。

二、黄金基準：「超一流」を基準とする実戦定量化

本書の武力階級差システムは、思いつきで作ったものではない。『三国志演義』にある大量の実戦描写から、厳密な「戦闘結果 vs 階級差対応表」を構築したものである。基準を統一するため、筆者は戦力が最も安定した「超一流」武将を「基準指標」とし、他の武将が超一流と戦った際の「合数」と「最終結果」を観察して武力階級差を逆算し、その武力階級

を決定する。これらの階級差は、任意の二つの武力階級間に適用でき、超一流との比較だけに限定されない。

三、戦闘結果定量化表（基準指標：超一流武将）

原著本文を詳細に定量化した結果、本書は以下の二つの中核基準を導き出した。

（A）致死性交戦定量化表（結果：戦死または生け捕り）

●→適用場面：一方の死亡または捕縛で戦闘が終了したケースに適用する。

超一流との交戦合数	武力階級差（超一流より下）	備考：戦死または生け捕り
20 合～50 合以上	6 段階	相当な抵抗能力を持つ
10 合以上～20 合未満	7 段階	
数合未満～10 合	8 段階	
3 合～5 合	9 段階	
2 合～3 合未満	10 段階	
1 合～2 合未満	11 段階	ほぼ瞬殺
1 合未満	12 段階以上	瞬間的な瞬殺（下記の特別説明を参照）

（B）敗北性交戦定量化表（結果：敗走。ただし死亡・捕縛なし）

●→適用場面：一方が敗北して逃れたケースに適用する。分析の結果、同じ合数なら、「敗れただけ」の者は「戦死／生け捕り」となった者より、実力評価が通常およそ3武力階級差ぶん高い。

超一流との交戦合数	武力階級差（超一流より下）	備考：敗北のみ
20 合～50 合以上	3 段階	超一流と中～長期戦を行える
10 合以上～20 合未満	4 段階	
数合未満～10 合	5 段階	参考例：于禁は9合で馬超に敗北

3 合～5 合	6 段階	
2 合～3 合未満	7 段階	
1 合～2 合未満	8 段階	
1 合未満	9 段階以上	交戦直後、または交戦前に潰走

四、動的調整パラメータ

実戦環境は複雑で変化が大きく、前頁の二表だけではすべてのケースを網羅できない。そのため、以下の調整パラメータを導入する。

1、戦闘結果スペクトル（価値の高い順）

●→戦闘結果が示す実力の強さは、引き分け＞敗北せず＞やや劣勢＞敗北＞負傷敗走＞戦死～生け捕り、の順とする。

◎→注：生け捕りと戦死が示す実力差は基本的に同程度だが、生け捕りのほうが心理的な屈辱は大きい。

2、特殊補正規則

●→負傷敗走補正：武将が負傷して敗走したものの死亡していない場合、「致死性交戦定量化表」を基準に、武力階級を1段階上方補正できる（多くのケースに適用）。

●→不公平対決補正：奇襲、包囲、兵力差、地形的不利などの干渉要因が存在する場合、武力階級差を状況に応じて適度に上方または下方補正する（すべての武力階級差に適用し、1合未満での斬殺・捕縛・負傷敗走も含む）。

3、「1合未満」と年齢に関する特別説明

●→「1合未満」の階級差を「9段階、12段階、またはそれ以上」とする理由：攻撃対象が極端に弱い場合（たとえばランク外の貂蟬）、攻撃者が最上位級の強者（関羽・甘寧など）でも末流武官（黄祖など）でも、「1合未満」で斬殺・生け捕り・負傷敗走させることが可能になるからである。

◎→結論：この場合、戦闘結果そのものに限界効用の逓減が生じ、攻撃者同士の強弱を区別できなくなる。そこで攻撃者間の差を表現するため、「13段階」「14段階」、さらにそれ以上の階級差を導入する必要がある。9または12を境として上方・下方へ調整し、当時の有利不利に応じて決定する。

●→年齢減衰補正：60歳前後は軽微な低下と見なし、原則として補正しない。70歳以上は高齢と見なし、原則として武力階級を下方補正する。

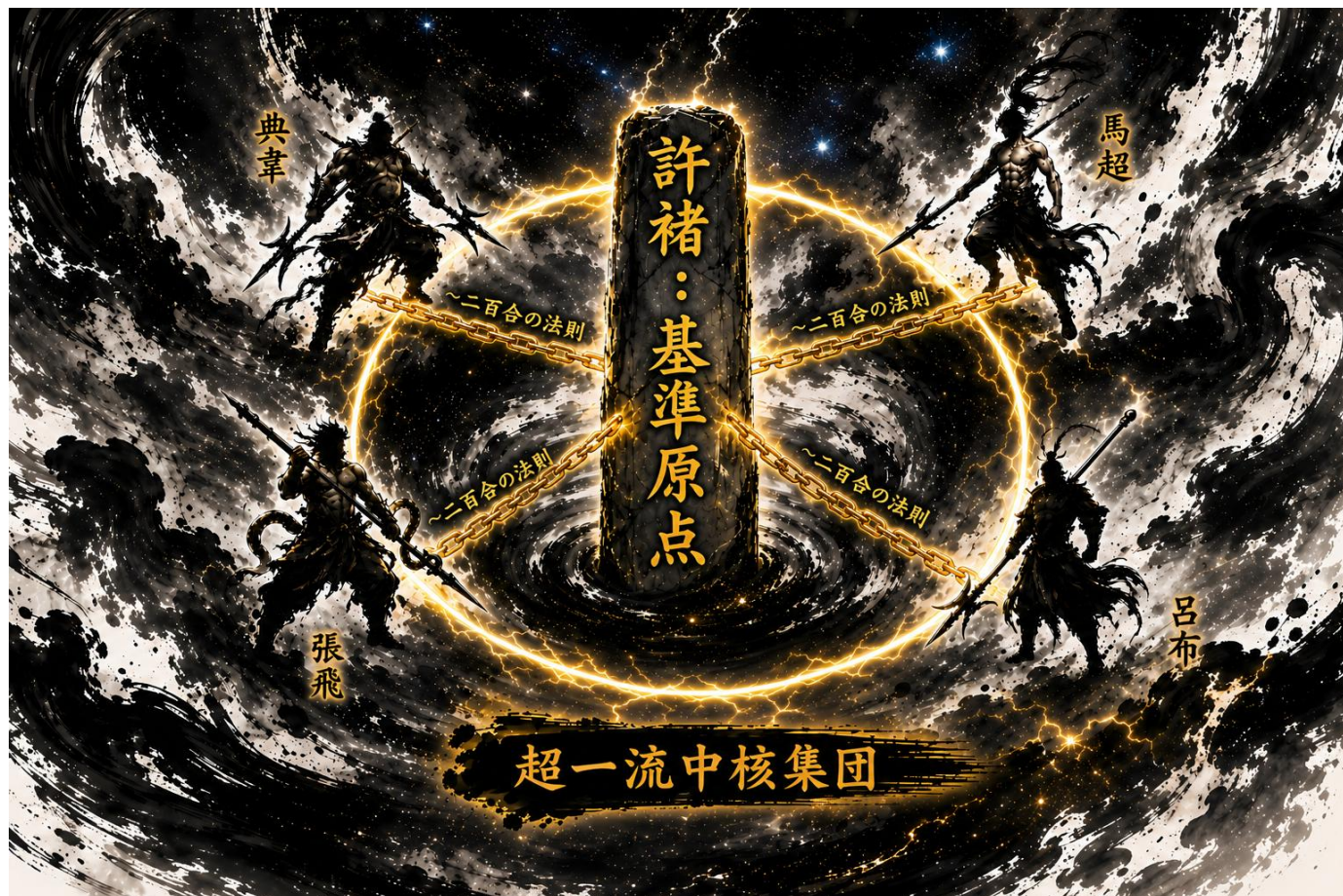
◎→例外：特殊個体である趙雲は「武力恒定特性」を持つため（P. [592] 戦例457下方「時間座標：北伐直前」を参照）、70歳という高齢でも超一流階級に固定され、減衰補正を行わない。



【図解の要点：年齢減衰法則における唯一の例外】

- 1、黒墨（凡人の宿命）：不可逆の歳月による侵食を象徴する。データ上、武将は60歳を超えると体力と反応速度が放物線的に低下し、70歳の高齢では原則として武力階級を強制的に1～2段階下げる必要がある。
- 2、金光（趙雲の特例）：「武力恒定」という特殊属性を象徴する。鳳鳴山の戦いでは、趙雲は70歳にして韓家五将を単独で斬り、さらに八万の軍へ突入して無人の境に行く。その爆発力と持久力は壮年期と比べても驚くべき「ゼロ減衰」を示す。
- 3、結論：この定量化システムでは、歳月は英雄の寿命を奪えても、趙雲の「超一流」判定だけは奪えない。

第三節：超一流武力階級の基準原点——許褚



【図解の要点：許褚——武力世界の「本初子午線」】

- 1、中央石柱（絶対アンカー）：定量化体系における許褚の戦略的位置を象徴する。彼は必ずしも全書の「武力の天井」ではないが、唯一の「汎用分銅」である。曹営の虎侯として、呂布・典韋・馬超・張飛のすべてと高品質な交戦記録を持つ唯一の武将であり、ゆえに武力座標系の原点へ設定される。
- 2、黄金鎖（200合の法則）：揺るがない論理連結を象徴する。馬超・典韋らとの「200合大戦引き分け」という硬質な戦績によって、許褚は本来ばらばらだった強者たちを一つの論理的な循環構造へと結び、「超一流中核集團」の基準線を定義する——許褚~典韋~馬超~張飛~呂布。
- 3、結論（万法帰一）：許褚は三国武力評価界における「グリニッジ標準時」である。この石柱を確立してこそ、「関羽と秦瓊を戦わせる」式の主観的空想を脱し、真に厳密な定量化の新時代へ入ることができる。

一、基準確立：なぜ許褚を選ぶのか？

巨大な三国武力体系を構築するには、安定して信頼できる「基準指標（Benchmark）」を見つけることが極めて重要である。本書は厳密な考証を経て、曹魏の猛将・許褚を「超一流」武力階級を定める原点として採用した。

理由は、許褚が『三国志演義』全体の中でも、最上級の強者との交戦記録に最も高い比較価値を持つ人物だからである。彼は呂布、典韋、馬超、張飛、趙雲、高覧ら絶世の猛将と次々に交戦しており（五虎将の中では黄忠だけと未交戦）、その戦績は極めて高い参照価値と普遍性を持つ。

許褚を「超一流」の基準として確立すれば、「実戦記録」と「本文中の賛詩」という二重の検証を通じて、第一陣となる核心的な「超一流」武将群を導き出すことができる。

二、実戦記録：「200合引き分け法則」に基づく等価連鎖

最上位級の武将同士の対決で、双方が200合前後（作中時間では約5時間。第四節の合数換算を参照）まで激戦しても勝負がつかない場合、本書は両者を同一武力階級と見なし、差はごく小さいとする。

1、許褚の直接対位

●→許褚～典韋：戦例93を参照。二人は葛坡で、辰の刻から午の刻まで戦い、さらに黄昏まで続け、累計200合を超えて引き分けた。

●→許褚～馬超：戦例306を参照。渭橋の戦いで、許褚は裸身となって馬超と死闘し、累計200合以上を戦って引き分けた。

2、等価伝達による導出

●→馬超～張飛：戦例336を参照。葭萌関の戦いで、二人は灯火を掲げて夜戦し、累計約200合以上を戦って引き分けた。

●→張飛～呂布：戦例32（三英戦呂布、約80合）、戦例110（追い迫ることをためらう）、戦例131（徐州で百余合）、戦例151（合数不明、呂布敗走）の計4回の交戦記録があり、張飛と呂布の累計交戦も200合近い引き分けとなる。

3、実戦の総括

許褚という中核ノードを通し、さらに武力の等価伝達原則（ $A=B$ 、 $B=C$ 、 $C=D$ 、 $D=E$ なら、 $A=E$ ）を組み合わせることで、堅固な武力の循環構造を得ることができる。

公式：典韋（200合）＝許褚（200合）＝馬超（200合）＝張飛（200合）＝呂布（200合）

三、本文の賛詩：羅貫中の原意による「武力階級」

実戦記録だけでなく、原著中の「賛詩」は、原作者・羅貫中が人物の武力へ下した公式評価を示すことが多い。

1、「許褚～呂布」を確立する決定的賛詩

●→『三国志演義』の「葉本」と「嘉本」では、許褚が曹操へ帰順した後、次の重要な賛詩が置かれている。【葛坡で許褚が降伏してより、これから何を恐れよう、呂布が強くとも！】。

●→詩の解釈：この一節は、作者の目には許褚を得ることが呂布へ対抗できる戦力を得ることに等しい、すなわち「許褚≈呂布」であると直接示している。これは前述の200合引き分けから導いた実戦上の結論と高度に一致する。

●→学術注記：清代の「毛本」は改訂時にこの賛詩を削除した。筆者は、毛氏が呂布を「いつの間にか天下第一へ押し上げる」イメージを作るために恣意的に削ったと考えており、羅貫中本来の武力設定を極めて大きく歪めた。本書の評価では、より原意に近い「葉本」を重視する。

2、「張飛≈呂布」を確立する賛詩

●→張飛と呂布の虎牢関大戦：戦後の賛詩は両者の強さを【激戦してなお勝負は決しなかった】と総括している。

●→賛詩の解釈：この詩も「張飛≈呂布」という実力位置づけを再確認する。同時に、実戦で両者が本当に勝敗を決するには200合以上が必要になるという本書の推論とも一致する。

四、総合結論：超一流中核集団の確立

「実戦200合法則」と「羅貫中の原意を示す賛詩」という二重の考証によって、『三国志演義』武力体系の中で最も核心的かつ安定した「超一流集団」を確立できる。

公平な一騎討ちという条件なら、許褚、典韋、馬超、張飛、呂布の五人同士の対決は、開始時点から少なくとも200合（約5時間）の長期戦を覚悟すべき戦いとなる。許褚を「超一流」の基準原点に置く以上、厳密な論理導出によって、残る四人も疑いなく「超一流」へ分類される。

呂布の「三英戦」をどれほど持ち上げても、結局は「超一流集団」という呪縛から逃れられない。呂布が許褚を倒せるとしても、それは少なくとも200合より後の話だ。では三英戦で敗れた呂布が、この一戦だけで本当に天下第一と称えられるのか？ まずは許褚の200合に聞いてみるべきだろう！

第四節：時間単位の定量化——「一合」の定義



【図解の要点：「一合」の物理的定義と体力ロジック】

- 1、左巻・巨視的分析（時間アンカー）：戦例336「葭萌関の戦い」を測定原点とする。張飛と马超は午後（約13:00）から日暮れ（約18:00）まで戦い、純戦闘時間は約300分、合計200余合に及んだ。公式（300÷200）で換算すると、「一合≈1.5分」という物理的定義が得られる。
- 2、右巻・微視的ロジック（体力検証）：戦例344「龐徳への車輪戦」を体力面の裏づけとする。曹營の三将が交代で龐徳を消耗させ、合計3合、約5分を費やして初めて龐徳の体力を削り、最後に許褚が仕留める機会を作った。これは「合」が瞬間的な一動作ではなく、突進、交戦、馬を返しての調整まで含む高密度な体力消費過程であることを示す。
- 3、結論：ゲーム的な読み方を退ける。演義における「一合」は動的な戦術単位で、所要時間は約90秒。その中には約20回の兵器衝突と擦れ違いざまの攻防が含まれ、体力ゲージの消耗速度を測る基本目盛りとなる。

一、認識の修正：「一合」とは何か？

1、よくある誤解

●→『三国志演義』を読む際によくある誤解は、「一合」を双方の武器が一度ぶつかるだけの動作（一往復）と捉えることである。筆者は、この解釈は羅貫中原本の時間・空間感覚と大きく異なり、張飛VS马超の200合が約5時間に対応することも説明できないと考える。

2、本書の定義

●→精密な武力定量化基準を構築するため、筆者は「時間推定」と「体力ロジック」の二重検証によって、「合」を以下のように定義する。

二、時間推定：「葭萌関の戦い」に基づく数学計算

戦例336（張飛VS馬超）を参照。作中では、二人が「午後」から「日暮れ」まで戦い、その後さらに火を灯して夜戦へ入ったことが明記されている。

1、戦例データ

●→時間幅：午後（約13:00）から日暮れ（約18:00）まで。途中の小休止と馬の交換時間を除き、純戦闘時間は約5時間（300分）。

●→合数合計：作中では二人が約200余合を戦ったと記される。

2、計算式： $300分 \div 200合 = 1.5分 / 合$

3、結論：高強度の一騎討ちでは、1合の平均時間は約1.5分となる。

三、体力ロジック：「龐徳への車輪戦」に基づく戦術分析

戦例344（曹操の車輪戦による龐徳攻略）を参照。曹操は龐徳を降伏させるため、張郃・夏侯淵・徐晃の三将を交代で出陣させ、体力を消耗させて【力尽きる】状態へ追い込み、その後には捕らえることを狙った。

1、戦況の復元：作中では、張郃、夏侯淵、徐晃の三人がそれぞれ【一合】（「葉本」では各1合のみ）戦ってから退いたと記されている。

2、論理的矛盾の検証（仮定：1合＝5秒）

もし「1合＝一往復の武器衝突（約5秒）」という説を採るなら、龐徳のような猛将を相手に5秒戦ってすぐ退くことで、いったい何を消耗させられるのか。それでは【力尽きる】どころか、むしろウォーミングアップに近い。

3、合理的推定（仮定：1合＝1.5分）

筆者の「1合≈1.5分」という定義を採って初めて、三名の大将が交代で合計約5分ほど消耗を強いたことになり、龐徳を【力尽きる】状態へ追い込むという戦術目的が成立する。

四、定義の総括

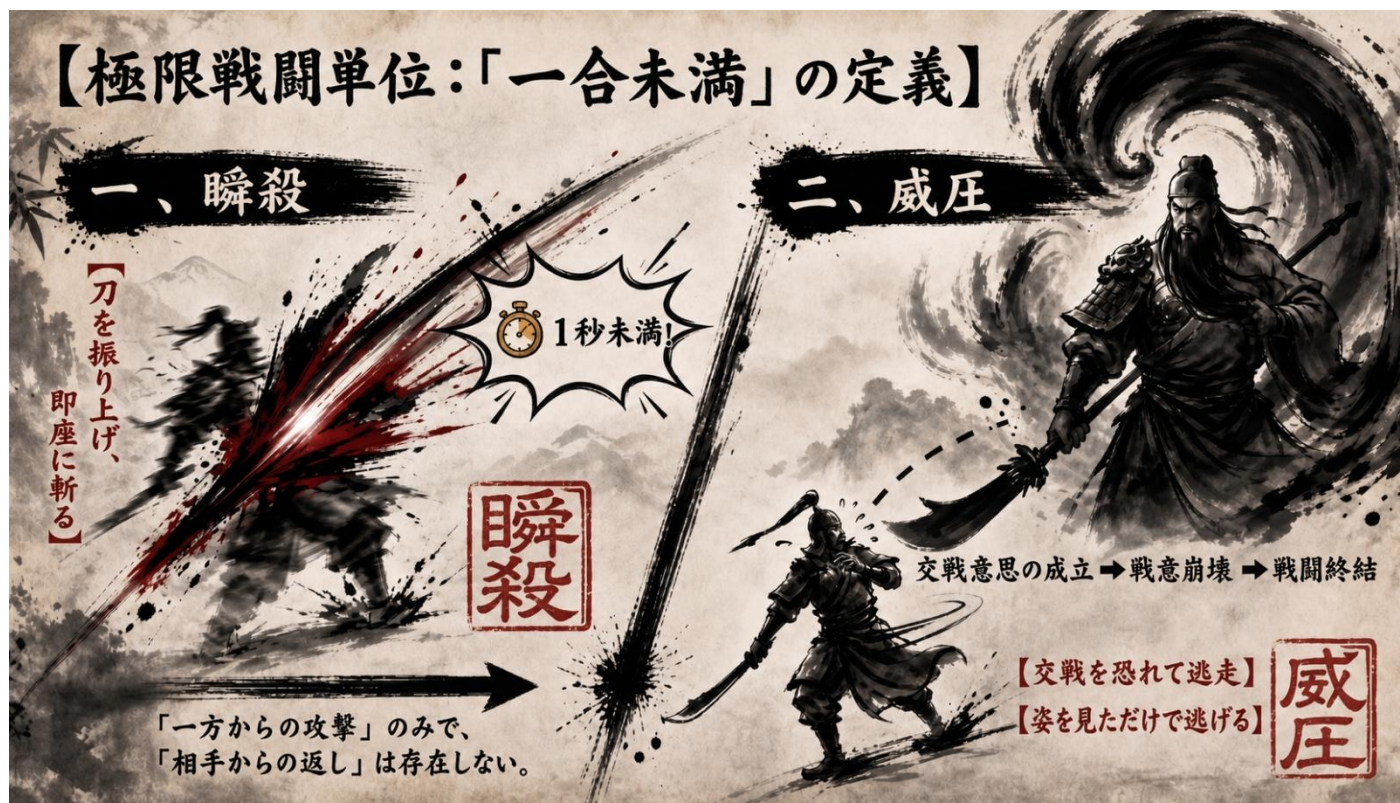
以上を総合し、本書における「一合」の標準定義を次のように定める。

最終基準

●→1合≈1.5分：約20回以上の兵器攻防と、馬同士が擦れ違う攻防を含む。

◎→概念上の定義：「時間経過」と「体力消耗」を内包する動的な計量単位であり、単純な動作回数ではない。

第五節：極限戦闘単位——「一合未満」の定義



【図解の要点：瞬獄殺——「1合未満」】

- 1、左側・物理的極限（瞬殺）：「刀を振り上げ、即座に斬る」という絶対速度を描く。武力差が防御反応そのものを引き裂くほど大きい場合、戦闘にはもはや「往復」の駆け引きはなく、一方向の虐殺だけが残る。関羽が顔良を斬ったようなケースでは、過程は1秒未満で、「一方からの攻撃」だけがあり、「相手からの返し」は存在しない。
- 2、右側・心理的極限（威圧）：「姿を見ただけで逃げる」という戦場支配を描く。戦闘は兵器の衝突だけでなく、意志の勝負でもある。一方の気迫が相手の戦意を押し潰すほど強い場合（呂布・関羽の威など）、相手が「交戦を恐れて逃走」すれば、これも「1合未満」の範囲に含める。
- 3、結論：「1合未満」は戦闘過程ではなく、戦闘結果の極致である。定量化システム上の「無効抵抗領域」を意味し、強者が弱者へ行う「次元を一段下げた攻撃」を示す専用ラベルとなる。

一、基本概念：「一合未満」とは何か？

定義の整理

●→本書の定量化体系では、「1合未満（一合に満たない）」は、武力差が極限まで開いた状態を示す。多くの読者は「一合」を瞬殺と捉えがちだが、前節の定義によれば、一合には約1.5分を要し、戦場ではすでに約20回の攻防往復が含まれる。

◎→真の「瞬殺」は、双方の兵器が一つの完全な攻防循環（攻撃と反撃）を終えるより

前に発生しなければならない。

◎→本書では、次の二つの戦場状況——瞬殺と威圧——を厳密に「1合未満」と定義する。

二、瞬殺（Instant Kill）：兵器が接触する刹那

1、キーワード

原著に【手起】【鎗起】【刀起】【立斬】【一鎗】【一刀】【一戟】などのキーワードが現れる場合、筆者はこれを「1合未満」と定義する。

2、中核解析

●→動作解析：この時、双方の兵器には「一来（接触）」しかなく、「一回（反撃）」が存在しない。

●→時間の定量化：その過程は多くの場合、わずか1秒前後である。

●→戦術的意義：これは絶対的な実力差による圧倒であり、弱者は強者が手を出した瞬間に斬り殺される。これこそ本当の意味での「1合未満」の「瞬殺」であり、1.5分を要する「一合での斬殺」とは異なる。

三、威圧（Intimidation）：交戦意思が成立した時点で決着

1、定義とロジック

●→交鋒を恐れて逃走：物理的な接触だけでなく、戦場または戦闘条件が整った場において、一方の一騎討ちの意思がすでに成立している場合（例：武器を抜いて突撃する）、双方の兵器がまだ実際に接触していなくとも、劣勢側が強者の威に吞まれて「交鋒を恐れて逃走」したなら、本書ではこれも「1合未満」と判定する。

◎→定量化の精度：この種の状況はデータ上、0.5合、さらには0.05合と細分することもできるが、統計を統一するため、本書では一律に「1合未満」と総称する。

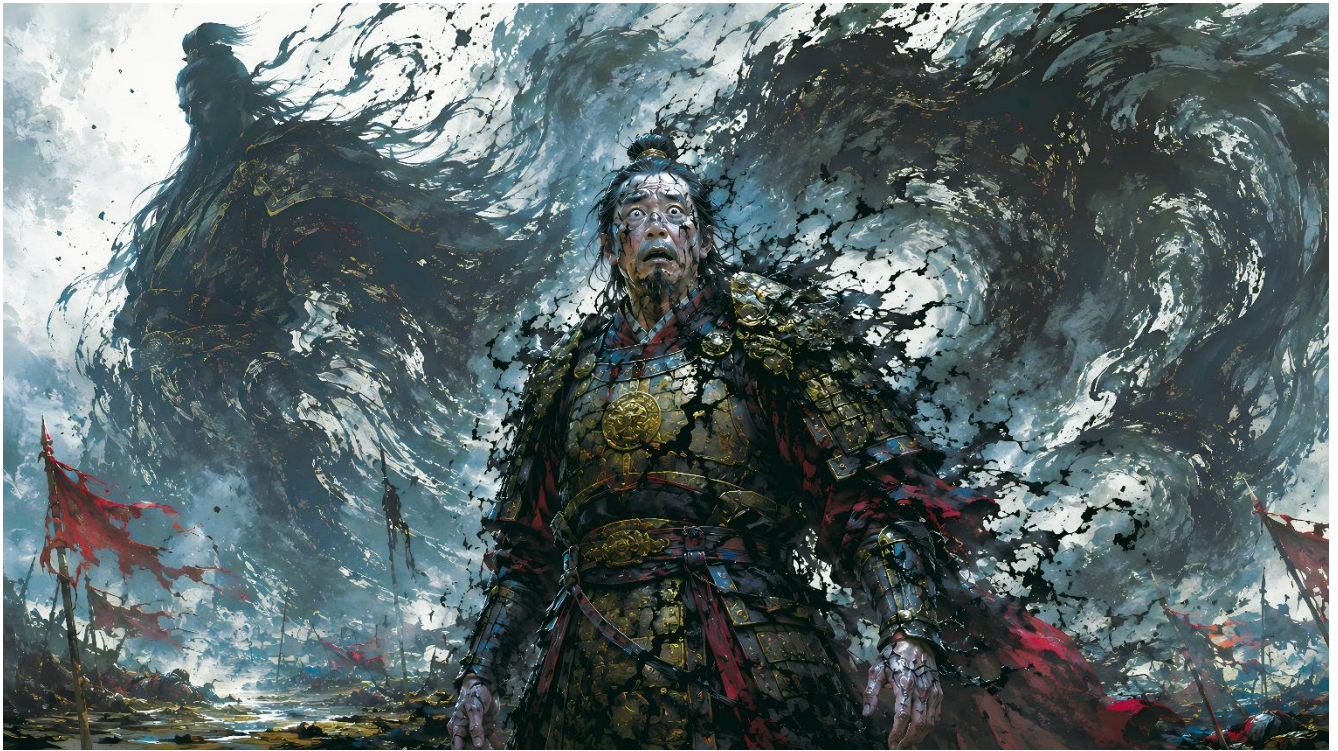
◎→判定ロジック：戦闘の本質は相手を打ち負かすことにある。一方が威圧（Intimidation）によって戦意を失い潰走した時点で、論理上その戦闘はすでに終了しているため、極限的な短時間で決着する「1合未満」に分類する。

2、判定上の制限

しかし、交戦に至らなかったすべての対峙で強弱を判別できるわけではない。以下の二つの状況を区別する必要がある。

●→威圧不成立（無効な対峙）：威圧する側が最終的に相手を逃走させることができず、双方が対峙を続けたまま事態が自然に終結した場合（例：双方が兵を引く）、両者の強弱は判定できない。本書では両者を「同一の強度階級」とみなし、記号~で表す。

●→心理的崩壊（有効な圧制）：圧力を受けた側が辛うじて踏みとどまり逃走しなかったとしても、原著がその内心を「異常な恐怖」（例：手足無措、胆顫心驚、面如土色）と明確に描写しているなら、心理防衛線はすでに崩壊している。この場合、逃げていなくても双方の強弱を判定できる（威圧側＞被威圧側）。



【図解の要点：心理戦判定——肉体は動かずとも、魂魄はすでに散る】

- 1、外部圧力（気迫の実体化）：背景を覆う重い黒墨の奔流は、強者（張飛・関羽など）が放つ絶対的な威圧力を象徴する。この圧力は兵器の接触を必要とせず、相手の感覚と神経へ直接作用し、精神次元における「次元を一段下げた攻撃」を形成する。
- 2、内部崩壊（心理的撃殺）：本人は辛うじて立ったまま逃げているが、全身に走る「亀裂」と「崩壊」の筆致は、原著にいう「手足無措、面如土色」の心理状態を具象化したものである。これは防御機構が完全に麻痺し、反撃の可能性を失ったことを示す。
- 3、結論：戦闘は意志が消えた瞬間に終わる。定量化システムでは、一方が「異常な恐怖」（平たく言えば、漏らすほどの恐怖）に陥れば「戦意ゼロ」と判定する。この時、肉体が生きているか否かにかかわらず、論理上はすでに「敗北」と同義であり、極限的な短時間で決着する勝負に分類される。

第六節：威圧の極致——「交鋒を恐れて逃走」の判定



【図解の要点：威圧の具象化——「交鋒を恐れて逃走」へ至る崩壊】

- 1、背景・呂布の投影（絶対的圧倒）：戦例13を参照。天を覆う巨大な呂布の黒影は、「勝てない」という心理暗示を象徴する。この視覚的な窒息感「断層的な武力差」を直感的に示し、強者の気迫そのものが精神兵器となり得ることを表している。
- 2、前景・太師の潰走（生存本能）：肥満した董卓が兜も鎧も捨て、恐怖の表情で逃げる姿は、「交鋒を恐れて逃走」の実像を演じている。極限の恐怖を前にすれば、梟雄でさえ刀を振るう勇気を失い、理性が完全に生存本能へ道を譲ることを示す。
- 3、結論：勝敗は交戦の前にすでに決している。この図が描くのは実戦ではなく心理戦である。一方が「探りを入れる」勇氣すら奪われた時、その武力階級差はすでに「交鋒を恐れて逃走」の領域まで開いている、という基準を確立する。

一、現象解析：武力の位置づけにおける絶対的圧倒

「交鋒を恐れて逃走」とは何か。それは戦場において、双方の武力の溝が臨界点へ達した時に現れる極致の現象である。劣勢側が短兵相接する前から、両者の間に「断層的な実力差」が存在すると正確に判断した場合、あるいは戦局全体の雪崩的崩壊に巻き込まれ、実際の兵刃が交わるより先に心理防衛線が完全崩壊した場合、弱者は「抵抗を放棄し、背を向けて逃走する」という生存の選択を取る。

本書の定量化体系では、この行為を厳格に次のように定義する。すなわち、上位の強者が下位の弱者へ加える「絶対的威圧」であり、公平な条件下では下位者に上位者を打ち破る可能性はない。

二、典型戦例：生存本能による潰走

この種の戦例では、劣勢側が実力差を正確に見積もり、生き延びるために逃走を選ぶ。交戦はなくとも、勝敗はすでに決している。

1、【戦例13】：董卓、呂布に敗れる。

●→戦況：董卓は勇猛であっても、呂布の圧倒的な武力を前に勝てないと悟り、交鋒を恐れて逃走した。

2、【戦例60】：牛輔、呂布に敗れる。

●→戦況：牛輔は呂布の威に吞まれ、戦うことすらできずに潰走した。

3、【戦例68】：陶謙、夏侯惇に敗れる。

●→戦況：文官型の統帥が猛将を前に、戦わずして逃走した。

4、【戦例308】：曹操、馬超に敗れる。

●→戦況：髭を切り、袍を捨てた戦い。曹操は双方の武力差が大きいことを知り、唯一の生存戦略——直接逃げることを——を選んだ。

三、戦術的パラドックス：防御ゼロの代償

注目すべきことに、特殊な「交鋒を恐れて逃走」の中には、かえって劣勢側の死を早めるものがある。これらの事例は、残酷な戦場ロジック——「背を向けて逃げる方が、正面から防御するより危険なことが多い」——を示している。

1、【戦例18】：鮑忠、華雄に討たれる（1合未満）。

●→行動：鮑忠は華雄を恐れて逃走したため背後をさらし、華雄に追いつかれて一刀のもとに斬られた。

◎→戦況：もし鮑忠が「守って防ぐ」ことを選んでいれば、勝てなくとも数合は耐えられた可能性があり、瞬時に命を落とすことまではなかったかもしれない。

2、【戦例510】：桓嘉、丁奉に討たれる（1合未満）。

●→行動：桓嘉は交鋒を恐れて逃走したため、逆に丁奉の追撃を受けて斬られた。

◎→戦況：同様に、もし正面から迎え撃つことを貫いていれば、敗死までの時間を延ばせた可能性があり、瞬時に命を落とすことまではなかったはずである。

四、判定境界：「交鋒を恐れて逃走」・異常な恐怖・慎重（警戒）の違い

心理的に軽々しく攻撃へ出られないだけで、①実際の逃走行動＋②異常な恐怖（漏らすほどの恐怖）の二状態が生じていないなら、第五節の「威圧不成立」と同様、「交鋒を恐れて逃走」には分類できない。

1、【無効戦例110】：呂布、張飛を警戒する。

●→原文：【布、飛の勇を知り、また追うを敢えてせず】。

◎→判定：呂布は張飛を警戒していたが逃走はせず、対峙状態を維持していた。これは強者同士の慎重さであるため、判定は呂布≈張飛。

2、【無効戦例305】：馬超、許褚を警戒する。

●→原文：【超、これを懼れて敢えて動かず、すなわち馬を勒して回る】。

◎→判定：馬超は許褚の勇に驚き警戒したものの、馬を引いて陣へ戻っただけで、潰走したわけではない。これは超一流武将同士の慎重さであるため、判定は馬超≈許褚。

第七節：「交鋒を恐れて逃走」の真の戦力—— 「仮想交鋒」の定量化推論



【図解の要点：仮想交鋒シミュレーション——「10合致死圏」の法則】

1、システムロジック（行動対照）：本図は「ビッグデータ復元」によって、「交鋒を恐れて逃走」の背後にある真の戦力を解析する。システムは孔秀・韓徳・于禁など、「交鋒を恐れて逃走した記録」と「実際に参戦した記録」の双方を持つ貴重な二重サンプルを選び、交差比較を行うことで、彼らが「逃げずに戦った」場合の合数と結末をシミュレートする。

2、データスペクトル（赤色警戒区域）：図中の赤色区間が「死亡禁区」である。

●→瞬殺圏：孔秀・朱讚のように、逃げれば生き、戦えば「1合未満」で殺される。

●→短命圏：韓徳のように、無理に交戦しても「3合未満」で殺される。

●→極限圏：于禁のように、「10合未満」（馬超に9合で敗北）まで耐えても、その直後には崩壊する。

3、結論：恐怖は正確な生存直感から生まれる。「交鋒を恐れて逃走」と判定される事例では、強者との真の実力差は「10合以内に必ず敗れる、または死ぬ」という絶対区間へ固定される。これは越えることのできない武力の断層である。

一、命題の提示：恐怖は誇張されているのか？

1、命題の定義

武将が「交鋒を恐れて逃走」を選んだ時、それは単に臆病すぎたということなのか。もしその場で恐怖を克服し、正面から敵へ立ち向かっていたなら（Face the Enemy）、いったい何合まで耐えられたのか？

2、解決方法

この「実際には起こらなかった」戦闘データを定量化するため、本書は「行動対照法」を導入する。原文中に「潰走記録」と、同じ相手との「交鋒記録」の両方を持つ貴重な戦例を選び、推論の基準サンプルとする。

二、サンプル検証：逃走と戦死の行動対照

以下の四組の高度に関連する戦例を通じて、「交鋒を恐れて逃走」の背後にある実戦合数を正確に描くことができる。

1、【瞬殺】生存時間<1合

●→戦例対照（孔秀VS関羽）

●→行動一：戦例175で、孔秀は初めて関羽の神威を目にし、交鋒を恐れて城内へ逃げ込んだ（逃走）。

●→行動二：戦例176で、孔秀は怒りに駆られ、城外へ出て正面から交戦することを選んだ。

●→結果：わずか「1合未満」で関羽に斬られた。

●→戦例対照（朱讚VS趙雲）

●→行動一：戦例473で、朱讚は趙雲の威に吞まれ、交鋒を恐れて逃走した。

●→行動二：戦例479で、朱讚は再び趙雲と遭遇し、今度は交戦を選んだ。

●→結果：わずか「1合」で趙雲に刺し殺された。

●→推論：この種の潰走は「絶対的に正確な生存直感」である。逃げなければ、即死する。

2、【短命】生存時間<3合

●→戦例対照（韓徳VS趙雲）

●→行動一：戦例459で、韓徳は四人の息子が討たれるのを目撃し、胆を冷やして交鋒を恐れ逃走した。

●→行動二：戦例461で、韓徳は軍勢を立て直した後、仇討ちを試みて正面から交戦した。

●→結果：わずか「3合未満」で趙雲に馬上から斬り落とされた。

3、【極限】生存時間<10合

●→戦例対照（于禁VS馬超）

●→行動一：戦例298で、于禁は馬超と正面から戦い、「8~9合」耐えた末に敗走した。

●→行動二：戦例311で、于禁は再び馬超と遭遇し、前回の痛烈な経験を踏まえて、今度は直接「交鋒を恐れて逃走」を選んだ。

●→結果：死にはしなかったが、「10合未満」で潰敗した。

●→推論：于禁は、この種の「交鋒を恐れて逃走」する武将における「極限合数」を示す。どうにか応戦できたとしても、10合を越えることはできない。

三、定量化の結論：10合致死区間（The 10-Round Death Zone）

以上を総合すると、「交鋒を恐れて逃走」が発生したすべての戦例において、劣勢側を強制的に「死戦モード」へ置いた場合、その生存合数は極めて安定した区間——「1合未満（瞬殺）~9合（敗走／戦死）」——を示す。本書で「交鋒を恐れて逃走」と判定された劣勢側は、その真の戦力と優勢側との差が、すべて「10合以内に必敗または必死」という絶対区間に収まる。これは越えることのできない戦力の断層である。

第八節：「数合」の数値定量化基準

一、定義の背景

『三国志演義』原文では、双方の短い交鋒を「戦不数合」または「鬪数合」と表現することが多い。データを精密化するため、本書では「数」という字を本文考証し、その具体的な合数区間を定める。

二、本文考証の根拠

1、上限の設定（最大値）

●→原文：【鍾会の兵は艾より十倍多く……我が軍は鄧艾より数倍多い】。

◎→解析：ここでは「十倍」と「数倍」が並列して対照されており、文脈上「数」の上限が十であることを示している。よって最大値を10と設定する。

2、実例による裏づけ（中間値）

●→原文：【旧来、呂布・袁術・袁紹・劉表だけが対敵できたが、今や数雄はみな曹公に殲滅された】。

◎→解析：文中では呂布・袁術・袁紹・劉表の四人を明確に列挙し、これらをまとめて「数雄」と呼んでいる。したがって「数」が4を指し得ることは確かである。

3、下限の設定（最小値）

●→原文：【檀溪、広さ数丈ほど……一躍して三丈】。

◎→解析：的盧馬が一飛びで三丈を越えて檀溪を渡ったことから、「数丈」の幅には三丈が含まれなければならない。よって「数」の最小値を3と定める。

三、本書のサンプリング基準

以上より、1～2合しかない場合、原文は多く「一、二合」と直接記す。したがって「数合」の論理区間は必ず3から始まり10で終わる。武力計算を統一するため、本書では「数合」を以下の基準で換算する。

論理区間：3～10合

最小値：3合

最大値：10合

【標準サンプル値】：最小値と最大値の加重平均を取り、7合と設定する（「数合」のデフォルト値）。

第九節：「半晌」の時間と合数換算

一、語義と状況の矛盾分析

「半晌」には字義上二つの解釈がある。一つは「半日」で約6時間、もう一つは「しばらく」で短い時間を意味する。これをそのまま武将同士の対決へ当てはめると、論理矛盾が生じる。

1、状況：典韋の死（静的威圧）

●→原文：【韋、金瘡裂け、血地に流れて死す。死して半晌、前門より入るを敢えてする者一人もなし】。

◎→推論：「半日（6時間）」と解すれば、遺体が長く硬直してもなお誰も入れないことになり、典韋の威は表せるものの、包囲戦のテンポとしては明らかに間延びし誇張が過ぎる。一方「しばらく」と解すれば、曹軍が典韋へ抱いた極度の恐怖を十分に表せない。

2、状況：許褚の一对二（動的戦闘）

●→原文：【許褚、二将（周泰・韓当）と半晌戦って、ようやく戻る】。

◎→「半日」と仮定：6時間の高強度戦闘は約240合に相当する。許褚が江東の二将を相手にこれほど長く一人で戦ってなお勝敗がつかない＝「超一流の許褚≈周泰+韓当」。

◎→「しばらく」と仮定：数十分にすぎないなら、「ようやく戻る」という時間感覚を十分に表せない。

二、本書の定量化基準

以上より、演義における「半晌」は物理時間の絶対値ではなく、「体感的な強度を伴う持続時間」である。最大値（半日）を採れば荒唐無稽に過ぎ、最小値（しばらく）では緊張感が足りない。そこで本書は「折衷加重法」を採用し、「半晌」を「体力の大部分を消耗するに足る中長時間の戦闘」と定義する。

標準換算式

●→時間定義：約2.5時間（半日と短時間の中間）。

●→合数換算：100合と設定する。

●→結論：書中に「戦半晌」と現れる場合、その武将が約100合の高強度対決を行ったものとみなす。



許褚は周泰+韓当と約100合（2時間半）戦って引

第十節：「多時」の定量化と「三英戦呂布」の実戦復元

「三英戦呂布」は『三国志演義』屈指の高潮であり、原文では呂布が三人の挟撃を受けて「挡不住、飛馬回陣」と描かれる。では、呂布はいったい何合まで耐えたのか。賛詩の原文は【三人圍繞して多時戦う】という一語で済ませている。虎牢関の戦いの実際の戦況を復元するため、本書はまず「多時」を精密に合数へ定量化する必要がある。



【図解の要点：「多時」の物理的分解——俞涉時空公式】

1、「多時」の構成：戦例22（重要原文）、華雄VS俞涉の「多時」戦例を参照。本図は「俞涉の死」を微視的に分析し、一騎討ちにおける「多時＝長く戦った」という読者の錯覚を打ち破る。原文の「多時」は「営を出て偵察→敵と一騎討ち→軍情を報告」という三つの時間過程を含み、単に一騎討ちの戦闘時間だけを指すものではない。

2、三段構成

●→青区・緑区（往復路）：本営から陣前まで、一往復する物理的移動時間（片道約5分）。

●→赤区（戦闘）：中核交火区域。俞涉は「3合未満」しか耐えられず、時間換算ではわずか約5分である。

●→結論：「多時」全体でも約15分にすぎず、合数換算では約10合の区間となる。決して100合単位の持久戦ではない。

3、一騎討ちにおける「多時」の考究：全書で一騎討ちに専用される「多時」はわずか二例。その一つである俞涉の「多時」（戦例22）が、呂布と三英の「多時」の合数の謎を解く鍵となる。

一、本文考証：「俞涉の死」から「多時」を定義する

1、精修されていない「葉本」「余本」

●→原文：【すなわち兪涉を出馬させる。多時して報が来た。「兪涉は華雄と戦い、3合にも満たず華雄に斬られた」】（葉本、余本）。

◎→解析：筆者は、両版本とも羅貫中の「多時」の原意を残していると考え。ここでの「多時」は明らかに「往復路程」の物理時間まで含む。そうでなければ、「3合未満」（わずか約5分）がなぜ「多時」を要したのか説明できない。

2、精修された「嘉本」「毛本」

●→原文：【すなわち兪涉を出馬させる。即時に報が来た。兪涉は華雄と戦い、3合にも満たず華雄に斬られた】（嘉本、毛本）。

◎→解析：これは原著に対する巨大な改変である！改訂者（蔣大器）は、「兪涉の多時」が同時に「呂布の多時」の誇張を突き破ることに気づいたのだろう。呂布の戦神像を守るため、わざと「多時」を「即時」に改め、この武力ロジックの穴を塞ごうとした。その影響は「毛本」にまで及び、「即時」がそのまま踏襲された。

3、考証の結論

本書は「葉本」「余本」を武力分析の基準とすることで、ちょうど「嘉本」「毛本」の盲点を突く。蔣大器が後世の読者を意図的に誤導したため、演義成立から六百年を経た今日まで、なお多くの武評家が呂布を最強と誤判している。

【多時】（戦例22）という悪魔的な細部は、「葉本」と「余本」にしか隠されていない。

●→時間構成の推論

◎→往路時間：兪涉が連合軍の本営から陣前まで騎馬で移動する（推定約5分）。

◎→戦闘時間：「3合未満」、約3合として換算（推定約5分）。

◎→復路の報告：斥候が陣前から本営まで走って戻り報告する（推定約5分）。

◎→定量化の結論：往路（5min）＋戦闘（5min）＋復路（5min）＝合計約15分＝【多時】。

二、実戦復元：呂布は三英の挟撃下で何合耐えたのか？

上で定義した「兪涉公式（多時≈15分）」を「三英戦呂布」に当てはめる。

1、時間換算：15分間の、走馬灯のような激戦。

2、合数換算：三英が一斉に加わった後、呂布が耐えたのはおよそ15分前後＝約10合（多くとも30合を超えない）で、その後に敗れて逃走した。

3、論理的確証：もし呂布が本当に三英の同時攻撃を50合以上も耐えられたのなら、羅貫中の執筆習慣（例：呂布と張飛の50合引き分け）から見て、合数を書かずに済ませるはずがない。数字を書かなかったのは、10合ではあまりに短く、そのまま書けば見栄えが悪いためであり、賛詩では「多時」とだけ記して呂布に少し面目を与えた美しい言い回しにすぎない。

三、10合の正しさを逆算する：2.3倍の極限圧制

なぜ呂布は10合しか耐えられなかったのか。「武力の位置づけ」から論理的に検証できる。

1、張飛≈呂布1人分：羅貫中の直接的意志を示す【激戦してなお勝負は決しなかった】（虎牢関賛詩）という位置づけ＋実戦で張飛が呂布と200合一騎討ちして引き分けたこと（第三節：超一流中核集団）を根拠に、両者の実力は伯仲と判定する。

2、関羽≈呂布1人分：虎牢関で関羽が「1合で、より強い華雄を斬殺」した戦績は、虎牢関で呂布が「2合でも、より弱い公孫瓚を殺せなかった」戦績を上回る。ここでは控えめに見積もっても、関羽の武力は呂布と同程度とする。

3、劉備≈呂布0.3人分：劉備の武力が低くとも、最後に荷を崩す一本の藁として、決定的な干渉を加えられる。

4、総合作戦効率：数字で言えば 1 VS 2.3 という概念である。呂布が対峙したのは、呂布 2.3 人分の強さ（三英）であり、呂布は絶対的の不利に置かれていた。

四、「10合」の価値はそもそも足りない

第三節によれば、許褚（200合）＝呂布（200合）である。仮に呂布と200合戦える許褚が三英と対峙し、わずか10合耐えて敗走したとしても、許褚が呂布より劣るとは限らない。したがって、「三英戦呂布」というわずか10合の敗戦だけで、呂布に「群雄を圧倒する」絶対的支配力があることを証明するのは困難であり、「演義第一」の確証とするにも足りない。いつもの話だが、呂布は許褚一人を相手にするだけでも200合かかる。この三英に敗れた戦績の、いったい何をそんなに誇るのか？



👤 呂布 1 人分 < 呂布 2.3 人

【図解の要点：三英による包囲狩りの数学的必然性】

1、絶望係数（1：2.3）

図表は虎牢関の戦いにおける実力差を直感的に示す。左側の呂布は強い（係数1.0）が、右側には張飛（1.0）＋関羽（1.0）＋劉備（0.3）の出力が重なり、総合戦力は2.3倍に達する。これは決闘ではなく、一方的な「虐殺」である。

2、ロジックによる封殺（小沛の100合戦）

もし呂布が一人で三人を相手に230%の火力へ「半日」耐えられるなら、小沛では張飛を楽に打ち破れていなければならない。ところが実際には100合戦って引き分けた後、身を隠して再び一騎討ちで雌雄を決しようとはしなかった。したがって「多時」の合数が長いはずはない。

3、許褚による封殺（200合戦）

もし呂布が一人で三人を相手に230%の火力へ「半日」耐えられるなら、許褚を200合かけても倒せないはずがなく、20合で大敗させていなければならない。この点からも、「多時」の合数が長くないことが裏づけられる。

4、崩壊までのカウントダウン（00:15:00）

中央のタイマーは「15分」で固定される。これは前文で導いた「多時」の概念に対応し、実戦換算で約10合を意味する。超負荷防御下における呂布の「物理的限界」を表している。

5、結論

敗走は数学的必然である。防御側が2.3倍の攻撃圧力を受ければ、いかなる防線も短時間で崩壊し、50合以上（1時間以上）も対峙し続けることはあり得ない。呂布の「飛馬回陣」は、まさに戦場の生存本能を正確に実行した結果である。

6、備考：辞典定義の二面性

●→「多時＝半日」という誤解について：正規辞典（台湾教育部『重編国語辞典』）における「多時」の定義は実際には二義を持ち、「長い間」を指す一方で「しばらく」（短い時間）をも意味する。

◎→1 VS 2.3という極限圧制下で、無理に「長い間（数時間）」と解釈すれば、 $2.3 > 1$ という数学的常理に反する。したがって本書は後者（しばらく）を採用する。この15分は当事者の呂布には「長く（度日如年）」感じられたとしても、客観時間では武力が崩壊するまでの「しばらく（短時間）」にすぎない。

◎→「多時」の合数概念から、呂布≈兪涉30人分（YS）≈関羽≈張飛、と推導できる。

第十一節：「戦不倒」の真相と「丁字戦陣」の 解明



【図解の要点：30合の丁字激戦・極限逃走ベクトル図】

この設計図は、「二英戦呂布30合」の物理・幾何学的な真相を明らかにする。これは追撃の性質を帯びた「高圧挟撃と極限逃走」の戦いである。

1、青軍（関羽・張飛）：60 YSの挟撃圧力（The Pincer Intercept）

●→戦力換算：左右の青いベクトル矢印は、関羽と張飛が連携した後、合計60 YSに達する戦闘力を表す。

●→戦術意図：二本の矢印は内側へ収束（Converging）し、呂布の行動半径を完全に圧縮しようとする。これは武力数値の加算だけでなく、物理的な質量においても絶対的な圧迫である。公式が示す通り、関羽（1）＋張飛（1）>>呂布（1）。二倍の戦力を前に、呂布が正面からその場に踏みとどまって硬く受ければ、自ら死地へ入るに等しい。

2、赤軍（呂布）：30 YSの運動エネルギー変換と極限離脱（The Escape Vector）

●→戦略転換：中央の赤色ユニットが呂布である。自らの二倍に達する挟撃陣形を前に、呂布は戦場で唯一正しい決断を下した——自身の「戦闘力」をすべて「逃走の運動エネルギー」へ変換することである。

●→赤兎エンジン（Mach 2.5）：図中の巨大な赤い光線と残光は、「赤兎馬」がもたらす絶対的な機動力優位を具象化している。呂布は正面交鋒を果敢に捨て、反対方向へ「ヒット・アンド・ランで逃げながら戦う」道を選んだ。

3、結論：生存をめぐる残酷な不等式

60 YS>30 YSという絶対的な武力差に基づき、呂布の戦闘モードは「逃走を主とし、受け・防御を従とする」形へ切り替わる。

後世にいう「呂布を戦不倒」として関羽・張飛のどちらか一人より呂布が強い証拠にする説は、実際には関羽・張飛の挟撃が完全に閉じる直前、呂布が赤兎馬の速度を正確に利用して「丁字」陣形の逃走口から抜け出したにすぎない。

4、備考：関羽参戦による戦局の質的变化

●→前文で導いた「張飛(1) = 呂布(1)」を前提とすれば、雲長が刀を携えて参戦した瞬間、戦力の天秤はただちに「関羽+張飛>呂布」へ傾く。原文を見よう：【雲長、馬を一拍し、八十二斤の青龍刀を舞わせ、呂布と戦う。三騎は丁字に廝殺し、さらに三十合戦う】。

◎→この一節が示す残酷な真相は、関羽が戦局へ加わった瞬間から、呂布はすでに逃走機構（丁字殺）を起動せざるを得なかったということだ。いわゆる【丁字兇廝殺】とは、関羽・張飛二人の挟撃の下で、呂布が「一合」たりともその場に踏みとどまって兵器を真正面からぶつけ合うことができず、馬力を頼みに動き回り、戦いながら逃げ続けた30合（水増しの大きい30合）にすぎない。結局これは武力強度公式の最も根本的な鉄則——2は絶対に1より大きい——へ帰着する。

◎→前節の解析を受ければ、呂布は三英の挟撃を10合も耐えられない（包囲網に閉じ込められ、「丁字殺」の遊撃戦術を使えないため）。振り返れば、呂布の「丁字殺」の価値は大幅に水増しされている。実際には関羽・張飛の連携を正面から1合すら受け切れず、ただ赤兎馬の神速の脚力へ頼って30合の追走戦へ無理やり引き延ばしただけなのである。

一、「丁字廝殺」：膠着か、それとも追撃か？

原文の「丁字廝殺」という語は、実は戦場の動的な軌跡を示している。もし呂布に二将と正面から対抗する力が本当にあったなら、陣形は「品」字型の膠着状態になるはずである。ところが「丁」字型の動的構造は、軍事力学上しばしば「追撃」を意味する。

1、呂布のヒット・アンド・ラン戦術

●→横軸の遮断（関羽・張飛）：「丁」字の横棒を構成する。二人が並走または挟撃し、広い正面から圧力をかける。

◎→縦軸の逃走（呂布）：「丁」字の縦の尾を構成する。これは攻撃路ではなく、関羽・張飛の挟撃下で呂布が赤兎馬の速度優位を利用して引き出した「撤退ベクトル」である。

2、結論

「丁字廝殺」は、呂布がその場に踏みとどまって攻撃を出し続ける陣地戦ではなく、呂布による「防御的機動戦（Hit and Run）」である。関羽が戦場へ加わったその瞬間から、呂布はすでに「逃走」の「丁字」モードへ切り替わっていた。

二、戦力ロジックの推論：1 VS 2という絶対的不利

前節ですでに、関羽と張飛の武力はいずれも呂布と伯仲することを示した。

1、戦力公式：関羽(1) + 張飛(1) > 呂布(1)。

2、戦況分析：2>1という絶対条件の下では、単独の呂布が正面決戦で二倍の戦力を打ち破ることはできない。呂布が30合まで耐えたのは、赤兎馬の速さと遊撃戦術の利によるところが大きい。

3、陣地戦へ転じた場合（その場で真正面からぶつかる）

仮に呂布が遊撃戦を捨て、その場で関羽・張飛と正面から打ち合ったなら、戦力比から逆算して15~20合以内に崩壊する恐れがある（三英がわずか10合で呂布を破ったことから逆算）。場合によっては陣中で討ち取られる危険さもある。

三、「戦不倒」：羅貫中の修辞に潜む隠蔽性

原文の「戦不倒」という三字は、文学的な錯覚を極めて生みやすい。読者は「引き分け」と受け取りがちだが、実質は「関羽・張飛の二人が短時間で呂布を討ち取れなかった」と

いうだけである。

1、戦術面

呂布は「逃げを主とし、戦いを従とする」。関羽・張飛は優勢を握っていても、逃走に徹し、しかも最高級の名馬を装備した相手を「敗北」から「撃殺」へ変えるには、より多くの時間を要する。

2、物語面（重要）

この時の劉備の考え【劉玄徳これを見て、心中ひそかに思う。「我いま手を下さず、いつを待つのか？」】は、劉備の目に映った戦況が「呂布は強い」ではなく、「呂布はすでに敗勢を見せている。今こそ戦果を刈り取る好機だ」であつたことを証明する。もし呂布が本当に余裕綽々なら、劉備が前へ出るのは自殺行為ではないか。まさに呂布が二英に絶境へ追い込まれていたからこそ、劉備は最後の一押しとして加わる勇気を持てたのである。

3、30合の真相

劉備が落ち着いて剣を抜き助太刀に入った反応から逆算すれば、呂布はこの30合の交鋒ですでに関羽・張飛の連携に圧制され、劣勢へ落ちていたことが分かる。世間の呂布支持者が吹聴する「30合引き分け」などでは決してない。

四、劉備——飛将の「戦不倒」を覆う「最後の布」

以上より、「戦不倒」は呂布の武力を飾る勲章ではなく、逃走能力の証明である。羅貫中が呂布を戦場で30合も持たせたのは、呂布が二英の一人より強いことを示すためではなく、「脚本構成」上の戦略的妥協——劉玄徳の大詰めの登場を待つためだった。もし劉備が剣を抜き前に関羽・張飛が呂布を虎牢関へ打ち戻してしまえば、「三英戦呂布」は成立せず、劉備も名を上げる場を失う。

したがって、呂布が二英の挟撃の中で辛うじて延命したこの30合は、「三英」の名声を成立させるため無理に引き延ばされた「物語上の緩衝帯」にすぎない。劉備の最終参戦は、戦場の膠着を破ったというより、呂布がすでに関羽・張飛二人に絶境へ追い込まれ、逃げ回っていた事実を覆う最後の布を冷酷に引き剥がしたのである！

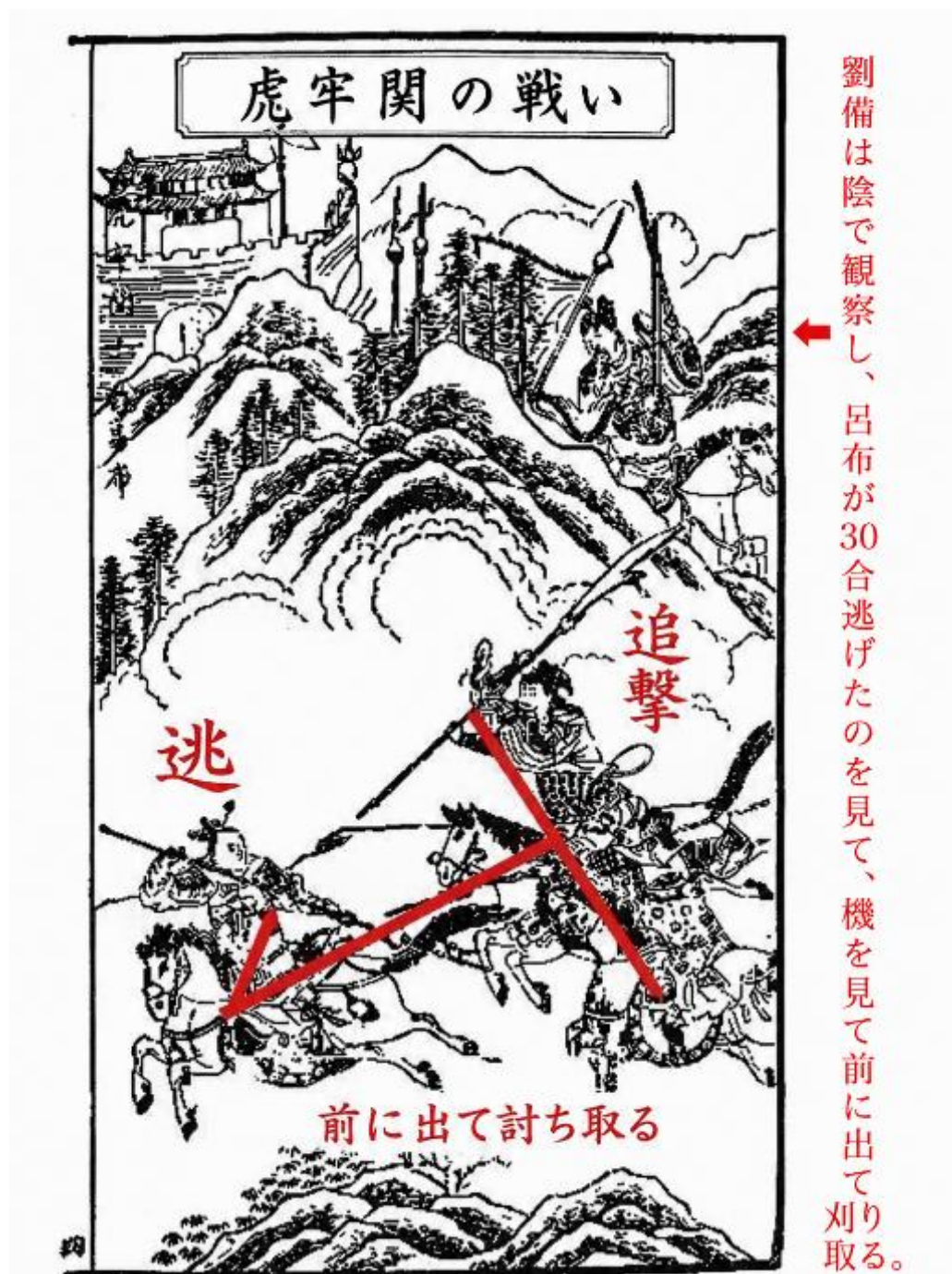
五、結論：虎牢関の呂布は三英の踏み台

前文の推論を総合すれば、二英が「戦不倒」とされた30合の实质は、呂布が狼狽して逃げ回った30合に等しい。さらに三英が揃った後のいわゆる「多時」で撃退された局面も、データ換算では呂布が三英の挟撃下で耐えたのは多くとも10合程度にすぎない。羅貫中がこの戦いを構築した本意は、三英の連携威力が呂布を完全に凌駕することを示すためであり、呂布が関羽・張飛のどちらか一人より強いと強調するためではない。

演義の壮大な物語において、劉備・関羽・張飛は天命を背負う主人公であり、呂布は結局のところ脇役にすぎない。本文上の位置づけは、後の顔良・文醜と同じである。顔良・文醜が関羽の武道登頂を引き立てる供物なら、虎牢関前の呂布は「三英」の威名を完成させる究極の踏み台なのである。

では、羅貫中は呂布を関羽・張飛より強く描こうとしたことがあるのか。虎牢関における二つの戦闘データを比較すれば一目瞭然である。羅氏は関羽に「1合」で猛将・華雄を瞬殺させた。一方の呂布は、華雄より武力がはるかに劣る方悦を相手にしても、1合以内に斬ることができなかった（注：交馬して5合にも満たず）。優劣は明白で、関羽の武力は明らかに呂布を上回る。

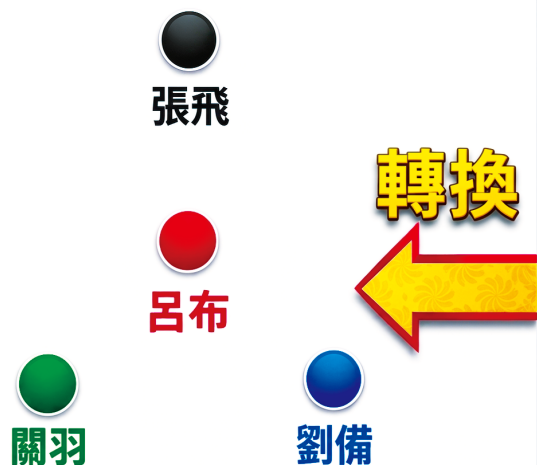
さらに張飛を論じよう。徐州の戦いでは、張飛が泥酔という極めて劣悪な状態にあったにもかかわらず、その恐るべき気迫だけで呂布を威圧し、前へ出て交鋒することをためらわせた。戦場における恐怖は、互いの実力を正確に見積もることから生じる。もし呂布が本当に支配級の絶対武力を持つなら、隙だらけの酔漢を前に、なぜ好機を逃さず一戦で首を取らなかったのか。この「敢えてせず」という事実は、呂布が張飛へ抱く、魂の深層から湧く強い警戒を完全に露呈している！



上図は、何年も前に名も知らぬ達人が作った「丁字殺」真相図である。筆者は大いに啓発を受け、この神図を長年大切に保存してきた（笑）。

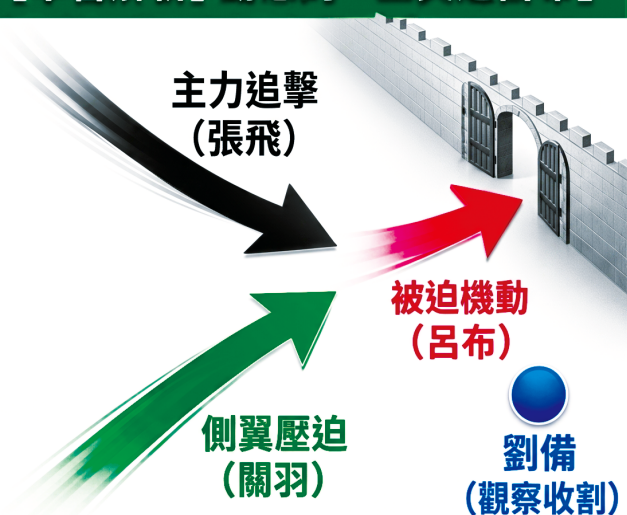
これこそ私が呂布の「三英戦」を読み解く上で最も重要な啓蒙者でもある。数十年前、世間がこぞって呂布を第一と持ち上げていた時代に、この人物はすでに並外れた見識を示していた。

【品字包圍】站樁的『三英戰呂布』



戰況：劉備堵住呂布逃打戰術(品字轉燈殺)

【本書解析】動態的『二英追呂布』



戰況：呂布讓關張追著打了30合
(丁字殺的真相)



結論：劉備的遲來介入，揭開了飛將早被追著打的最後一塊遮羞布。

【圖解の要点：「追撃離脱」から「窮獣の死闘」への戦術転換】

1、戦場態勢の再構成（Tactical Reconfiguration）

この陣形図は、世間の従来の単一視点を覆し、より戦慄すべき戦場の真相を示す。これは決して互角の定点包囲ではなく、一方向の追撃から発展した「強制急停止」である。

2、右図・第一段階：運動エネルギーの遮断（The Kinetic Block）

●→後方からの高圧駆動：緑と黒のベクトル矢印（関羽・張飛）は、極めて恐ろしい後方圧力を表す。前述の公式「関羽（1）＋張飛（1）＞呂布（1）」の通り、この死局を前に呂布は本来、赤兎馬の速度優位へ全力で頼り、戦術的な回避と撤退を続けていた。

●→致命的な遮断ノード：青色ノード（劉備）は、戦局を瞬時に変える絶対的変数である。劉備は決して無謀に危険へ飛び込んだのではなく、極めて正確な戦術眼で呂布の極限逃走ルートへびたりと「蓋」をした。

●→戦局急変：劉備の強力な参戦は呂布の逃走ベクトルを物理的に断ち切り、高速の「逃走運動エネルギー」を、その場で守る「定点ポテンシャル」へ強制変換させた。退路を失った呂布は、完全に【走馬灯のように斃殺する】（左図）「品」字型の肉挽き機へ閉じ込められた。

3、左図・第二段階：窮獣の死闘（The Cage of Despair）

●→【多時戦う】の残酷な真相：原文のこの短い三文字は、劉備が逃走路を断った後に起きた。呂布は死地へ追い込まれ、一人で三英の猛攻を真正面から受けることを強いられ、極めて高強度の陣地防御へ入った。

●→極限データの露出：これは虎牢関の戦い全体で、呂布が唯一「本当に」最高水準の武力を示した瞬間でもある。「ヒット・アンド・ラン」が不可能な絶対包囲網の中で、限界まで耐えたのはわずか10合ほどで、そこで崩壊した。

4、版本文言の決定的差異（劉備の武力）

●→「葉本」の確証

◎→原文：【呂布、架隔遮攔して定まらず、画戟を倒拖し、馬を飛ばしてすなわち走る】（葉本）。

◎→判定：劉備は自らの確かな実力で挟殺へ参加し、三英が力を合わせて呂布の防御を完全に打ち崩した。

●→「嘉本／毛本」の偽装

◎→原文：【呂布、架隔遮攔して定まらず、玄德の面上を見て一戟を刺す。玄德は急ぎ閃く。呂布、陣角を蕩開し、画戟を倒拖し、馬を飛ばしてすなわち走る】（嘉本、毛本）。

◎→判定：これは後人が羅氏の原文を勝手に改めた確証である！ 改訂者は蛇足を加え、劉備を包囲網の中で唯一の「柔らかい柿」、すなわち突破口へ仕立てようとした。この改変は呂布の敗走に言い訳を与えるだけでなく、劉玄徳の本来の武力を理由なく奪うものでもある。

第十二節：「囲攻された者は囲攻側の一人より強い」という論理的誤謬

戦例 254	文聘 VS (周泰+韓当)	文聘敗	短時間	文聘<周泰	敗者は、勝者の一人より強いことを証明できない
戦例 417	孫桓 VS (関興+張苞)	孫桓敗	短時間	孫桓<関興	敗者は、勝者の一人より強いことを証明できない
戦例 32	呂布 VS (三英)	呂布敗	約 10 合 (短時間)	呂布>張飛	論理的誤謬！ 呂布が必ずしも張飛より強いわけではない

表注：「短時間で敗れた者は勇を語るに足りない」。

武将の階級を論じる際、一般の読者は先入観による論理的罣へ陥りやすい——「挟撃を受ける者」は複数人の連携を引き出すほどのだから、その個人武力は当然、包囲側の誰よりも上だ、と考える。しかし厳密な武力推論体系では、これは単なる論理上の「十分条件ではない」命題にすぎない。

一、対照群：他武将における囲攻ロジック

「挟撃を受ける者が必ず最強とは限らない」という鉄則を検証するため、いったん呂布に対する美化フィルターを外し、呂布が関与しない二つの通常戦例を通して、冷徹に論理検証を行う。

1、【戦場実証：戦例254】文聘VS周泰+韓当

●→戦場動態：文聘は周泰・韓当二将の連携挟撃を受け、短時間で防ぎきれなくなり、敗走した。

◎→誤謬推論：もし「挟撃された者は必ず単独の攻撃者より強い」という荒唐無稽なロジックを当てはめれば、個人武力は「文聘>周泰」という結論になる。

◎→真相判定：しかし客観的な戦場データに従えば、文聘が周泰と一騎討ちして勝つことは明らかに難しい。

2、【戦場実証：戦例417】孫桓VS関興+張苞

●→戦場動態：孫桓は関興・張苞という二猛将の包囲攻撃を受け、同じく極短時間で狼狽して逃走した。

◎→誤謬推論：またこの謬論を盲目的に当てはめれば、「孫桓>関興」という常識に反する荒唐無稽な結果が出る。

◎→真相判定：実際には、関興一人の武力が孫桓を明らかに上回る。厳密な武道分析において、孫桓が「二将の連携挟撃」を受けたという戦場状況だけを根拠に、個人武力

を関興より上と誤判する者はいない。

二、実験群：呂布フィルターによる歪曲

このような客観的戦場鉄則を呂布へ当てはめると、一般の武評家は往々にして「ダブルスタンダード」のフィルターをかける。

【戦場実証：戦例32】呂布VS劉備＋関羽＋張飛

●→戦場動態：呂布は劉備・関羽・張飛の三英による包囲挟殺を受け、多くとも約10合しか耐えられず、すでに敗走した。

◎→二重基準の荒唐無稽さ：文聘や孫桓が包囲の中で速やかに潰敗しても、誰も彼らの個人武力が単独の攻撃者より上だとは誤判しない。では、呂布も三英の高圧挟撃の下で同じくわずか10合ほどしか持たずに狼狽して敗走したのに、なぜ世人は「呂布の武力は必ず関羽・張飛より強い」と盲信するのか？

三、黄金の閾値：「有効抵抗時間」の定義

「挟撃を受ける者」の真の戦力を精密に見分けるため、本書は「50合閾値論」を設け、包囲戦の純度と戦略価値を検証する絶対的な定量化基準とする。

絶対戦力指標：50合という極限障壁を突破する

包囲された武将が、敵陣の複数人による高圧挟殺の下で50合を超えてなお陣形を崩さず、敗勢も見せない。さらには趙子龍の長坂激戦（丸一昼夜の血戦）、典惡来の宛城死守（兵刃を振るい続け、刃が巻き潰れるまで）ほどに、肉体一つで絶境を受け止める——このような古今を震撼させる戦闘持続力を達成して初めて、その武将は「自らの絶対武力が、現場にいるどの囲攻者一人よりも完全に上である」と胸を張って宣言する資格を得る。

四、同一基準を呂布へ適用する：30合の「丁字」逃走

本書第十一節の戦場推論を振り返ろう。関羽が刀を携えて参戦し挟撃が形成された瞬間から、呂布はやむなく「逃走型」の回避戦術を起動し、関羽・張飛二人の「丁字陣」による高圧追撃の中で30合も逃げ回った。この段階を通じて、呂布は正面でその場に踏みとどまり、関羽・張飛二人の攻撃を真正面から受ける実質的な交鋒を1合すら行っていない。

戦力鑑定：閾値未達の飛将（30合未満の真相）

●→運動エネルギーの遮断と瞬間崩壊：劉備が本格的に参戦して初めて、呂布の逃走路は完全に遮断され、動き回ることをやめて陣地死闘へ転じることを強いられた。ところが退避不能の絶境では、呂布は多くとも約10合しか耐えられず、全防線が崩壊して狼狽しながら虎牢関へ逃げ戻った。

●→論理の鉄壁による封殺：呂布のように、正面交戦を強制されてわずか10合前後で防線が雪崩のように崩れる戦況は、軍事定量化上「絶対戦力の圧倒を受けた直後の瞬間崩壊」に典型的である。この冷たいデータが証明できるのは、せいぜい「呂布の武力は三英の合計へ遠く及ばない」ということだけであり、「呂布の武力は必ず張飛より上」という荒唐無稽な結論を逆向きに導くことは絶対にできない。

●→隠しようのないダブルスタンダード：まして前述の文聘・孫桓は、敵将の包囲を受けた際、耐えた交鋒合数が呂布のわずか10合を上回っていた可能性すらある。それでも一般の武評家は、彼らの武力が周泰や関興より上とは認定しない。なぜ呂布を評価する時だけ、世人は極端に歪んだ「ダブルスタンダード・フィルター」を堂々とかけ、呂布が張飛より強いと無理に擁護するのか。事実ではなく人物名で判断する——これは武評界の大きな誤謬である！

五、総括

残酷な戦場で、敵側に「包囲挟殺」を仕掛けさせること自体は、その武将が高い武力脅威を持つことの側面的証明となる。しかし「崩壊があまりにも速い」なら、その強者の光輪は消える。呂布が三英の高压挟撃下でわずかに耐えた後、速やかに敗れた（約10合）戦局の本質は、前述の文聘・孫桓と実質的に同じである。

本書の厳密な定量化体系では、その名が「呂布」であるというだけで、客観推論の公平な鉄則を無視することは許されない。敵方の包囲の中で「50合」という極限閾値を越えられずに狼狽して潰走した武将は誰であれ、このような敗戦を根拠として、包囲側の主力猛将の誰か一人より自分の個人武力が上だと称する資格は絶対でない！ とりわけ、許褚一人を相手にするにも200合かかる程度の実力なら、なおさらである。

第十三節：「有効な詐敗」と「無効な詐敗」の判別基準

『三国志演義』では、「詐敗」は高頻度で用いられる戦術である（拖刀計、敗走して敵を誘うなど）。しかし、すべての詐敗が無効なわけではない。本書は「戦闘合数」と「双方の強弱対比」に基づき、詐敗を「有効」と「無効」の二類へ分ける。

一、定義基準：合数の分水嶺

まず、筆者は基礎となる閾値を設定する。

閾値の定義

- 低合数戦闘：交戦20合以下で詐敗を実施した場合。
- 高合数戦闘：交戦50合以上を経てから詐敗を実施した場合。

二、有効な詐敗（High-Value Feint）：実力の証明

「有効な詐敗」とは、その戦術の実行過程そのものが、詐敗側に極めて高い武力コントロール権があることを証明できるものを指す。

1、状況：激戦後の詐敗（高合数）

- 定義：双方が50合以上激戦して勝負がつかない中、一方が自ら戦法を変えて詐敗する。

◎→判定：これは高度な戦術である。高強度の持久戦の最中にも冷静な頭脳を保ち、敵を誘う布石を打てることは、詐敗側の体力と精神がなお最良の状態にあることを示す。

2、状況：弱者が強者へ仕掛ける逆向きの詐敗（低合数）

- 定義：武力の低い者（または劣勢側）が20合以下で、武力の高い者に対して詐敗を成功させる。

◎→判定：この状況は価値が非常に高い。「格下が格上へ挑む」形であり、「戦術面での引き分け」とみなせる。

◎→理由：武力上位者の全力猛攻を受けながら、武力下位者は崩壊しないばかりか、演技をし、馬の速度を制御し、相手を正確に誘導するだけの「余力（Spare Capacity）」を残している。これは上位者の圧制力が相手の行動を封鎖できていないことを示すため、20合以内では武力上、引き分けとみなす。

三、無効な詐敗（Low-Value Feint）：単なる誘い餌

「無効な詐敗」とは、戦闘過程に対抗性が乏しく、武力の高低を測る参照座標にできないものを指す。

状況：強者が弱者へ順当に仕掛ける詐敗＋低合数

- 定義：武力上位者が20合以下で、武力下位者へ自ら詐敗する。

◎→判定：無効戦例。

◎→理由：強者は全力で応戦したのではなく、戦略目的（伏兵・誘敵など）のため意図的に力を抜いている。この詐敗は「下位互換的」な演技にすぎず、強者の武力下限をまったく測れないため、武力評価上の分析価値を持たない。

四、結論

「詐敗」という戦術の純度と価値を分析する核心は、武力下位者に「余力」が残っている

かどうかにある。厳密な武道定量化体系では、武力上位者が極限の物理高圧を加えているにもかかわらず、下位者がなお余裕を持って鋒をかわし、退却の戦闘テンポを落ち着いて主導できた時に限り、その「詐敗」を「有効な詐敗」とみなせる。

逆に、支配級の武力を持つ絶対強者が、下位の弱者へ仕掛ける誘敵の策にすぎないなら、それは実力断層による圧倒の中での戯れにすぎず、その「詐敗」は「無効な詐敗」とみなす。

第十四節：「恐有疏失」の信頼性検証

『三国志演義』の戦場描写を通覧すると、作者はしばしば陣前で見守る者（通常は高位にある主君や統帥）の心理的動揺を通して、交鋒の危険さを側面から際立たせる。その中でも「恐有疏失（もしものことがあってはならないと案じる）」という四字は、極めて頻出する戦場状況の表現である。

ところが一般の武評家は、しばしば致命的な論理の罟へ陥る。この種の「主観的な心理不安」を、乱暴にも「客観的な実力判定」と同一視し、さらに「心配された側は必ず劣勢にある」という荒唐無稽な結論まで導いてしまう。

そこで本節では、鉄のように堅い実戦データと戦例の交差比較によって、この「感情から理を推し量る」偽ロジックを徹底的に打ち砕き、「恐有疏失」を武力高低の定量化尺度として用いることが、いかに信頼できないかを証明する。

一、心理的不安VS戦場の現実

戦場で主君が抱く「恐有疏失」は、多くの場合、配下の愛将を守りたいという過剰な保護欲（いわゆる「心配するほど判断が乱れる」状態）から生じるものであり、戦局の防線が実際に崩れ始めたという客観的兆候を意味するわけではない。

劉備の主観視点における偏差

●→戦場対決（戦例336）：張飛VS馬超

◎→演義原文：【（劉備）嘆じて曰く、「真の丈夫なり！」。張飛にもしものことがあってはならぬと恐れ、急ぎ金を鳴らして軍を収める】。

◎→論理検証：もし劉備のこの時の主観判定が正確だった、すなわち張飛が本当に限界へ近づき、敗勢を見せ始めていたのなら、その後の交鋒でも戦局は不可逆的に張飛の疲弊と劣勢を示すはずである。

◎→実戦による反証：ところが、この戦いが最終局面まで続いた時、原文は明確に【馬超、張飛に勝つを得ずと見る】と記す。この確証は、張飛の戦闘粘りと持続力が、劉備の保守的な予測をはるかに上回っていたことを示す。したがって劉備の「恐」は心理面での過度な心配にすぎない。一句の「恐有疏失」だけで「馬超の武力は必ず張飛より強い」と早々に断定するのは、最終的な客観戦果と完全に矛盾する！

【テキスト分析】「恐有疎失」の信頼性検証

主君視点（主観的不安フィルター）

実戦現場（客観的な実力対照）



結論：案ずるがゆえに判断は乱れる。主君の「恐」は、しばしば過度の不安であり、武力差の鉄証ではない。

二、時間跨度による反証法

もし「恐有疏失」が本当に「実力不足」と等号で結ばれるなら、交鋒時間が延びるほど劣勢側は支えきれなくなり、敗勢が明確になるはずである。ところが戦闘データを交差比較すると、この謬論は容赦なく打ち碎かれる。

孫権の過剰な愛将保護と主観的不安

●→初回交鋒（戦例353）：凌統VS張遼

◎→戦場動態：両将は50合激戦し、勝負はつかなかった。

◎→観戦側の視点：孫権は凌統にもしものことがあつてはならぬと案じ、急ぎ呂蒙へ出陣を命じ、接応して陣営へ戻らせた。

◎→誤謬推論：この時の孫権の主観判断を盲信すれば、凌統は50合の時点ですでに力尽きかけ、敗勢を示していたと誤判しやすい。

●→二度目の死闘（戦例355）：凌統VS張遼

◎→戦場動態：両将は再び激戦を繰り広げ、この戦いでは80余合に及んでも、なお勝敗を分けられなかった！

◎→実戦による反証：もし凌統が初戦50合の時点で、孫権が心配したように「恐有疏失」の絶境へ近づいていたのなら、より長く苛烈な二度目の交鋒で、高強度の極限対抗を80余合まで引き延ばし、しかも少しも劣勢に陥らないなど、どうして可能だったのか？

◎→真相判定：明らかに、孫権が初戦50合で強引に介入したのは、主君が愛将を案じたことによる「戦術的保全」にすぎない！



三、総括

厳密な武力推論を行う際、論理上「陣外の味方が抱く主観的感情」と「交鋒する武将の客観的な戦闘表現」を厳格に区別しなければならない。

いわゆる「恐有疏失」は、せいぜい陣外の統帥が持つ心理的不安の閾値を反映するにすぎず、戦場に客観的に存在する実力差と等号で結ぶことはできない。演義原文がこの句の後に「刀法散乱」「氣力が続かない」など、防線崩壊を示す実質的な敗勢を明確に併せている場合を除き、戦陣の危険さを演出するための文学的修辞一つだけで武将間の強弱階級を決めようとするのは、まったく根拠がなく、本書が武力高低を判定する定量化基準にも絶対になり得ない！

第十五節：「飛び道具」も武力の中核要素

一部の武評家には、いわゆる「近接戦偏重（Melee Bias）」が存在する。刀・槍・剣・戟による近接戦闘だけを「武力」とみなし、弓矢などの遠距離攻撃手段を「暗器」あるいは「実力外の要因」として排除する考え方である。筆者はこれに断固反対する。弓矢を武力体系から除外することは、古代における武力の現実を大きく誤読する行為である。

一、歴史的ロジック：なぜ「弓」は「馬」より先なのか？

古くから「弓馬に熟達する」と言い、遠距離攻撃の「弓」を近戦の「馬」より先に置くことから、その地位は明らかである。書中でも武将の日常として、【『春秋左氏伝』を読むか、あるいは弓馬を演習する】、【終日用事なく、ただ城外へ行き弓を射て馬を走らせる】といった描写が繰り返される。もし弓矢が傍道にすぎないのなら、なぜ武将が毎日修める基礎科目となるのか。甘寧は弓矢で一騎討ちを勝ち取ることも多いが、それらは彼の武力表現ではないというのか。以上から、弓術は武将の通常戦力を構成する重要な一部である。

二、実戦の確証：勝敗を決める「超視距離攻撃」

弓矢は一騎討ちで「フィニッシュ技」または「逆転技」として決定的な役割を果たすことが多い。以下の戦例は、弓術が武力ピラミッド頂点の致命的一撃となることを十分に証明する。

1、【斬殺類】：生死を直接決める

- 戦例191：袁尚が3合未満で史煥を射殺（短時間撃破）。
- 戦例488：全琮が近接戦の後、薛喬を射殺（一騎討ちでの射殺）。

2、【撃敗類】：戦局を逆転、または優位を拡大

- 戦例398：龐徳は関羽と150余合激戦した後、弓矢で関羽を射傷し、最終勝利を得た。
- 戦例334：馬岱は魏延と十数合にも満たず戦い、詐敗した後に魏延を射傷した。
- 戦例172：文醜は張遼を射落とし、強大な騎射圧制力を示した。

三、結論

厳密な戦闘推論において、弓射の技は通常武力から遊離した「傍道」などではなく、「長距離へ延伸された武力」である。

完全で隙のない武力評価モデルを構築するなら、武将が遠距離兵器（飛び道具）を操る能力を中核的な定量化指標へ組み込まなければならない。そうしなければ、上述の武将たちの総合戦力を著しく過小評価し、実力を誤判することになる。羅貫中が原著で大量の筆墨を費やして描いた驚異的な弓術は、戦局を飾る添え物などではなく、最高峰の猛将の戦力図を形作るうえで欠かせない絶対的中核なのである！



第十六節：「百発百中」の発動メカニズムと弱点

『三国志演義』の武力体系には、原文で「絶対命中」属性を認定された三人の武将がいる。だが、いわゆる「百発百中」は無敵と同義なのか。顔を合わせた瞬間に相手を瞬殺できることを意味するのか？

一、「百発百中」三人組の原文

1、【弓矢】黄忠

原文：【百発百中……汝が箭、百発百中】。

2、【飛刀】祝融夫人

原文：【飛刀を使うを能くし、百発百中】。

3、【流星鎚】王双

原文：【三個の流星鎚を蔵し、敵に臨めば百発百中】。



二、論理的パラドックス：なぜ「開幕即斬」しないのか？

もし「百発百中」がいつでも使えるパッシブスキルなら、黄忠は開幕から一矢で関羽を射抜き、祝融は顔を合わせた瞬間に趙雲を仕留め、王双も直接張嶷を打ち殺せばよいはずである。ところが実際には、これらの強者は例外なく、まず高強度の近接戦闘を行っている（例：黄忠と関羽の百余合大戦）。論理的には極めて不自然だ。遠距離狙殺の神器を持ちながら、なぜ体力を浪費して白兵戦をする必要があるのか？

三、発動メカニズム：必要な前提条件——「詐敗」

実戦事例を分析すると、この三種類の「百発百中」必殺技には、いずれも厳格な「発動条件」が存在することが分かる。

実戦事例分析

●→黄忠が関羽を射る（戦例281）：先に【詐敗】し、関羽を迫撃へ誘い、射撃距離と直線

軌道を作る。

●→祝融が張嶷を射る（戦例451）：先に【馬を返して走る】ことで敵を深く誘い込み、振り返って飛刀を放つ。

●→王双が張嶷を打つ（戦例492）：先に【負けたふりをして詐敗】し、敵が追い迫ったところで流星鎚を突発的に放つ。

◎→解析：「百発百中」は瞬時に発動する技能ではなく、「詐敗」によって発射環境を構築しなければならない。詐敗後に敵が動かなければ、術者は「偽りが真になる」窮地へ陥る——ももとの「偽りの敗北」が「本当の敗北」となり、気まずく引き返して再戦せざるを得ないことさえある。つまり「詐敗環境」を作れなければ、この技能は使い道を失う。これこそ最大の制約である。

四、防御メカニズム：絶対命中≠絶対防御突破

「詐敗」の条件を満たしたとしても、「百発百中」が破解不能というわけではない。

戦例451（攻略例）：張嶷VS祝融

●→原文：【張嶷これを追う。飛刀一つ来たり、急ぎ手を用いてこれを隔てる。まさに左臂に中たり、身を翻して落馬する】。

◎→解析：張嶷は命中を受けたものの、「ガード」判定には成功し、本来致命傷になり得た攻撃を左腕の負傷へ軽減した（落馬はしたが、瞬殺はされなかった）。

五、総括：百発百中は精密な神技であって、必勝の鉄則ではない

世人が信奉する「百発百中」とは、実際には武将が「詐敗誘敵」に成功した瞬間に達成する絶対的な投射精度を意味するのであり、条件・防御・反応を無視する必勝の鉄則ではない。

この神技の発動には、少なくとも三重の制限がある。

第一に、先に「詐敗誘敵」の環境を構築しなければならない。

敵将が追わず、乱れず、功を焦らないなら、この技に最適な発射条件は作りにくい。

第二に、射角・距離・敵の防備の隙を確保しなければならない。

双方が正面から対峙し、敵将が全神経を集中して警戒していれば、遠距離の殺し技が奇襲効果を発揮できるとは限らない。

第三に、命中＝防御突破ではなく、防御突破＝致命傷でもない。

たとえ飛び道具が正確に命中しても、敵将は腕、兵器、甲冑、身法などで損傷を逸らし、本来致命的な一撃を非致命傷へ変える可能性がある。

言い換えれば、「百発百中」の本当に恐ろしい点は、考えなしの瞬殺ではなく、敵将を誤った戦術テンポへ引きずり込んだ後、追撃の瞬間に致命的な隠し手を放つことにある。それは精密さであり、奇襲であり、心理戦であり、さらに詐敗戦術の最終的な刈り取りでもある。敵将が罠を見抜かず功を焦って追えば、百発百中は勝敗を決め得る。しかし罠を見破って堅守し追わない、あるいは危急の瞬間にガードを完成させれば、いわゆる百発百中も兵器・甲冑・非致命部位へ「百発百中」するだけとなり、真の必殺へ変えることは難しい。

第十七節：武力変動理論——感情と絶境による「爆発」メカニズム



この図は、極限状態に置かれた戦士が一気に覚醒し、戦力が爆発的に上昇する瞬間を象徴的に表したイメージである。

本節では、平時から別段階へ跳躍する“覚醒型の戦力変化”を直感的に示す参考図として用いる。

羅貫中は『三国志演義』の武力体系を構築する際、武将を一定不変の数値として設定したのではなく、極めて劇的な「大幅な武力変動メカニズム」を導入した。すべての「古本」（毛宗崗による改変以前の版本、たとえば「葉本」「余本」「嘉本」など）では、武将が特定の感情や絶境に置かれた時、その武力が「大幅」、さらには「倍数級」に跳ね上がる描写がしばしば見られる。

一、「爆発」とは何か？

ここでいう「爆発」とは、武将が戦場で心理・生理の通常限界を突破する極限状態を指す。特定条件（主君を救いたい一心、極度の憤怒、生死の境など）が満たされると、武将は自身の壁を突き破り、平常時をはるかに超える武力を発揮する。

概念と文学的機能

●→心理学的定義：これは日本語でいう「火事場の馬鹿力（Hysterical Strength）」に極めて近い。人が絶境へ追い込まれた際、強制的に引き出される潜在能力を指し、その出力は平常時のほぼ2倍に達することもある。

●→文学的価値：『三国志演義』はあくまで小説であって史料ではない。羅貫中は大筋の

論理を保ちながら、意図的に主人公へ「2倍またはそれ以上」の力（例：武力90から200へ急上昇）を発揮させる。それは物語を進めるためであると同時に、読者の血を沸かせる劇的な張力を作るためでもある。

◎→解析：これこそ『三国志演義』が『三国志』より広く流布した重要な理由である。突き詰めれば、「爆発」メカニズムの目的は、物語を比類なく「面白くする」ことだ。戦いそのものが注目を集める鉄板であることを、羅貫中は早くからよく理解していた。これは男の生まれつきの性分でもある。

◎→ところが毛宗崗はこれを「去勢」した（合数の改変や描写の削除を通じて）。本来「2倍」に達する驚異的な爆発を、わずか「1.1倍」の小さな変動へ削り落としたのである（例：武力90の上限を99に封じる）。毛宗崗の目には、この凡庸な「合理性」こそ自らの考える論理に合っていたのだろう。しかし、それは戦場で最も真実味のある武力描写を消し去った。怒り、爆発する血肉ある英雄たちを、安定出力のロボットへ変えてしまったのである。それを美名として「合理的な論理修正」と呼んだにすぎない。

二、実戦データ：平常状態VS爆発状態

古本の戦例を交差比較すれば、この「まるで別人」のような差を明瞭に見ることができる。

1、【関羽：氣勢補正】

●→爆発状態（戦例25）：諸軍が天崩地裂のように喊声を上げて応援。関羽は1合で、より強い華雄を斬る（華雄は荀正より強い）。

●→平常状態（戦例109）：雰囲気による盛り上げなし。関羽は、より弱い荀正（荀正は華雄より弱い）を斬るにも2合を要する。

◎→結論：氣勢補正によって、関羽の瞬殺閾値は大幅に上昇する。

2、【許褚：復讐の炎】

●→爆発状態（戦例293）：状態爆発「歯を食いしばり、怒りに燃える」。1合未満で徐晃を馬から引きずり落とす。

●→平常状態（戦例107）：平静な心境。徐晃と50余合戦って引き分ける。

◎→結論：許褚の爆発力は、もともと均衡していた戦力構造を瞬時に打ち破ることができる。

3、【趙雲：絶境での主君救援】

●→爆発状態（戦例195・196）：劉備がまさに自刎しようとし、趙雲は主君を救いたい一心となる。1合未満で高覧を瞬殺。

●→平常状態（戦例216）：通常戦闘。呂曠を討つにも数合未満を要する。

◎→結論：主君を守るため、趙雲の武力上限は爆発的に跳ね上がる。

4、【張郃：窮獣の戦い】

●→爆発状態（戦例364）：状態爆発「死戦」。強敵の超一流・張飛を相手に60合耐えて敗れない。

●→平常状態（戦例299）：気が緩んだ状態。超一流の馬超を相手に3合未満で敗れる（嘉本）。

◎→結論：全力を出さなければ超一流に短時間で敗れるが、全力を尽くせば超一流へ50合以上耐えて敗れない。

5、【典韋：主君を守る一念】

●→爆発状態（戦例87）：典韋は【怒目して歯を食いしばり】、殺気をみなぎらせる。高順は抵抗しきれず、【倒走】の形となる。「倒走」とは正面から崩れ、足取りが乱れ、極めて狼狽した状態を意味する。

●→平常状態（戦例84）：典韋の通常交鋒状態。高順は勝てないが、【退入】して城内へ戻るだけである。「退入」は秩序ある戦術撤退であり、「倒走」が持つ崩壊感とはまったく異なる。

◎→結論：憤怒状態の典韋は打撃の強さが高順の重心を崩すほどに上がり、正常な撤退姿勢すら維持させない。

6、【張飛：「性起」の有無】

●→爆発状態（戦例32後半）：張飛が【性起】した爆発状態。虎牢関の呂布でさえ、もはや張飛の槍法を乱すことができず、最終的に両者は五分五分となる。

●→平常状態（戦例32前半）：張飛の通常状態。虎牢関の呂布は徐々に張飛の槍法を乱し、明確に優勢を占める。

◎→結論：張飛は「性起」による超常的発揮に頼っており、同一時間帯でも武力の「変動幅」が極めて大きい。

7、【張苞：無人の境】

●→爆発状態（戦例418・419）：状態爆発「無人の境を行くが如し」。1合未満で謝瑁を刺殺。

●→常態（戦例414）：特殊な状態なし。謝瑁と30合戦って勝負つかず。

◎→結論：「無人の境」状態によって、張苞は「二流武将」から瞬時に「一流武将」へ跳ね上がる。

8、【龐徳：奮力して主君を守る】

●→爆発状態（戦例390）：状態爆発【奮力】。魏延を打ち破って曹操を救う。

●→常態（戦例388）：平常状態。魏延を破ることができない。

◎→結論：主君が危機にあるか否かによって、龐徳の武力には巨大な高低差が生じる。

9、【黄忠：回光返照】

●→爆発状態（戦例423）：老将黄忠が【独り神威を奮い】、アドレナリンが爆発。数合にも満たず潘璋を破る。

●→常態（戦例424）：激情が過ぎ、常態へ戻る。数合戦っても、なお潘璋を仕留められない。

◎→結論：同じ相手（潘璋）、同じ時間帯でありながら、「神威」状態の有無だけで出力効率には天地ほどの差が生じる。

三、イメージで理解する：超サイヤ人モード

漫画で理解するなら、これは名作『ドラゴンボール』の孫悟空にたとえると分かりやすい。

戦闘力比較

●→常態・黒髪悟空：戦闘力300万。フリーザには勝てない。

◎→爆発状態・金髪悟空（クリリンの死を目撃）：怒りが変身を誘発し、戦闘力は1億5000万へ急上昇。瞬時に相手を圧倒する。

◎→解析：この概念を『三国志演義』の本文へ当てはめれば、一気に腑に落ちる。原著に見える「怒目して齒を食いしばる」「死力を尽くして激戦する」「神威を大いに奮う」「無人の境を行くが如し」といった極端な戦場描写は、単なる文学的修辞ではない。その根底の論理は本質的に、三国の猛将たちが特定の生死の圧力や極端な感情の下で、一時的かつ猛烈に発動する「超サイヤ人式の戦闘力覚醒」と同じなのである！

第十八節：武力変動に影響する三大要因

前節では、「状態爆発」がもたらす武力上限の突破を検討した。しかし戦場環境は刻一刻と変化する。内面的な感情だけでなく、無数の外的要因（Variables）が武将の実際の出力へ常時影響を与える。増益（Buff）をもたらすものもあるが、より多いのは致命的な減益（Debuff）である。

一、生理機能系（身体状態が基礎）

1、【加齢による衰退】（Age Debuff）

●→原文：【玄德曰く、吾すでに半百の年、鬚髭斑白……ことごとく皆老邁して用なし……老将は用なし……年老いて箭瘡に耐え難く、痛みて死すること旦夕にあり】。

◎→解析：劉備が50歳ですでに「鬚髭斑白」と嘆くことから、50歳前後から年齢が武力を客観的に侵食し始めることが分かる。75歳の黄忠は廉頗の勇を備えていたとはいえ、身体の回復力は大きく低下しており、矢傷を負った後「年老いて気衰え」たために死亡した。

2、【傷病】（Sickness／Injury Debuff）

●→傷：関羽は右腕に箭を受け、「終には右臂の力少なし」となり、戦闘力が直接低下した。

●→病：甘寧は「痢疾を患う」状態で出陣し、戦力が崩壊して最終的に射殺された。

3、【アルコール麻痺】（Intoxication Debuff）

●→原文：【許褚、諸将と共に飲み、覺えず大酔す】。

◎→解析：許褚は酔った状態で張飛と戦い、反応が鈍って1合で馬上から刺し落とされた。酒は胆力を増すことはあっても、最高峰の強者の対決では神経伝達を遅らせるだけである。

4、【体力枯渇／力怯】（Stamina Depletion）

●→原文：【戦うこと三合ならず、文醜力怯す】。

◎→解析：体力が崩壊すれば、一流武将でも瞬時に三流へ落ち得る。

二、装備・負重系（ハードウェア制約）

1、【防具欠如】（No Armor）

●→原文：【馬上の身に鎧甲なし】。

◎→解析：三英初登場時の【各々全身の鎧甲を製す】と比較すれば、趙雲が無甲で出陣することは巨大な武力上の不利である。

2、【武器欠如】（Unarmed）

●→原文：【卓、布の手中の戟を奪う。呂布すなわち走る】。

◎→解析：呂布ほどの強者でさえ、素手で方天画戟を持つ董卓に向き合えば、逃走を選ぶしかない。

3、【極限負重】（Heavy Burden）

●→原文：【阿斗を懷中に包み護る】。

◎→解析：趙雲が阿斗を抱えて戦うことは、物理的な負重を増すだけでなく、四肢の可動域まで制限する。極めて高難度の「負重訓練」に等しい。

三、戦場情勢系（環境と戦術）

1、【軍勢崩壊】（Morale Collapse）

●→原文：【東呉の諸将……その勢い当たるべからず……蘇飛慌ただしく走る】。

◎→解析：個人の武勇だけでは大勢に抗し難い。軍隊が崩壊すれば、武将の心理防線も連動して瓦解する（蘇飛など）。

2、【囲攻を受ける】（Ganked）

●→原文：【文聘・韓当・周泰の二将に挟撃され、抵敵しきれず走る】。

◎→解析：双拳は四手に敵わない。同級または準同級の複数武将から挟撃を受ければ、敗走するのは合理的な結果である。

3、【奇襲を受ける】（Ambush）

●→原文：【曹性……夏侯惇が近づいたのを見計らい、一箭まさに左目に中る】。

◎→解析：暗箭は防ぎ難い。注意力を分散させられた瞬間、防御力はほぼゼロへ近づく。

4、【準備不足】（Unprepared）

●→原文：【ゆえに敵を迎える準備をせず】。

◎→解析：顔良の死は、「まさに問わんと欲する時」の躊躇と、戦闘状態へ入っていないかったことに起因する。

5、【環境事故】（Environmental Hazard）

●→原文：【樹林に袖袍を引っ掛けられ、これにより龐徳に斬らる】。

◎→解析：これは全書でも屈指のやりきれない死に方で、顔良よりなお不運である。陳武は「衣服が木の枝に引っ掛かった」ために死んだ。戦場における最も荒唐無稽でありながら、同時に最も現実的な一面を示している。

四、総括：羅貫中の「不公平」の美学

多くの読者、とりわけ毛宗崗系版本の影響を受けた者は、しばしば一つの論理的罠へ陥る。「公平な対決」での勝敗だけが有効で、それ以外は「ノーカウント」だと考えるのである。これは重大な誤判である。

『三国志演義』が描くのは戦争であって、オリンピックではない。羅貫中は意図的にこうした「不公平」を配置した。顔良を不備の隙に死なせ、陳武を木の枝で死なせ、許褚を宿酔で敗れさせる。すべては一つの核心的真理を伝えるためである——あらゆる事には必ず原因があり、戦場のすべての変数は、羅貫中があらかじめ組み上げた「脚本」なのだ。

なぜ『三国志演義』の武力順位は数百年にわたって論争が絶えないのか。根本原因は、この作品が常に曖昧なグレーゾーンを行き来しているからである。すなわち「数学的ロジック（合数／ハードデータ）」と「文学的感性（物語上の強制死／不公平な死）」が混在した作品なのだ。

しかし毛宗崗は、この「灰色」を許容できなかった。彼は「合理性」という名の物差しで、羅貫中の世界を強引に修正しようとした。大量の合数を書き換え、武力体系を対称的で整然とした、論理的なものへ直そうとしたのである。だが、その意図的な「数学的修正」が、かえって羅貫中の「感性を重んじ、データを軽んじる」という原初的な志向を破壊したことには気づかなかった。

純粋な理性だけで三国武力を推導しようとした瞬間、すでに負けている。羅貫中が書いたのは「数学問題集」ではなく、無数の変数と悔恨に満ちた「英雄叙事詩」だからである。

第十九節：武力変動値——「固定点」から「波動区間」へ

第十七節の「武力変動理論」に基づき、一つの核心規則を確立しなければならない。武力は硬直した「固定値」ではなく、動的な「波動区間」である。そして、その区間は万人に等しくない。物語上の比重が大きい主要キャラクター（Hero）と、通り過ぎるだけの端役（NPC）とでは、変動幅に天地ほどの差がある。

一、波動幅の階級差（株式市場のローソク足に類似）

1、【主要キャラクター】：大幅変動

●→理由：登場場面が多く、長い時間軸を跨ぎ、感情の起伏も大きい（父の仇、主君救援の焦りなど）。

●→代表人物：関羽、張郃、趙雲など。

●→モデル式：基礎値 ± 10 （またはそれ以上）

◎→解析：彼らは戦場の主宰者であり、状態が良ければ「爆発」して神域へ届き、状態が悪ければ平凡な表現に終わることもある。

2、【脇役キャラクター】：小幅変動

●→理由：登場場面が少なく、通常は主役を引き立てる脇役、あるいは短時間で討ち取られる背景役である。作者も彼らに複雑な心理状態を与える必要がない。

●→代表人物：各路の雑魚、瞬殺される無名将領。

●→モデル式：基礎値 ± 1

◎→解析：彼らの表現は比較的安定している——安定して凡庸か、安定して死ぬ。

二、武力区間の試算

強弱をより精密に定量化するため、筆者は単一の「武力値」を「下限—基礎—上限」の三次元構造へ分解する。

1、【ケースA：最高峰の猛将（高波動）】

●→設定：基礎武力99。

●→変数：物語／感情の影響を受け、波動値は $-10 \sim +10$ 。

◎→最終武力区間：【89～109】。

◎→結論：下限は89（一流）だが、上限は109（近神級）へ届く。猛将が時に「事故る」一方、時に「瞬殺」できる理由はここにある。

2、【ケースB：二流以上の武将（中波動）】

●→設定：仮に阿斗の表面上の基礎値を84とする（仮想設定）。

●→変数：性格の不安定さや隠れた潜在力により、波動値は $-4 \sim +6$ 。

◎→最終武力区間：【80～90】。

◎→結論：これがいわゆる「隠れ武力」である。「84」という一点だけを見るのではなく、爆発時に「90」の閾値へ届き得ることを見なければならない。

3、【ケースC：二流以下の武将（低波動）】

●→設定：基礎武力70。

●→変数：物語上の加護が乏しく、波動値は $-1 \sim +1$ にとどまる。

◎→最終武力区間：【69～71】。

◎→結論：実力は一目で見通せる。驚きも事故もない。

三、ゲーム視点による検証：KOEI『三國志』からの示唆

この「表面上の数値」と「実際の表現」の落差は、古典的SLGである日本の光栄（KOEI）『三國志』シリーズにも早くから表れている。ベテランプレイヤーに馴染み深い「隠し数値」や「乱数（RNG）」の概念である。

1、【現象：弱者が強者を倒す乱数】（参考『光栄 三國志III』）

●→場面：武力104の顔良が、なんと武力109の関羽を返り討ちにする。

◎→解析：これが「上限武力」の作用である。顔良が波動上限を引き、関羽が波動下限にいるなら、弱者が強者を逆襲することも起こり得る。



2、【現象：数値を超えた瞬殺】（参考『光栄 三國志IV』）

●→場面：趙雲（武力98）と顔良（武力93）の表面差はわずか5点。ところが一騎討ち画面では、趙雲が開始直後、1合未満で顔良を瞬殺する。

◎→解析：5点差なら通常は容易に決着しない。にもかかわらず「瞬殺」できるということは、その瞬間の趙雲の「隠し上限」が120以上へ急上昇していた可能性を示す。これが脚本による「強制イベントキル」であり、武力が「大幅」に上振れる極致なのである。



四、総括

演義の武力体系において、武将の実力は硬直した絶対数値ではなく、動的に上下する「戦力波動曲線」である。極限爆発時の上限と、常態発揮時の下限との間には、しばしば極めて大きな戦力差が存在する。

第二十節：上限武力と下限武力——「田忌の競馬」の詭弁を打ち破る

羅貫中の武力の精髓を徹底的に理解するうえで、本節は最重要部分である。これは「毛本」と「古本」が袂を分かち最大の分水嶺でもある。毛宗崗が武力変動幅を意図的に縮め、公平な一騎討ちを強調した背景には、一つの巨大な企図が潜む。「戦場変数」（不公平な条件で勝った一騎討ちは無効結果とみなす）を抹殺し、偽りの「自称・公平な武力観」を築こうとしたのである。最大の争点である「馬超 VS 張飛」を例に、この論理的罠を解体する。

一、毛宗崗のマジック：「馬超＞張飛」という幻をどう作ったのか？

毛宗崗は「基準指標」の選択バイアスを利用し、鮮やかな目くらましを仕掛けた。

1、【基準指標A：張郃】（下限を利用して差を作る）

●→毛本の改変：馬超対張郃を「二十合でこれを破る」へ変更。

◎→武将比較：毛本では張飛が張郃と「三十余合」戦っても勝負がつかない。

◎→毛本の結論：同じ張郃を相手に、20合で撃破＞30合で撃破 → 馬超＞張飛。

◎→真相：馬超の「ハイライト（上限）」を、張飛の「通常発揮（下限／常態）」と比べている。典型的な錯位比較である。

2、【基準指標B：許褚】（公平性を利用して上限を抹殺）

●→馬超の戦績：公平な一騎討ちで許褚と230余合引き分け。

●→張飛の戦績：許褚と三度戦い、三度とも勝利（ただし軍敗・醉酒など不公平要因を含む）。

◎→毛本ロジック：張飛の勝利は「不公平」だからノーカウント。

◎→真相：毛宗崗は「不公平＝無効」と定義することで、張飛の「ハイライト（上限）」を強制的に遮断した。「毛本」はこのような手段で原著をこっそり改変し、張飛が許褚へ完勝した戦績の正当性を封殺した。その結果、張飛は「張郃」という基準系へ戻され、馬超に屈服させられる。

二、羅貫中の本意：許褚は張郃より上位の試金石

「毛本」のフィルターを外し、『三国志演義』の「古本」の論理へ戻れば、羅貫中の配置には別の深意が見えてくる。

許褚を基準指標とした解析

●→馬超の二重の狼狽：羅貫中は明確に【超これを懼れて敢えて動かず】と記す。これは馬超の心理面の狼狽である。さらに、

【馬超の槍桿を折る】。これは許褚が物理的に馬超へ与えた狼狽である。

●→張飛の三度の圧倒：張飛が許褚と戦う時、「懼れ」も狼狽も一切なく、あるのは「許褚、路を奪いて走る」「許褚を馬下に刺す」という優勢を示す描写だけである。

◎→論理推導：羅貫中は許褚を一枚の「鉄板」として設計した。馬超はその鉄板を蹴って平手となり、恐れ、狼狽した。一方、張飛はこの鉄板を繰り返し蹴り抜いている。これは論理上の構想であり、同時に文学的構成の実際的な応用でもある。

◎→羅貫中の真意：張飛＞馬超。

三、核心理論：「錯位比較」を拒絶する

上述の論理的罣を避けるため、筆者は全書で最も重要な評価原則——同次元比較（Dimension Alignment）を提示する。

1、【上限VS下限】（誤った田忌の競馬）

●→例：全盛期の関羽（顔良斬り）VS登場直後で装備のない趙雲。

◎→結果：関羽の完勝。しかし、これで関羽が趙雲より強いと言えるか？ 言えない。錯位比較だからである。

◎→応用：馬超対張郃の「上限」を、張飛対張郃の「下限／常態」と比べても、同様に何の意味もない。

2、【下限VS下限】（無意味な弱さ比べ）

●→例：刮骨療毒中の老年関羽VS戦も甲もないまま戦死した典韋。

◎→結果：より状態が悪い側が負けるだけである。これは悲惨さ比べであって、武力比較ではない。

3、【上限VS上限】（武力の精髓中の精髓）

●→定義：双方が最強状態にあり、最良の装備を備え、感情も最高潮へ達した時の対決。

◎→例：長坂橋頭の張飛VS虎牢関前の呂布。

◎→許褚は両者の上限を測る基準となる。「全盛張飛」と「全盛馬超」を比べて初めて、結論は検証に耐え得る。そして「許褚」という上位基準指標の前では、張飛の上限は明らかに馬超より高い。

四、ゴールデンクロス：弱者が逆襲する瞬間

極端な状況では、最上位級の武将が「下限の谷」にあり、次級武将が「上限爆発」にいる時、「武力ゴールデンクロス（Golden Cross）」が発生する。

ゲーム実証：KOEI『三國志VI』

KOEI『三國志 VI』の古典的ケースがまさにそれである。武力 100 の呂布が、武力 90 台の敵将から「一撃必殺」を受ける。これは Bug ではない。呂布の下限が弱キャラの上限とぶつかったのである。



批踢踢實業坊 > 看板 Koei 聯絡資訊 關於我們

作者 hsiuhsiu (全新的開始) 看板 Koei
 標題 [三國] 三國志6 單挑直接殺死對方
 時間 Mon Oct 24 22:11:56 2011

關羽 VS 馬岱

看準馬岱沒有「側面攻擊」的招式，
 雙方武力值又有一段差距，
 第一回合使出「一擊必殺」...
 結果馬岱竟然掛點了，跳出一個視窗「馬岱戰死了！」
 有點可惜，畢竟我覺得他不算是雜魚武將

請問有版友遇過相同狀況嗎？

--

<http://www.wretch.cc/blog/yakyuusagi>

--

* 發信站: 批踢踢實業坊(ptt.cc)
 ◆ From: 123.204.148.150
 → qhaabk:單挑死人雖不常有 只是還是有的 10/24 22:19

→ gaiaesque:武力90up都很有機會..尤其差距1x-2x以 10/24 22:21
 上

推 KKyosuke:一擊必殺或必殺技都有機率討死啊 San6 10/24 22:43
 有所謂的受傷值

→ KKyosuke:傷重到一定程度就會翹 一擊必殺有機率 10/24 22:44
 直接把健康的掛點

→ SNOW1127:有一次我呂布武力100-被武力9x的一擊必 10/24 22:52
 殺掉...

推 mattc123456c:喂~樓上你的呂布的方天戟到哪裡去 10/24 23:00
 了?太扯了

→ mattc123456c:是給了宋憲不成? 10/24 23:01

推 bigsha:郝昭曾被王雙的流星鎚"暗器"給KO掉.. 10/24 23:29

推 Alice27:有一次想說很少玩火球、火種那些，就試 10/24 23:32
 試看。沒想到太史慈

→ Alice27:一燒就..... 10/24 23:32

出典：PTT「光榮 三國志 VI」一騎討ち討論。呂布が武力 9X の武將に「1 合未満」で瞬殺された例。

五、武評の最高指導原則：上限VS上限

我々は「絶対に公平な一騎討ち」への盲信を徹底的に捨てなければならない。それは後世の毛宗崗派が原著の論理を覆い隠すために設けた思考の牢獄にすぎない。真の武道の拷問において、核心命題は常に一つだけである——「交鋒する双方がともに巔峰の極限へ登った時、どちらの戦力天井がより高いのか?」。したがって、世俗的に「不公平な一騎討ち」と呼ばれる状況にあっても、戦場で示された絶対的圧制力から、羅貫中が双方の強弱階級をどのように位置づけたのかを精密に読み取ることができる。

第二十一節：絶望の鉄則——軍隊の囲攻＞武将の囲攻

我々は「三英戦呂布」や「六将戦呂布」の英雄対決を好んで語るが、戦場で最も巨大かつ恐ろしい力——軍隊（The Army）を忘れがちである。羅貫中の設定では、個人の武勇がどれほど常軌を逸していても、編制された軍隊による包囲殲滅へ直面すれば、勝算は無限にゼロへ近づく。「個人 VS 軍隊」という残酷な方程式において、武将表現の天井は四字に尽きる——「敗れてなお栄誉あり」。

一、確証如山：英雄も兵海には抗し難い

1、【三英の極限】（戦例3）

●→戦況：劉備・関羽・張飛の三人が連携し、黄巾賊の軍隊と対峙。

◎→結果：三英は勝てない（敗北）。

◎→解析：三英ほどの強者でさえ、戦闘力の低い黄巾軍を相手に、兵力差によって敗退する。すなわち、軍隊＞三英。

2、【呂布の崩壊】（戦例63）

●→戦況：呂布が長安四路の軍馬による包囲攻撃を受ける。

◎→結果：呂布【急切】＋【敵し難し】。

◎→解析：「急切」の二字は非常に重い。呂布は軍隊を前に、息をつく暇さえなく、ほぼ瞬時に壊滅的な圧力を感じたことを示す。すなわち、軍隊＞呂布。

二、効率比較：軍隊の囲攻VS武将の囲攻

「軍隊の囲攻」と「武将の囲攻」の強度差を定量化するため、再び「共通基準指標：呂布」を導入し、圧制効率を測定する。

1、【場面A：軍隊が呂布を包囲】（戦例63）

●→過程：四路の軍馬が一斉に出撃。

◎→効率：軍隊は【急切】という短時間で呂布を破る。

◎→結論：圧制速度は極めて速く、呂布は瞬時に崩壊する。

2、【場面B：六将が呂布を囲攻】（戦例98）

●→過程：曹操麾下の六大将（許褚・典韋・夏侯惇・夏侯淵・李典・楽進）が囲攻。

◎→効率：呂布【負けて城へ帰る】。

◎→結論：呂布はしばらく耐えた後、最終的に敗れて城へ退く。圧制速度はより遅く、【急切】の段階には至らない。

3、【場面C：三英戦呂布】（戦例32）

●→過程：劉備・関羽・張飛の三人が囲攻。

◎→効率：呂布は【多時戦い】、遮りきれない。

◎→結論：三場面の中で、呂布が三英を相手に耐えた時間が最も長い。

4、三場面の結論

共通して呂布と交戦した結果から、軍隊＞六将＞三英。

三、総括：演義における最高規格の武力順位

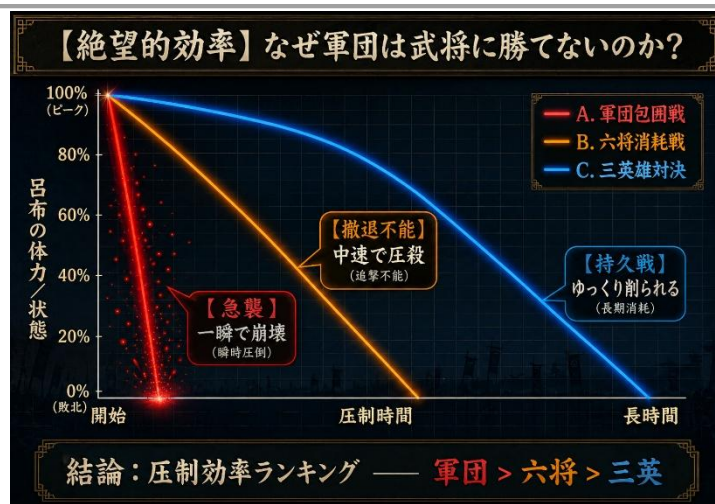
以上、呂布を核心として構築した実戦ロジックの連鎖から、極めて残酷で反論の余地のな

い「武力食物連鎖」を導き出すことができる。

合数の短さ：軍隊の囲攻（瞬時に駆逐）＞六将の囲攻（最終的に撃破）＞三英の囲攻（多
時で逼退）＞呂布（個人武力の極限）。

この冷酷な定量結果は、世俗武評にある「最高峰の猛将ならすべてを決められる」という
ロマン的幻想を完全に打ち砕く。『三国志演義』の真の戦場物理法則では、「最高規格の
武将合囲」（三英の挟撃、六将の連携など）でさえ、その破壊力と威圧力は「軍団編制に
よる合囲圧殺」には遠く及ばない。

これこそ最も現実的な戦争の底色である。個人の勇武がどれほど常識外れであっても、集
団軍陣の絶対的な物理質量の前では、結局は塵のように小さい。趙子龍が長坂坡の百万大
軍で無人の境を行くが如く駆け抜けた叙事詩的な伝説でさえ、巨視的な戦略尺度では、極
端な条件下で発動した「戦術的奇跡」にすぎない。どれほど眩しくとも一瞬の花であり、
「個人武力は兵海の絞殺に抗し難い」という根底にある物理法則の鉄則を揺るがすことは
できない！ 長坂の趙雲も同様に、ただ「敗れてなお栄誉あり」なのである！



【図解の要点：絶望的な効率差】

1、データ戦術解析 (Tactical Data Analysis)

●→曲線1：赤の急落（軍隊 The Army）

◎→物理フォーマット化：曲線は垂直に落下し、原文【急切にして敵し難し】へ対応する。軍隊の飽和攻撃は一騎討ちの作法など無視し、呂布の生存空間は $t=0$ で瞬時にゼロとなる。

●→曲線2：黄線の折殺（六将 The Six Generals）

◎→戦術的斬首：傾きは急で、【負けて城へ帰る】に対応。六将の総出力（DPS）が溢れ、瞬時に呂布の招架上限を突破する。

●→曲線3：青線の纏闘（三英 The Three Heroes）

◎→長時間消耗：曲線は緩やかで、【多時戦う】に対応。三英はゆっくり削ることしかできず、軍隊の強度が三英より上であることを示す。

2、総括：圧制効率の階梯 (Efficiency Hierarchy)

●→合数の長短：瞬時敗北（赤）、短時間敗北（黄）、長期戦敗北（青）。

●→武力強度：軍隊＞六将＞三英。

第二十二節：【十二維ビッグデータモデル】——三国武力の基準を再構築する

一、序言：六百年來の強弱論争を終わらせる

演義武評の究極難題は、いかに「感情フィルター」を剥ぎ取り、トップ10の強者の最終順位を決めるかにある。「関公と秦瓊を戦わせる」式の主観的臆測を排除するため、筆者は独自に「十二項武力指標比較」（12 Martial Arts Indicators）を考案し、演義の最高峰の猛将へ厳密な武力積分モデルを構築した。

本研究の核心目的は、羅貫中が字句の間へ隠した「作者の意図」を「ハードコアデータ」へ翻訳することにある。データは決して嘘をつかない。これは原著の魂へ直撃し、最も客観的で歴史的検証にも耐え得る究極の武力ランキングとなる。



これは決して普通のレーダーチャートではない。『三国志演義』武将の強弱を徹底的に解体する「データモデル図」である。筆者は武将の総合武力を十二の次元能力値（12-Dimensional Ability Values）へ精密に分解し、機能に応じて三つの核心領域へ分類する。

1、【●●●核心攻撃領域】（9積分）：「武力階級」を決める基礎

●→構成：ATK（Core Offense）= BOU（100合評価）+ CRO（交差比較）+ BIA（作者偏愛）。

◎→解析：この三指標の合計が、その武将の「核心攻撃能力ATK（Core Offense）」となる。「超一流」か「一流」かを判定する絶対的な主軸である。

2、【●●●基礎属性領域】（6積分）：武将の「ハード実力」

●→構成：POW（膂力）、CRT（暴撃）、EVA（回避）、DEF（防御）、STA（体力）、GEA（装備）。

◎→解析：高強度戦闘を支える物理的基礎であり、戦場での持続力と許容誤差を決める。